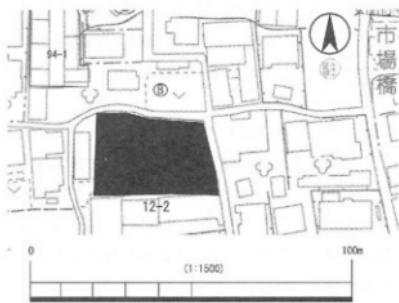


第16節 私部城東の調査

第1項 2012 - 2次調査

(1) 地点と調査に至る経過

本調査地は、通称四郭の南東に位置し、出郭とみられる光通寺からみると北東にあたる。宇市の範囲内に位置する。現在は北北西から南南東に軸を持つ町割りに沿って住宅地が並ぶ。城域が東へ張り出した標高が高い地点に位置する。



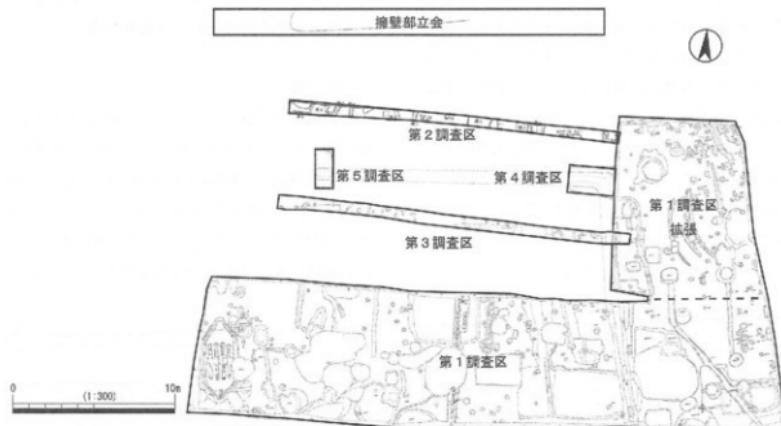
第278図 2012 - 2次 調査地位置図

従来の網張り研究において馬部隆弘氏により、四郭に付属する外郭形虎口の可能性が指摘された（馬部2009）。また、百々川より南方へ堀が延長する可能性も想定されるなど、私部城の東端を確定する上で重要な地点であった。

宅地開発に先立ち調査を実施したところ、現地表下數十cmで地山層の上層に、瓦器挽片を含む層の堆積が認められた。遺構破壊が及ぶ範囲は敷地の一部だったが、城域確定のため、原因者と協議の上、本発掘調査を実施した。

第1調査区は当初調査地南半に南北約9m、東西約36mで設定し、その後北東に拡張したが、遺構密度が高く、調査期間が不足したため、第2・3調査区は規模を限定し東西方向に設定し、第1調査区で確認された南北方向の溝等の延長を確認した。この中で、中世段階の区画溝の延長は確認できていなかったため、補足的に第4・5調査区を設定した。

工事に伴い擁壁設置がされる範囲については立会調査を実施した。



第279図 2012 - 2次 調査区割図

(2) 層序 (第 280 ~ 285 図)

(a) 現代表土～近世堆積層

調査区の主要断面図を第 280 図から第 285 図に示した。現代土は調査地東半では宅地化した整地土、調査地西半では耕作土層である。第 1 調査区北壁 (第 283 図) 第 12 層まで、同拡張北壁 (第 285 図) 第 10 層まで、第 2 調査区北壁 (第 281 図) 第 9 層まで、第 3 調査区北壁 (第 282 図) 第 9 層までが対応する。第 1 調査区南・東壁では大半が同層である。

表土直下では近世以後の堆積層が堆積し、下面は地盤層が大きく削平されていた。また、達磨窯など近世以後の瓦生産関連遺構 (第 1 調査区南壁第 1 ~ 6 層)・土取り穴・廃棄土坑などの可能性がある巨大な土坑なども検出された。

(b) 近世初頃～中世末遺構埋土・整地土

近世遺構の著しい改変・堆積層の下面で、幅広い時代の遺構埋土が残存していた。同層は、近世の擾乱層に切られるが、後述の 14 ~ 15 世紀頃を中心とした遺構埋土上に堆積する。出土遺物は中世遺物を含むほか、37 溝中に 17 世紀頃の古錢が含まれる他は近世以後の遺物を含まず、中世の終わりから近世の初め頃までに埋没したものとみられる。第 1 調査区北壁第 13 ~ 16 層まで、第 2 調査区北壁第 11 ~ 12 層まで、第 3 調査区北壁第 10 ~ 16 層までが対応する。第 1 調査区南壁第 7 ~ 9 層にあたる。

遺構の方位軸が確認できるものでは、37 溝など南北の正方位に軸をとるものが多い。これは本調査地内では特殊なものである。

(c) 中世遺構埋土

近世初め頃までの層により整地された層の下面で検出された。複数段階に区分される。遺構の中で確認することとしたい。

区画溝 (10 溝) とピット群 屋敷地を区画するとみられる推定 20m 四方以上の区画溝およびピット群が検出された。出土遺物から 14 ~ 16 世紀頃と時期幅は長い。確認できる遺構の方位軸は北西北から南南東に傾く。

不定方向の溝・ピット群 10 溝に切られる遺構群である。この段階でもピット群は認められるが、その合間に認められる溝はおおむね北西北から南南東にのびるが形態が一定しない。

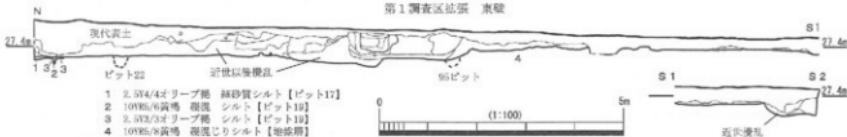
(d) 弥生時代遺構埋土

主に調査地北東の第 1 調査区拡張区で弥生時代のピット群、溝が確認された。建物跡として復元されるものを含み、集落の一部と認められる。遺物はサヌカイト剝片・弥生土器小片などをぐくわずかに含み、弥生時代中期頃のものと考えられる。

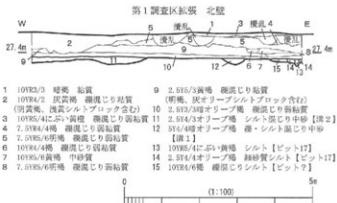
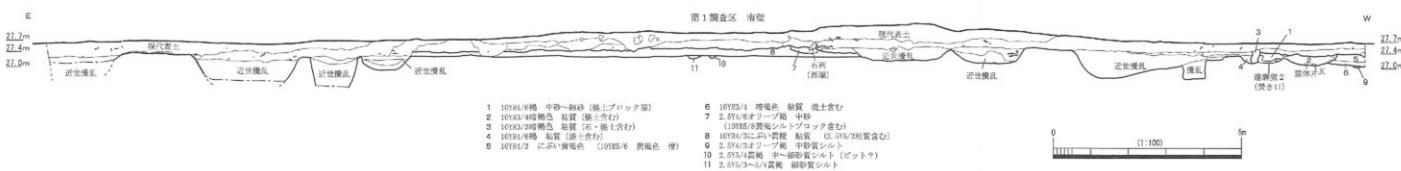
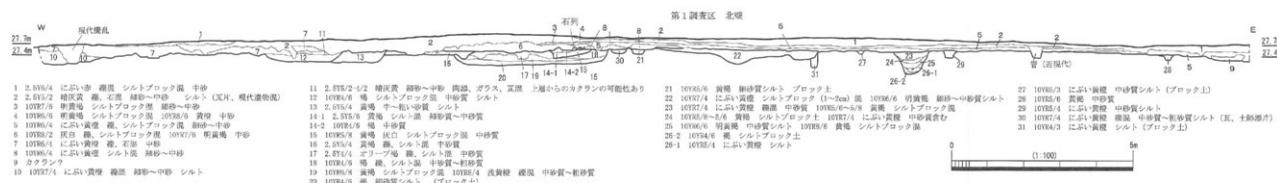
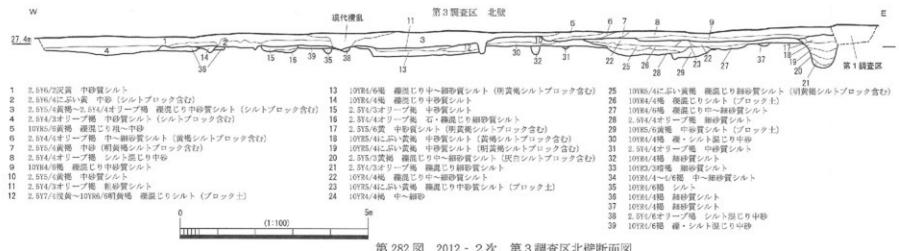
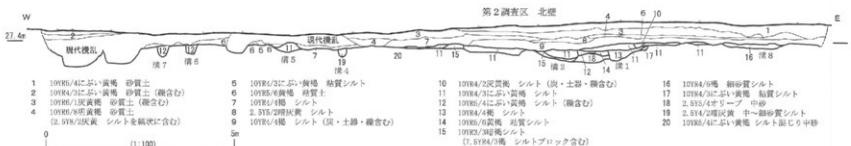
ピット群は深く埋土を残すものも多いが、建物周溝の埋土は浅いものである。近世の堆積層により上部を大きく削平された可能性が高い。

(e) 地山層

明黄褐色の堅固なシルト・粘土層で、白色礫が多く混じる。その上面は後世の改変により削平される。東西方向の傾斜は調査地中央で T.P. 27.6m 前後と高く、調査地西端、東端で T.P. 27.3 ~ 27.4m 前後と低くなる。南北方向の傾斜は小さい。私部城跡の周辺地の中では最高所の一つである。



第 280 図 2012 - 2 次 調査区東壁断面図



(3) 近世以後の遺構と遺物

遺構全体図は第298図に示した。次に、各期の遺構を整理しておきたい。近世以後の遺構は調査区全面で多量に検出された。多様な遺構が存在する。これらのうち、溝や達磨窯の軸は、北北西から南南東をとり、現在の町割りにも踏襲される。

(a) 井戸

垂直に掘り込まれた井戸痕跡を調査区東半で6基確認した。井戸枠は検出されておらず、素掘り井戸とみられる。瓦などの多量の近世遺物のほか、井戸1では中世瓦も混入していた。また、ピット32~36は井戸に伴う建造物の痕跡と考えられる。

(b) 溝

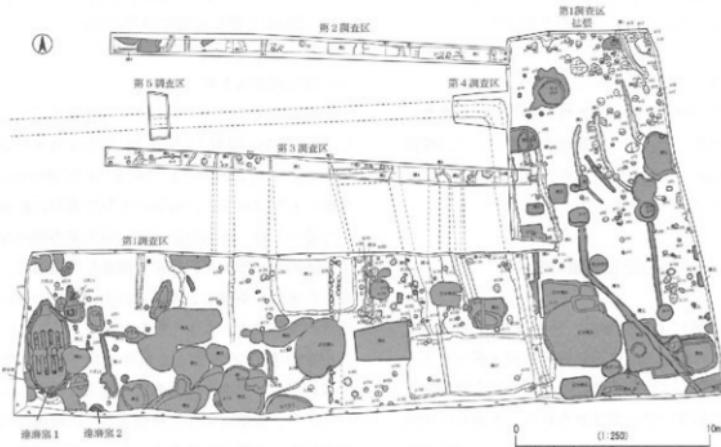
井戸に接続するものが認められ、関連した導水施設などの可能性が考えられる。町割り方向のものである。

(c) 近世以降の達磨窯と関連遺構

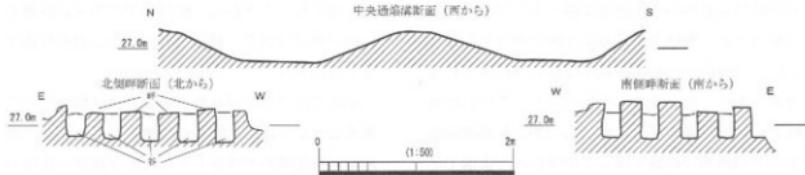
調査区西端で達磨窯跡を2基検出した。

達磨窯跡1は下部構造を良好に残す。地盤層を掘り込んだ半地下式の構造で、全長4.8m、幅2.4mである。焼成室の畔は4条、谷が5条である。畔部は平瓦と粘土を交互に積み重ね、小口面に丸・平瓦を立てた状態で置いて形成している。窯体の南西に、調査区外に排水溝が延びる。

形態と規模は、奈良市西笠鉢遺跡瓦窯跡に類似



第286図 2012・2次 近世以後遺構・攢乱平面図



第287図 2012・2次 第1調査区達磨窯1断面図

する。18世紀前半と報告されるが、藤原学氏によれば近代に近いものとされる（藤原2002）。

達磨窯跡2は焚口の一部のみを検出した。その廃絶時の埋土が達磨窯1の焚口を切りこんでおり、達磨窯1より後に廃絶したとわかる。

出土瓦は棟瓦・丸瓦・平瓦が認められた。詳細な年代は不詳ながら、近世でも比較的新しい19世紀頃のものとみられる。明治の地籍図に記載がないため近世の間に廃絶したものとみられる。

また、2基の達磨窯の周辺には、瓦片・石などを含む焼土により埋没する土坑10・11・12・7などが付随していた。これら出土遺物と堆積層から達磨窯の操業に関連する遺構と捉えられる。

交野では近世から近現代まで瓦生産が知られていたが（交野市文化財事業団2012ほか）、瓦窯の調査例としては初めてのものとなった。

(d) 土坑

土取りや廃棄目的の可能性が考えられる多数の土坑を確認した。また、規模の大きいものは深度も2m前後となるものがあり、地下式土坑として機能した可能性もある。

(4) 中世末から近世初頭の遺構

近世遺構により切られ、16世紀頃までの中世遺構上に堆積する。落ち込み・石列・溝・ピットなどを確認している。特に、南北の正方位を軸とするものが多いことが注目される。本調査区内地内では、当該期以外の遺構では、現在および近現代や、後述する15世紀前後の私部の集落域の町割りの軸は北北西から南南東に傾くものである。今回検出された遺構の軸は私部全体の中でみると珍しいものであり、私部城域中心部のみにみられる地割である。出土遺物の年代からも、これらの遺構が私部城段階に伴っていたものか、私部城段階後にその地割の影響を残して形成された遺構である可能性が考えられる。

(a) 落ち込み

調査地北端の擁壁部立会調査で確認した。限定的な調査であり、幅・深さとともに確認できていない。少なくとも幅1.5m以上、深さ1m以上のもので、塙状に復元される可能性が高い。その方角は西南西から東北東にのびる。また調査地西側に切れ目があり、ここに通路が存在したと考えられる。

埋土の中位から、遺構の埋没に伴って廃棄された丸瓦が多く出土した。出土遺物の一部は本邦出土瓦と類似するものも含まれる。近世遺物は含まれない。おおむね16世紀代に機能し、埋没したものと考えられる。私部城期にも機能していた可能性が高い。なお、方位軸が後述の区画構に近いことからは、開削された時期は区画溝と同じく14～15世紀頃に遡る可能性が考えられる。

(b) 第1調査区石列

地盤層由来のブロック上により地囗めがなされた上に(第283図第14～15層、第284図第7層)、1段の石列が2列並行して南北方向に置かれる。西側の石列は西側に、東側の石列は東側に面を揃えて並べられ、石列の間は地盤層由来の堅固な盛土が込められる。2列一組で機能した遺構で、堀などの区画の基礎部と考えられる。石列の南半は近世の擾乱により大きく損なわれる。

中世の溝15の埋土上に形成されており、調査中は近現代の宅地に伴う遺構と考えていた。しかしながら、航空写真等で精査すると、近現代の家屋の位置・方角とされることから、近現代のものである可能性はなくなった。また、近世の擾乱により切られることから、近世の中でも古い段階のものと推定できる。層序からは中世に遡る可能性も十分にある。

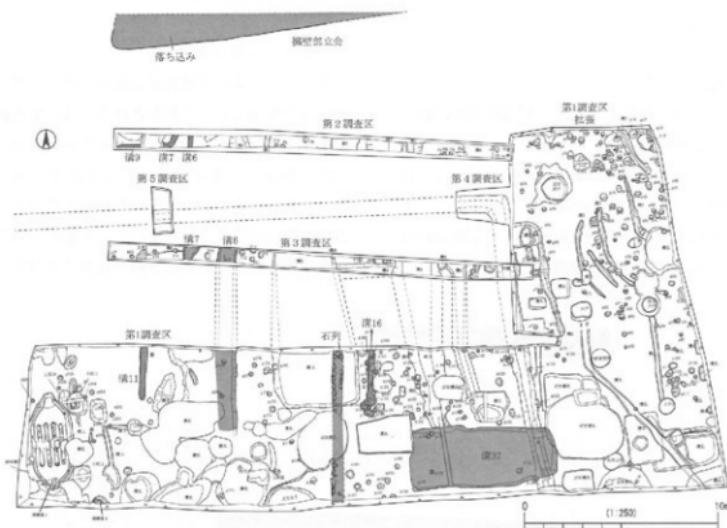
南北方向の方位軸が私部城中心部に残るものであることからは私部城期の遺構、もしくはその地割が私部集落内で残存していた近世段階の遺構の可能性が考えられる。

(c) 第1調査区溝16とピット群

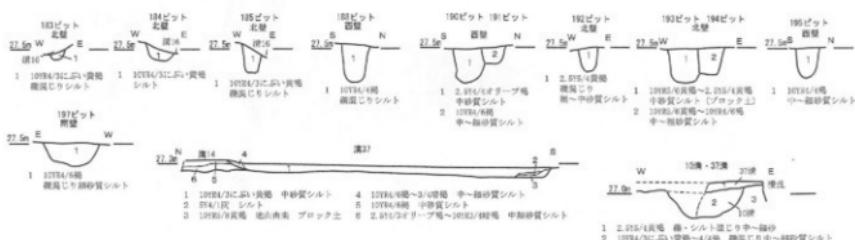
第1調査区溝16は石列の東に位置する南北方向の溝で、幅0.4m、深さ13～16cmである。その周辺にはピット183～185・188・190～195・197が密集する。埋土は類似しており、溝とピットは一連のものと考えられる。柵列・板塀などの区画施設の痕跡と考えられる。層序から石列や溝37と併存した可能性がある。

(d) 溝37

東西にのびる幅広の深い溝である。西が高く、緩やかに東へと低く傾斜する。その形態や埋土から池などの可能性は低い。通路の痕跡とみられる。溝10を切り、近世の擾乱に切られる関係からおおむね16世紀頃から近世前期までの時期幅が考えられる。溝16などと関連して機能したものと考えられる。



第288図 2012-2次 中世末～近世初頭遺構平面図



第289図 2012-2次 中世末～近世初頭遺構断面図

(d) その他の溝

第2調査区溝6 石列の西に位置する溝である。土地区画などの痕跡か。埋土上部から瓦片が一点出土している。

第1調査区溝13 南北方向の細い溝である。

第2調査区溝6・7・9 調査区東端で検出された。溝6は南北にのびるものである。溝7・9は攪乱により分断されるが、一連のものとみられ、調査区中ほどまで溝6と並行し、直角に屈曲し、西へのびる。

(e) 小結

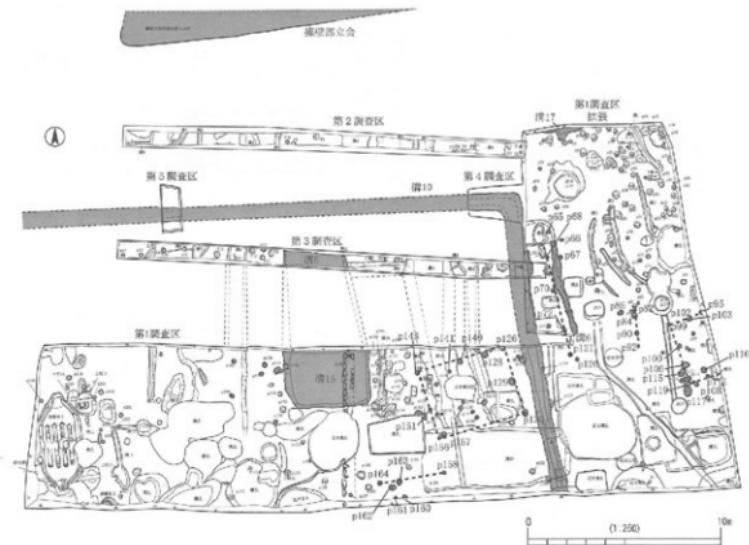
南北の正方位軸にもとづき、私部集落内において異質の遺構群である。出土遺物から年代比定は難しいが、他の遺構との切り合い関係からは、16世紀頃から17世紀頃の時期幅が与えられる。相前後する時期に正方位軸を取り入れて築城される私部城と密接に関連する遺構群と考えられる。

(5) 区画溝と中世遺構

10溝によってL字状の区画が存在し、その内側にピット、溝などの遺構が集中している。これらの主要遺構の軸はすでに現在の私部の町割りに近いものとなっていることが注目される。区画を伴うことや、出土遺物の内容からは、14世紀頃に始まり、15世紀頃を中心として、私部の有力者が所在したことを示す。

(a) 溝10(中世区画溝)

第1・3・4・5調査区で確認した。上部は近世以後の整地によって削平される。残存する範囲の深さ80~90cm、幅0.7~1mである。第1調査区で検出し、第4調査区でほぼ直角に西に曲がって延長することを確認した。第5調査区ではさらに西に続くことがわかった。現地形からみると当該調査地点の西側に道路が屈曲する箇所が認



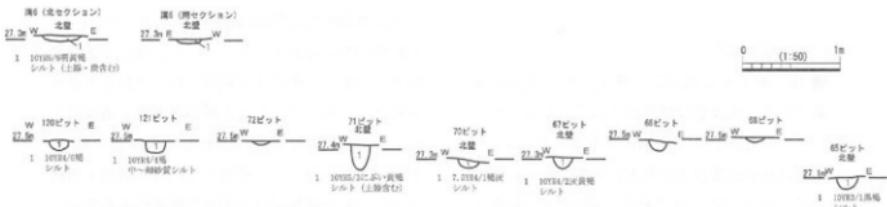
第290図 2012-2次 中世区画溝・関連遺構平面図

められ、この道路屈曲部付近より西では標高が低くなる。この地形状況からこの付近に同区画溝の西端が埋没していると推測する。この場合、東西

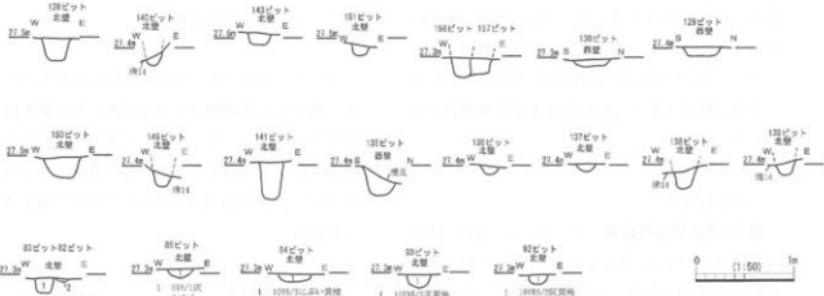
長はおよそ 30m になる。

土師器・陶磁器・瓦など多くの遺物が出土している。出土遺物と切り合い関係から、開削時期は、

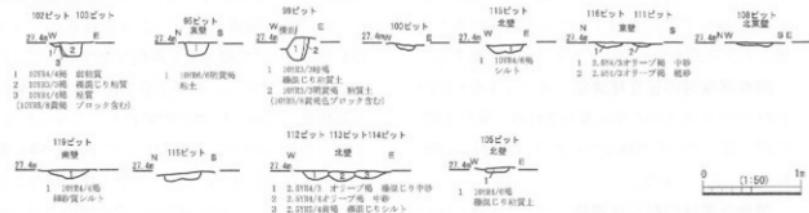
図6とピット跡(渠10東の溝・排列)



渠10西の掘立柱遺物



調査区東端の掘立柱遺物



調査区南端の掘立柱遺物



第291図 2012-2次 第1調査区中世遺構(区画溝併行期)断面図

瓦器椀が残存する14世紀前半頃まで遡る可能性がある。最も新しい年代の遺物としては15世紀頃までの遺物が含まれる。14世紀から15世紀頃を中心に機能し、おおむね16世紀代の前半頃までに埋没したものと考えられる。

(b) その他の溝など

溝15 第1・3調査区で検出した。幅広く浅い溝である。底面がほぼ平坦である。ブロック土混じりであるが、シルト層により埋没しており、人為的に掘り込まれた池などの痕跡である可能性がある。出土遺物は含まれず、層序から10溝と併行するものとみられる。

溝6 溝10の東で検出した。細く浅い溝で、溝10とほぼ平行する。同一方向にピット68・70・72・121などのピット列が並ぶ。遺物は図化し得ないほどの細片を含むのみであるが、溝10と方向が類似することから関連する区画施設の痕跡とみられる。

(c) 挖立柱建物

溝10西の掘立柱建物 ピット128・126・140・156・130などから復元される。梁行2間、桁行4間の東西棟である。桁行4.8m、梁行3.8mで平面積はおよそ18m²をはかる。出土遺物は土器等の細片に限定されるが、層序と切り合い関係、および溝10と方向が類似することから同時期の遺構と考えられる。周辺に他のピットも密集する。

調査区東端の掘立柱建物 ピット100・102・103・112・95などから推定復元される。梁行3間、桁行2間以上の東西棟とみられる。梁行は3.5m、桁行2m以上である。

調査区南端の掘立柱建物 ピット158・163・164が一列に並ぶ。梁行3間の南北棟の建物跡の可能性がある。その場合の梁行は3.5mである。柵列の可能性もある。

(d) 小結

区画溝を中心とした建物・溝などの遺構群が検出された。14世紀頃に年代を遡りうることからは、中世の私部集落で勢力をのばした地域の有力者層の居住地と推定できる。

本調査地点では仮具は認められなかったが、瓦もわずかながら出土することから、周辺で光通寺などの寺院や、その関連施設が検出される可能性も考えられる。こうした規模の区画溝と遺構群については同時期の私部南遺跡でも未確認であり、中世の私部において、卓越した内容の遺構・遺物である。私部城築城以前の私部集落の中心部の一つと評価できる。

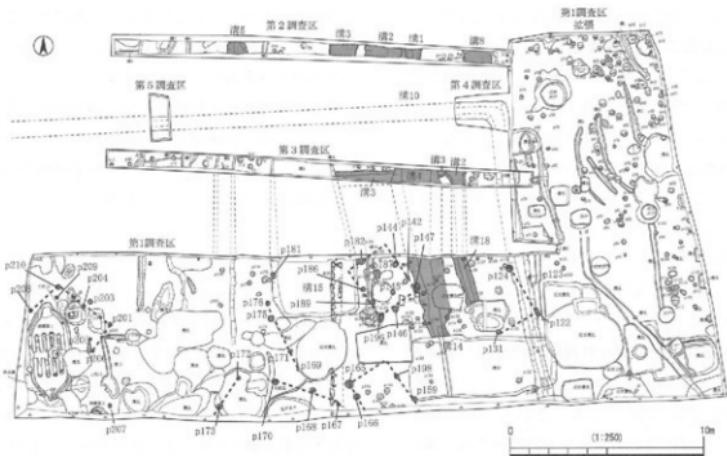
(6) 古代末～中世遺構

ピット・溝のうち、区画溝に切られるものである。推定される建物の方向は北西から南東を軸とするものが多い。出土遺物中には、平安時代の土師器片から中世前半の瓦器椀など遺物小片が含まれており、10世紀後葉から13世紀頃の集落城とみられる。

(a) 挖立柱建物等

溝10下面のピット群と周辺 ピット124、122が列に並ぶとみられる。これと直角の位置にあるピット131も関連するものとみられる。ピット124では、焼けた壁土と瓦器椀片を検出した。瓦器椀は小片ながら、端部形態や調整から楠葉型瓦器椀III・3期、13世紀中頃のものとみられる。この瓦器椀片からピット124は13世紀中頃以降に埋没したことがわかる。この他の建物跡などのピット群についてもおおむねこの前後のものとみられる。

溝14西の掘立柱建物 ピット144・142・147・146・196・189・186・182から復元される。瓦器椀などの小片が含まれるものがある。棟の方向は北西から南東を軸とし、梁行2間、桁行3間以上

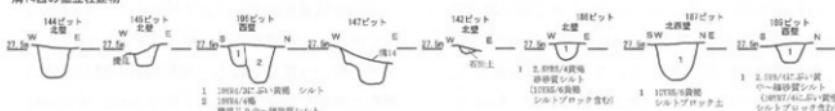


第292図 2012-2次 古代末～中世前半遺構平面図

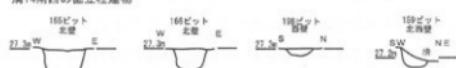
溝10下面のピットと周辺



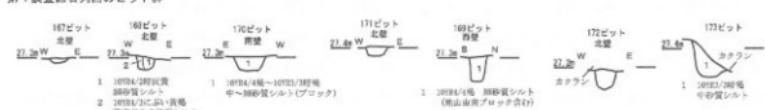
溝14西の獨立柱建物



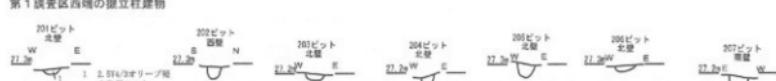
溝14西南の獨立柱建物



第1調査区石列西のピット群



第1調査区西端の獨立柱建物



第293図 2012-2次 第1調査区古代末～中世前半遺構断面図

とみられる。梁行 2.5m、桁行 3m 以上である。

溝 14 南西の掘立柱建物 ピット 165・166・198・159 から復元される。棟の方向は北西から南東を軸とする。擾乱の激しい地点であり不明な点が多いが、梁行 2.5m、桁行 3m 以上である。

石列西のピット群 近世以後の擾乱により全容は不明であるが、ピット群が検出されている。ピット 176・175・171・169 で一列、ピット 170・168・167 で一列、ピット 172・173 で一列になり、柵列や、建物跡であった可能性が考えられる。いずれの軸も正方位からは大きく傾く。

第1調査区西端の掘立柱建物 遠磨窯と関連遺構による擾乱の下層で検出された。ピット 208、210、204、201、206 から復元される。また周辺に関連する可能性のあるピットが散在する。棟の方向は北東から南西を軸とし、梁行 2 間、桁行 2 間以上とみられる。梁行 3.5m、桁行 5.5m ほどとなる可能性がある。

(b) 溝群

第1調査区溝 14 は不定形の溝であるが、おおむね南南東から北北西へのびるもので第2調査区溝 4 に連続する。第2調査区溝 2 はやや幅が狭く、第1調査区までのびる。この 2 条の溝が屈曲して、第2調査区溝 1・2 に接続する可能性があるが、調査範囲が限定されており、確定できなかった。第2調査区のその他の溝 5・8 も検出範囲が限定されるものの、おおむね北西から南東へのびるものとみられる。第2調査区溝 3 は西南西から東北東にのびる浅い溝である。他の溝によって切られしており中世でも古い段階の遺構と考えられる。いずれも溝 10 のように形態は整っていないものの方向が類似している。溝 10 の前身となる区画として機能した可能性がある。

(c) 小結

弥生時代以後、遺構・遺物が希薄であった同地点周辺における人為的な活動の痕跡が認められる

ようになったのがこの古代末から中世前半の遺構群と評価できる。この頃に集落域として整備が進んだものとみられる。

そこで確認された建物方位は、地形に即したものとみられる。区画溝形成時ほど整ったものとはみられない。出土遺物からは、この集落域形成後に区画溝をともなうものへと変貌する。

(7) 弥生時代の遺構

調査地の北半の第1調査区拡張部・第2・3調査区で弥生時代の弧状の建物周溝群とピット群、炉などが検出された。中位段丘上を利用した集落域である。図化し得たものは少ないが弥生上器の小片・打製石器・サヌカイト剥片が出土しており、弥生時代の中期頃の遺構群とみられる。残存する周溝から、少なくとも 2 基の建物跡が存在したと考えられる。遺構の切合い関係からは、堅穴建物 1 が古く、堅穴建物 2 が新しい。

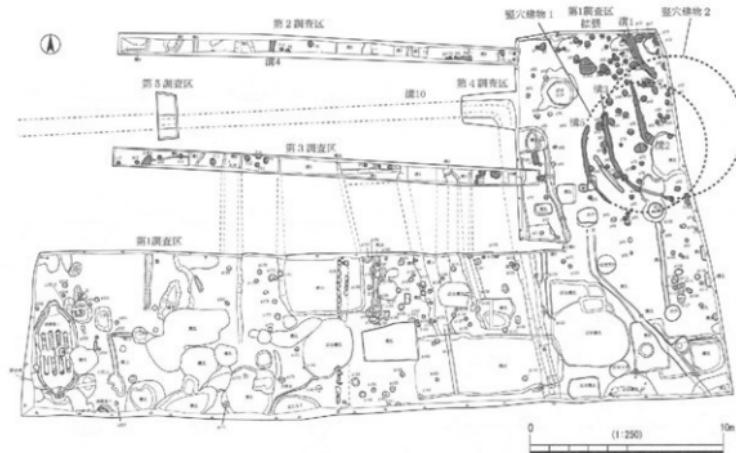
(a) 堅穴建物 1

近世堆積層を除去した面で検出した。もっとも西で検出された建物周溝の溝 5 とそれに伴うピット・炉跡から復元される。残存地盤の標高が低い調査区東端では周溝の溝 5 が削平され、住居の覆土も遺存していないかった。遺構本来の上部層は後世の改変により大きく損なわれたことがわかる。

溝 5 より推定される建物の推定径は約 7m である。堅穴建物内の覆土は削平されており、残存する周溝もわずかに理上を残すものとなっていた。

中心部で確認された炉跡はほぼ削平されており、ごくわずかに焼土が堆積するのみとなっていた。炉跡の近くから建物外側へとのびる溝 2 は排水溝と考えられる。

ピット 53・61・74・79・94 などが同建物に伴う柱穴痕跡と推定される。これらのピットは堅穴建物 2 の周溝 3 により切られることから、堅穴建物 1 の廃絶後に、堅穴建物 2 が建てられたことが



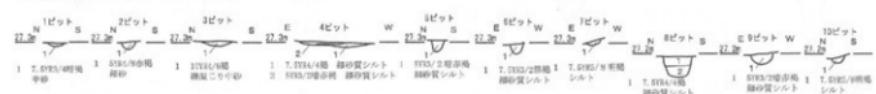
第294図 2012-2次 弥生時代遺構平面図

縫穴建物 1

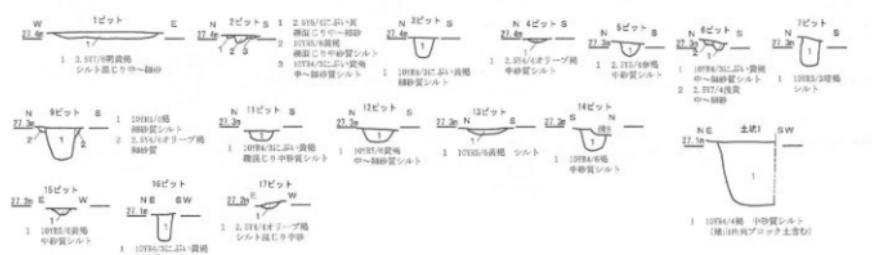


第295図 2012-2次 第1調査区弥生時代遺構断面図

第2調査区ピット・土坑

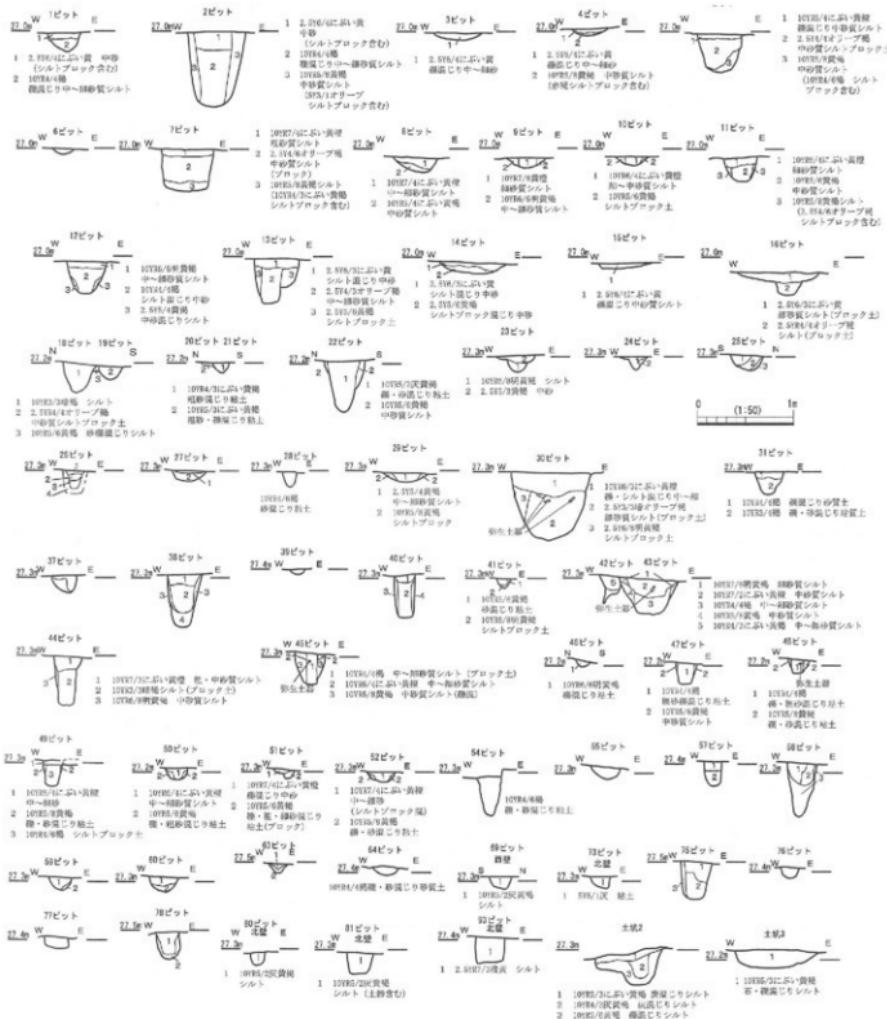


第3調査区ピット・土坑

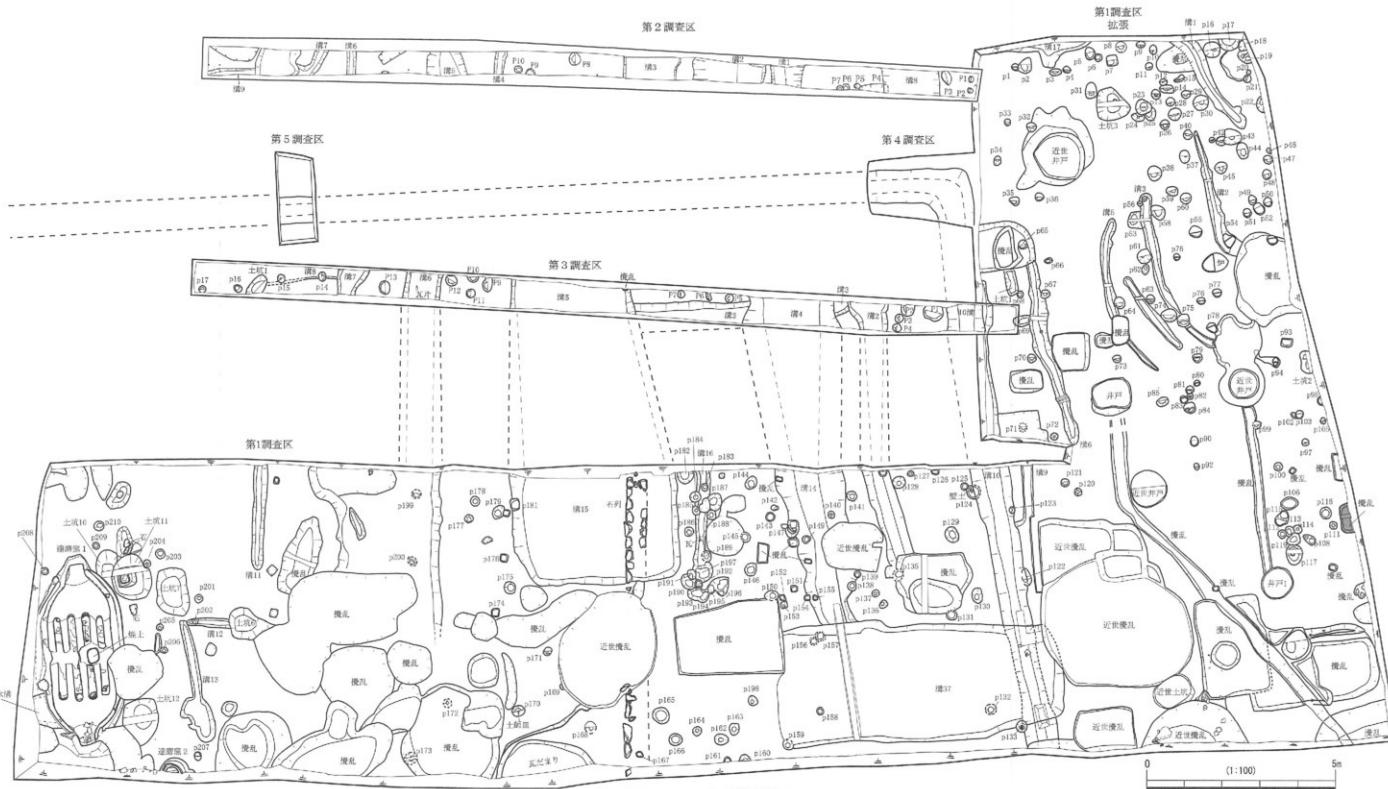


第296図 2012-2次 第2・3調査区弥生時代遺構断面図

第3章 私部城跡の発掘調査



第297図 2012-2次 第1調査区弥生時代構造断面図



第298図 2012-2次 遺構全体図

わかる。他のピットは、堅穴建物2とも重複し、いずれの建物に伴うものか判断できなかった。

(b) 堅穴建物2

弧を描く周溝の溝3から推定復原される。堅穴建物1と同様に、上部は後世の改変により大きく削平されている。

溝3より推定復元される建物直径は約7.3mである。建物の大半は調査範囲外に残る。

同建物の中心方向に向かってやや屈曲しながらのびる溝1は排水溝と考えられる。

ピット22などが同建物に伴うものと判断できるが、全体を検出しきれていないこと、堅穴建物1との重複範囲が大きいことからいずれのピットが同建物跡に伴うものかは確定できなかった。

(c) その他ピット群・土坑

第1調査区ピット・土坑群 堅穴建物1・2の北側を中心として、堅穴建物の遺構埋土と類似する埋土のピット・土坑などが密集していた。

特に後世の削平が著しい箇所であり建物跡として復元はできなかったが、相前後する時期の堅穴建物が存在したものと考えられる。

第2調査区溝・ピット群 検出されたピット中に弥生土器小片が混じるもののが認められ、層相も第1調査区で検出された建物の埋土と類似することから、弥生時代のものと考えられる。溝4は緩やかにカーブする形態から堅穴建物の周溝である可能性が高い。ただ、その周辺は中世の溝により大きく削平されており、建物跡として復元するには至らなかった。

第3調査区溝・土坑群 第3調査区でも層相の類似と、弥生土器小片を含むことから弥生時代遺構と推定されるピット・土坑が多く検出された。周溝は検出されておらず復元には至らなかったが、建物跡が存在したものと推定できる。

以上のように、周囲を低地部に囲まれた台地上の集落域を確認した。

(8) 出土遺物（第299～307図）

出土遺物の大半は擁壁部で検出された落ち込みと第1調査区溝10で検出された。また、その他に中世遺構でわずかに小片が検出されている。弥生時代遺構からは、図化し得ない小片や剥片などが出土したのみであった。

(a) 擁壁部壠状落ち込み出土瓦（第299～303図）

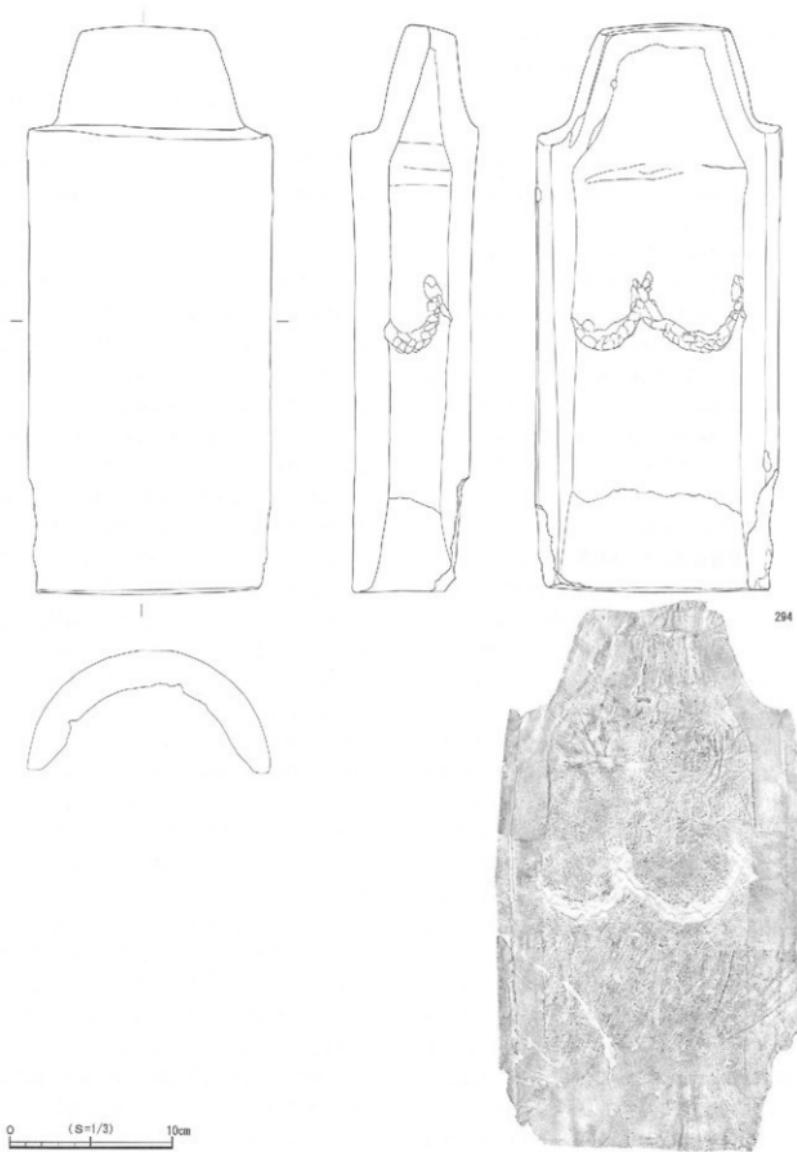
調査地北端の壠状の落ち込みからは、本郭や出郭に次ぐ多量の瓦が出土した。ただし、その種類は平瓦と丸瓦のみであった。定量瓦が出土しているながら軒平瓦や軒丸瓦、道具瓦を伴わないことからは、津田城遺跡や勝龍寺城で検出された暗渠に転用されたものであった可能性も考えられる。

平瓦片の製作技法等は出郭上の1997-2次調査区井戸や、本郭上の1994-2次第2調査区土坑出土のものと類似するものであった。いずれも小片のためここでは図版掲載を省略する。

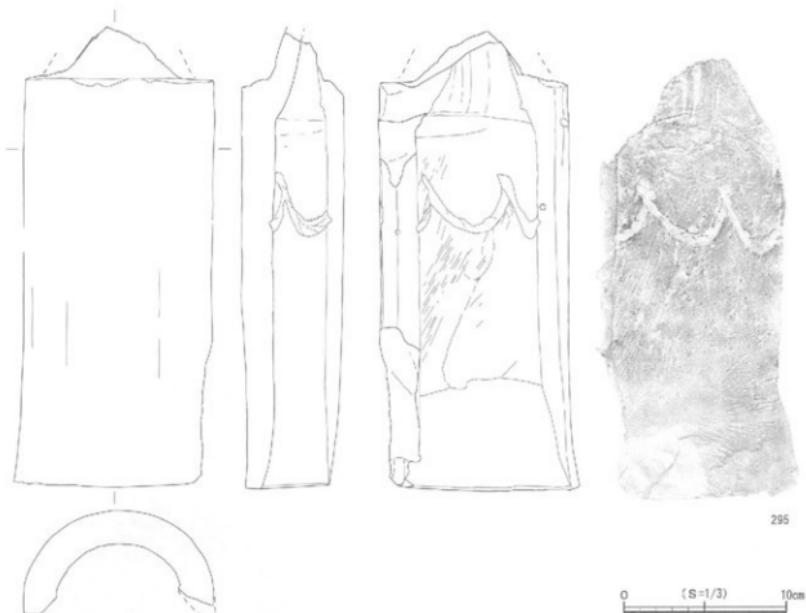
丸瓦については、他調査区に比べて遺存状況が良好なものが多く検出された。法量からみると私部城城出土瓦の中でも大ぶりなものから小ぶりなものまで多様なものが混在する。その製作技法については、胴部凹面の糸切り痕跡（コビキA）や、吊り紐痕跡などの大枠では共通する点が多いが、縄部の面取り位置などに差が多い。胴部凸面調整についても、縄叩き後、縄方向にナデを施すという点までは共通するが、個体ごとに差が認められる。

胎土については荒い礫を多く含み類似したものであるが、焼成の程度については大きく異なるものが混在している。こうした差異により一括して記述することが難しいため、形態が判明する主要なものをとりあげ、個別に記述する。

294は全長34.9cm、胴部幅15.0cmと、私部城城出土瓦の中で大ぶりな丸瓦である。私部城本郭採集瓦（79）と同法量とみてよい。縄部面取りは、胴部凸面狭端縁、玉縁部凸面狭端縁などにも及び、



第299図 2012-2次 捜査部出土丸瓦1



第300図 2012-2次 摂壁部出土丸瓦2

私部城域出土瓦の中でも丁寧なものである。胸部
凸面の縦方向の調整は、縦方向のナデも行っている
ものとみられるが、仕上げに幅1cm未満のミガ
キに近いナデを細かく施す。他の瓦類と差がある。
焼成により黒色に近い色調に焼き上がり、わず
かに銀黒色を呈する箇所が認められる。

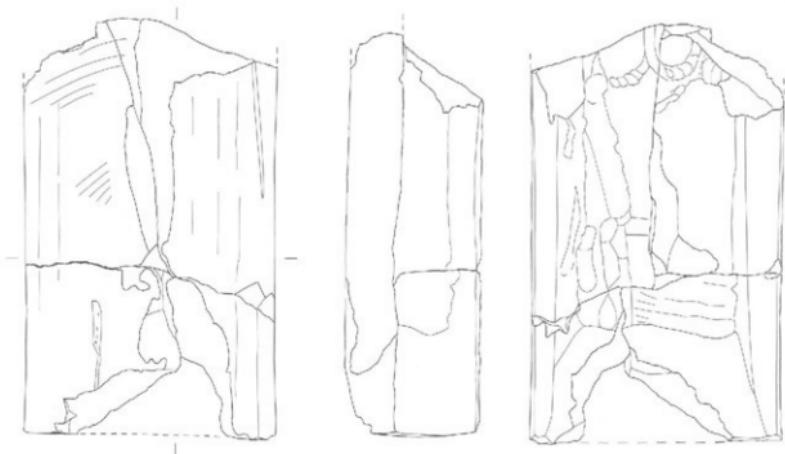
295は胸部幅11.7cm、胸部長25.3cmである。
推定される全長は30cmに満たないものとみられる。
幅・長さとともに私部城域出土丸瓦でも、もっ
とも小ぶりなものである。焼成良好だが、焼成は
弱く、やや黒味が強くなる程度のものである。胸
部凸面は縦方向に板条工具によるナデを行う。
縦方向のナデを切って、部分的に斜め方向の擦痕が
認められる。縄目叩きの痕跡は認められない。

細部の面取りについては、294と同じく胸部凸
面狭端などの細部にも行うが、294に比べると荒

いものである。

296は胸部片であり、胸部幅15.5cm、厚さ2.6
cmから3.1cm前後の大ぶりなものである。断面は
灰白色を呈し、程度の弱い焼成により外表面は薄
い青灰色に焼きあがる。

凸面は板状工具により縦方向にナデを行う。木
製工具のものとみられる木目も認められる。縦方
向のナデ後に工具が当たった痕跡や、斜め方向の
擦痕が部分的に認められる。糸切り痕跡は広端部
よりの位置で横方向に痕跡が残り、コビキB手法
のように見える箇所もあるが、胸部中位付近で斜
めに変化しておりコビキA手法によるものである。
吊り紐痕跡を切って内叩きが行われる。この
工具痕には目の粗い布目が伴っている。布を巻いた
幅1cmほどの棒状の工具によるものと推定でき
る。胸部側縁凹面の面取り幅が、胸部側面の面取



296



0 (S=1/3) 10cm

第301図 2012-2次 摂壁部出土丸瓦3

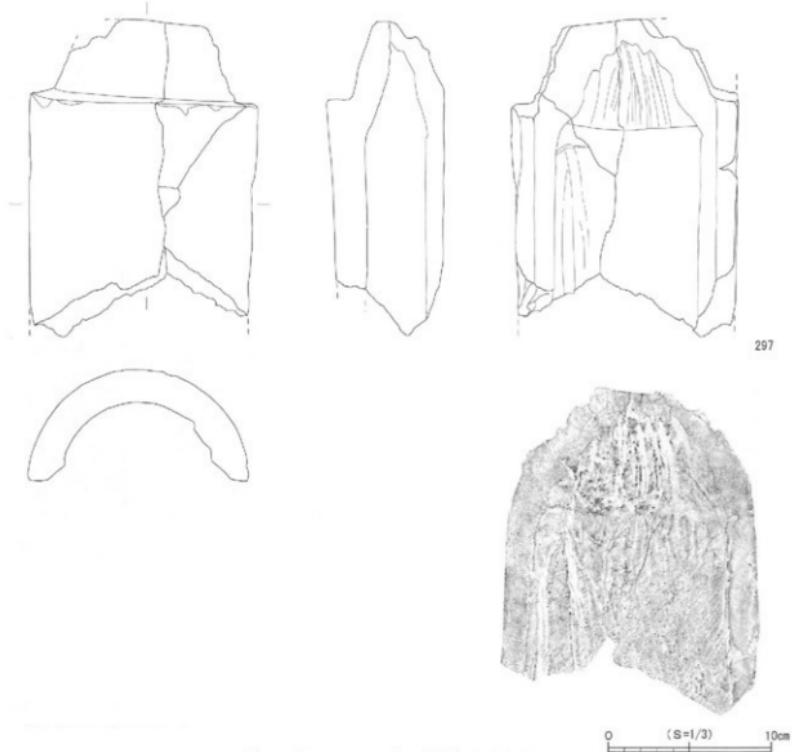
り幅より大きい箇所が認められ、胴部側縁の端部はにぶい形状を呈する。

297は胴部幅13.7cmである。焼成不良のためか、焼しが弱く断面・外面ともに灰白色を呈するものである。胎土に関しては、他の瓦と類似し、礫を多く含むものである。凸面調整は紙方向に工具によるナデを施した後に、部分的に横方向のナデを施している。294と同様に細部まで面取りを行なうが荒い。胴部側縁端部の形態はにぶいものである。

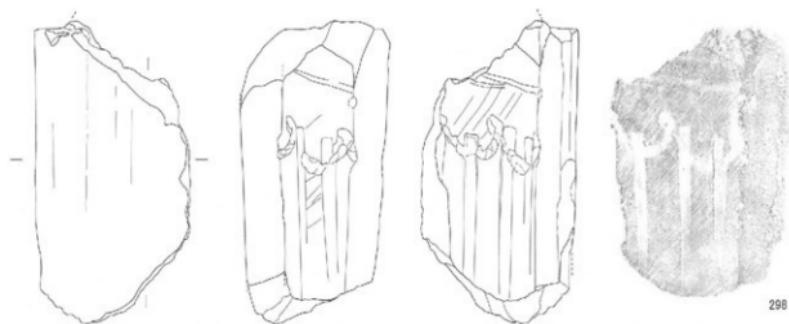
298は、胴部片で法量の詳細は不明である。凹面に工具による内叩きを4回行った痕跡が認められる。吊り紐痕跡を切るものであり、凹面調整の

最終工程で行われた叩きと認められる。その工具は最大幅0.8cmで、長さは9cm以上のものである。次の299の痕跡に比べて角ばったものである。胴部側縁端部は鋭い形態のものである。焼成良好であるが、焼しが弱く、断面・内外面ともに薄い青灰色を呈する。

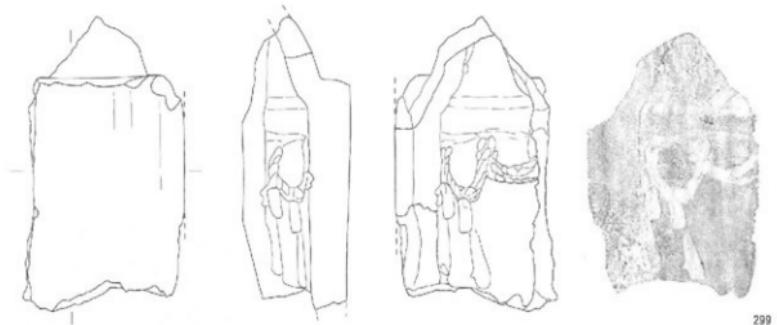
299も内叩き痕跡を残す丸瓦胴部片である。胴部側縁端部がにぶい形態をとる。焼成良好であるが焼しが弱く、断面・内外面ともに青灰色を呈する。凹面に工具による内叩きを4箇所認めることが可能である。特に、胴部凹面側縁の面取りを切る叩き痕跡を確認でき、製作工程の中でも最終段階の



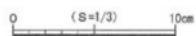
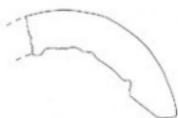
第302図 2012・2次 撥壁部出土丸瓦4



298



299



第303図 2012-2次 振壁部出土丸瓦5

ものであることがわかる。工具の幅は最大 0.8 cm で、全体的に丸みが強いものである。同遺構では、出土点数に対して内叩き痕跡を伴う破片点数の比率が高い。

私部城跡 1997 - 2 次で検出された瓦群と特徴が類似するものから、本郭出土の瓦群と類似するものまでが含まれる。また、いずれにも認められない特徴のものも存在した。16世紀頃の中でも複数時期の瓦が混在するものと考えられるが、私部城の本郭などと併存する時期に製作・利用された一群も含まれる。後述の区画溝付近出土のものと比べると新相のものである。擁壁部で検出された落ち込みが、私部城と併存したことを裏付ける資料である。

法量・調整技法ともに多種多様であることから、本来は同一建物の瓦ではないものと推定される。丸瓦・平瓦のみが検出された点から、周辺の瓦を集め、暗渠などに転用したものとみられる。

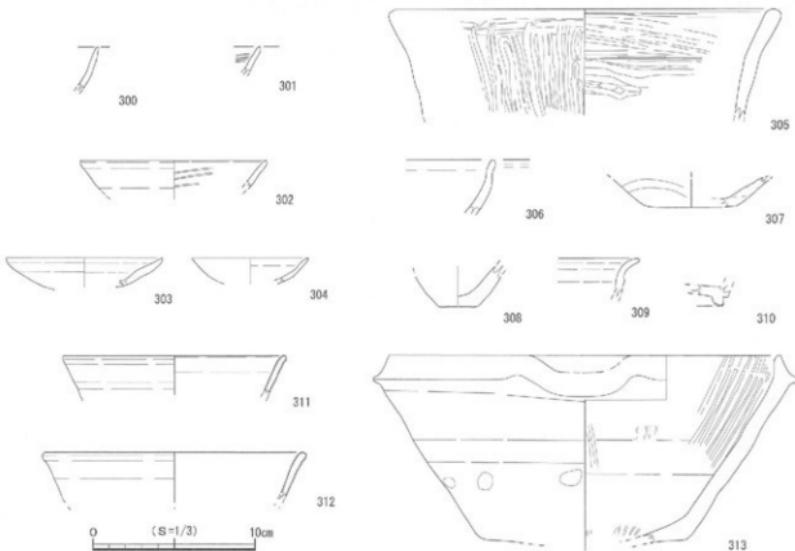
(b) 溝 10 出土遺物 (第 304 ~ 306 図)

瓦器椀 300 は口縁は内湾し、端部を尖らせ気味におさめる瓦器椀片である。楠葉型瓦器椀である。301 は内湾する口縁部をもつ瓦器椀片で、300 に比べると厚みがあり、内面に目の細かいミガキ痕跡が認められる。13世紀中葉前後の楠葉型のものとみられる。301 も楠葉型瓦器椀の口縁部片でおおむね 13世紀頃のものとみられる。

土師器皿 303 の胎土は白色系である。その形態は、いわゆる「ての字」口縁が退化したものである。12世紀前半前葉頃に位置付けられる（千喜良 2002）。

陶器・磁器類 304 は黄橙色系の胎土で、口縁部は外側に向かって開き、端部はつまみ上げる。15世紀中葉から後葉頃のものである（千喜良 2002）。

306 は天目茶碗の口縁部片である。褐色の釉をかける。瀬戸美濃窯のものとみられる。



第 304 図 2012 - 2 次 第 1 調査区溝 10 出土遺物

青磁 311・312は楕円縁部片である。いずれも屈曲して外反する。白色の胎土に1mm以下で施釉される。

備前陶器 313は擂鉢である。備前編年Ⅲ期にあたり13世紀後葉から14世紀初頭頃のものである(伊藤1995)。内面は使用により著しく摩耗している。擂り目は7本で一単位である。

瓦質土器 306は深鉢である。口縁部が外反し、外面に縦方向、内面に横方向のヘラミガキを施す。15世紀頃のものとされる(立石1995)。

丸瓦 314・315は丸瓦片である。凹面に糸切り痕跡を残す。315はにぶい側縁端部形態をとるものである。

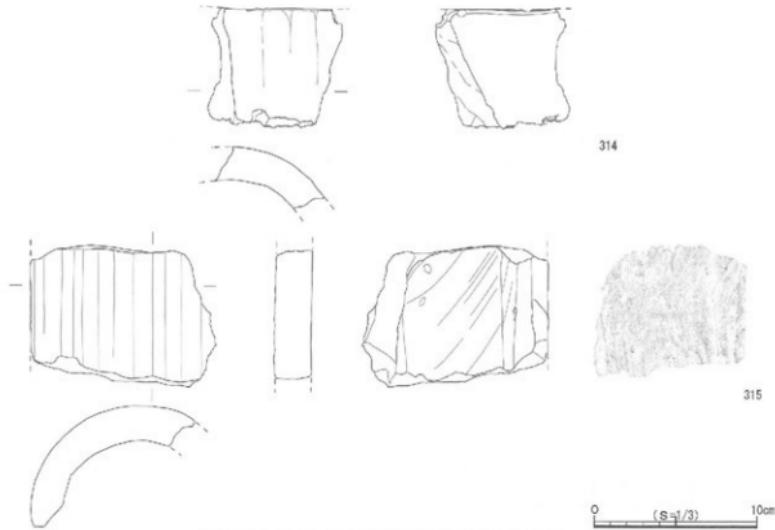
平瓦 316～320は平瓦片である。316は凹面側の側縁より1.5cm付近に屈曲点がある。同様の位置に屈曲点をもつ破片が数点認められ、凸型台の形状を反映したものと推定される。凸面は糸切り痕跡をかすかに残し、網目叩き痕跡が認められる。側縁にバリが認められない。以上の特徴から

は、製作工程の最終段階を凸型台上で成形されたものと推定される。私部城本郭出土瓦には認められないものである。16世紀代のものではなく、15世紀またはそれ以前の年代のものとみられる。

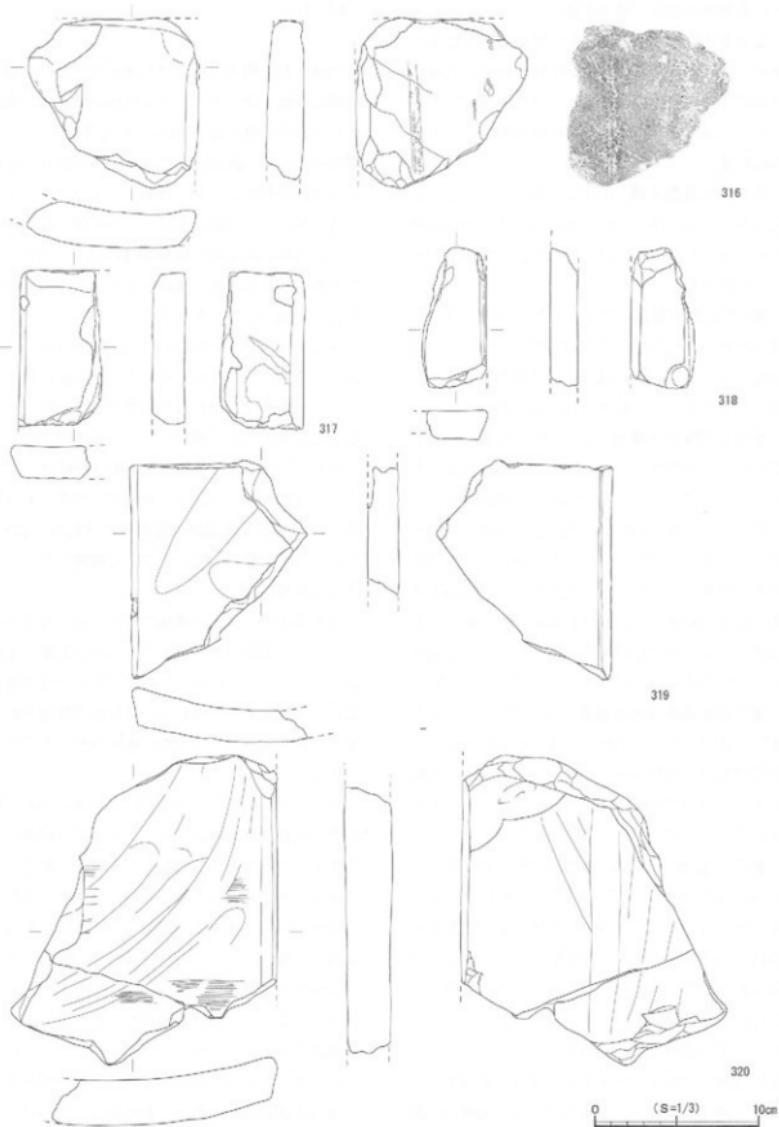
319は硬質に焼成された平瓦片である。中央部で厚さ1.9cm、側縁部で最大2.2cmと厚さに偏りがある。その他の調整は320と類似する。

320は、溝10の第1調査区北壁断面下層で出土した平瓦片である。側縁側で2.6cm、中軸付近で2.2cmと厚さに偏りが認められる。凹面は横方向と斜め方向のナデを施す。凹面側の側縁端部は丸く收める。凸面はナデを行わず、表面が荒い。砂粒の剥離痕跡や、粘土粒の付着痕跡、指頭圧痕が認められる。凸面側の側縁端部から1cmほどに縦方向のナデを施し、端部を丸くおさめている。

以上、13世紀から15世紀頃の遺物が検出された。瓦についても、16世紀頃の私部城中心域のものと異なる特徴のものが多いことから、この頃のものとみられる。



第305図 2012-2次 第1調査区溝10出土丸瓦



第306図 2012-2次 第1調査区溝10出土平瓦

(c) 遺構出土遺物（第307図）

ピット170出土土師器 321は褐色系の胎土である。丸底の底部外面に指頭圧痕が残り、口縁部外面に横方向のナデを施す。千喜良分類c類のII-1期、10世紀後葉から11世紀初頭頃のものとみられる。

溝6出土瓦質土器 322は口頭部片である。上部に透かし孔が認められ、風炉などの可能性が考えられる。詳細な年代は不明だが、中世後半のものと推定される。

溝17出土土製品 323は輪状土製品である。焼成良好で褐色を呈する。窯道具（トシン）の可能性がある。調査地北端で一部を検出した溝出土で、周辺で関連した遺物は認められなかった。

ピット124出土壁土 324の壁の厚さは5.2cmである。内外側面1.0cm分ほどは、礫を多量に含む土で構成される。小舞は腐食して中空になっている。この木舞痕跡には、直径1.7cmほどの半円状のものと、V字状のものが認められる。半円状のものは割竹、V字状のものが藪などの植物と考えられる。縦横とともに割竹が用いられており、部分的に藪など他の部材を用いる。瓦器片も共伴し、中世前半の13世紀頃の年代を与えられる。

第1調査区溝9出土銭貨 326は拓本から宝永通宝と判断できる。裏面の拓本も採取したが、文字等は判読できなかった。宝永5年（1708）初鋤で宝永6年（1709）に通用停止している。溝10との切り合い部で出土したものである。

井戸1出土 325は半截菊花唐草文軒平瓦である。交野市内の山岳寺院・岩倉開元寺跡で同文のものが出土している（交野市文化財事業団2012）。瓦当貼り付けによるもので、文様から15世紀頃のものとみられる。後述の中世区画溝に伴う瓦群と同時期の資料である。なお、瓦当面を中心として二次被熱の痕跡が認められる。井戸1は近世遺物を含む井戸であるが、中世瓦が混入していた。井戸の掘削か、埋没時に周辺の遺構から混入したものとみられる。

(4) 小結

地盤層から構成される平坦面上で幅広い時期の遺構を確認した。まず、弥生時代の集落域が確認された円形の堅穴建物痕跡のほか、多量のピット・溝を検出した。調査区北半に集中しており、台地上の北端を利用したものと推定される。その北側には百々川などが流れる低地部が存在することから、低地部に開まれた環濠集落に近いものであつたと推定される。出土遺物は少ないものの、弥生時代中期頃のものと考えられる。

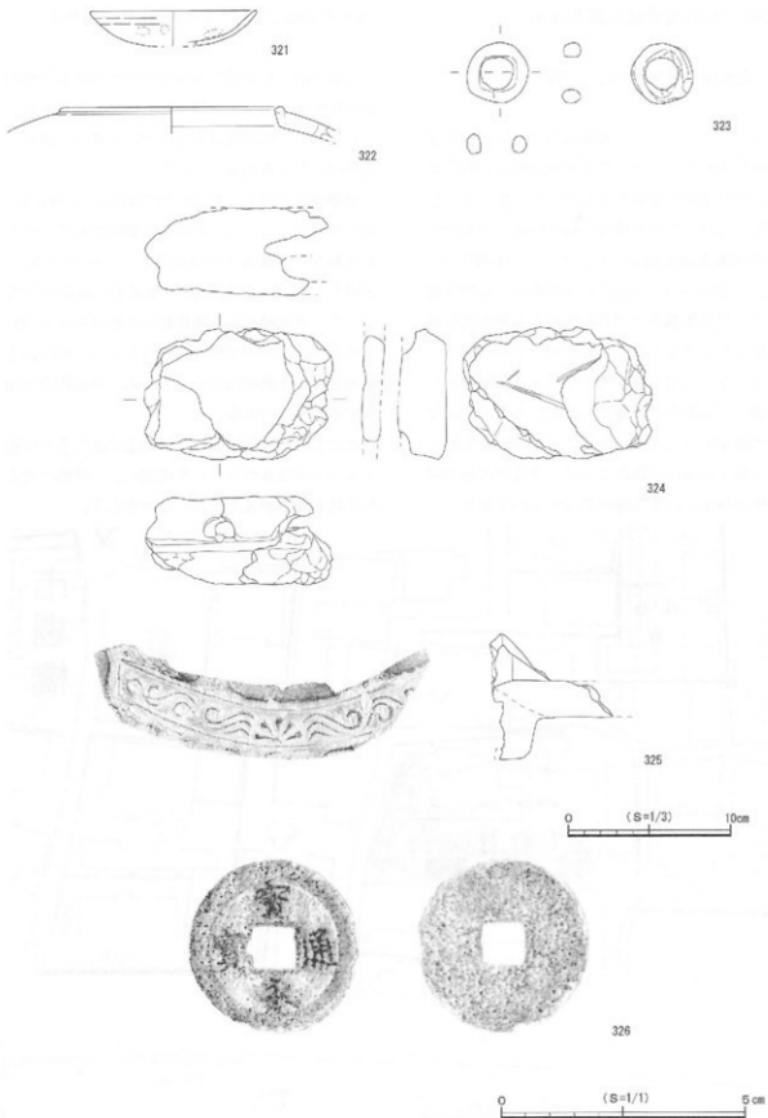
次に、古代末から中世前半の集落域を検出した。10世紀後葉から13世紀頃までの時期幅を考えられる。弥生時代以後長らく利用されてこなかった私部北東部の開発が進展したものと推定される。

14～15世紀頃の区画溝と遺構群を検出している。当該期には、古代まで私部周辺で中心的な集落であった私部南遺跡の建物群が途切れしており、それに代わる私部の中心部として機能したものと考えられる。

同地周辺では、中世遺構でも瓦小片が含まれていたほか、近世以降の層中からも中世瓦が一定数混入している。室町時代に私部で栄えた光通寺に関わる可能性も考えられる。擁壁部で検出された堀状の落ち込みもこの段階に掘削されたものとみられる。

また、中世後半の遺構を切って、南北の正方位軸をとる遺構群が確認された。同様の方位軸は私部集落中で、私部城中心域にのみ認められるものである。私部城が機能した段階と相前後する時期の遺構群である可能性が高い。この場合、私部城築城の影響がその周辺域まで及んでいたことを示す遺構群と評価できる。

以上のように、同地周辺は私部城期以前から私部集落の中心的な位置にあったものとみられる。その主体としては、第5章で述べられる私部集落の有力者達が想定される。私部城との関係については、次項で整理することとしたい。



第307図 2012-2次 第1調査区遺構出土遺物

第2項 私部城跡東の調査成果

(1) 遺構群と私部城城との関係

先に見てきたように、私部城期に先行する集落域が検出された。また、その地割は現況の私部集落中心部の地割と類似するものであった。こうした成果からは、私部城築城以前に現況の地割の原型が私部集落内に成立していたことが判明した。また、14世紀～15世紀頃の区画溝をともなう遺構群は、私部集落の中でも有数の有力者の居住地が存在したことをうかがわせるものであった。

こうした中心部が現在残る字通り、市場として機能したか否かは未確認である。ただし、2012-2次調査区の北端で、トチンとみられる土製品が一点ながら検出されたことは、今後周辺地で関連遺構が検出される可能性を示すものである。

(2) 私部城と関連する可能性のある遺構群

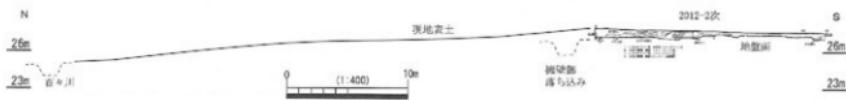
同地周辺に私部城中心域に匹敵する標高の地形が存在することは先行研究においても注目されてきた。特に、馬部氏は同地周辺に四郭へと連続する虎口の存在を指摘している。

発掘調査の結果、私部城期に関連する可能性のある遺構群としては、私部城と類似する南北の正方位軸をとる溝などが検出された。その一方で、三郭などに認められた頗著な盛土は確認できなかった。南北軸をとる遺構群から折れを伴う通路が形成されている可能性が示されるが、周辺に土星等を伴った痕跡はないことから、防衛施設と連断することはできない。

ただし、それまで後の山根街道に通じる方位軸によって形成されてきた集落域に、一時的にせよ私部城の地割が及んでいたことを示す。



第308図 私部城東（字市場）平面合成図



第309図 私部城東（字市場）南北断面図

第17節 私部城南の調査

第1項 2012-5次調査

(1) 地点と調査に至る経過

私部城の所在する台地の南に、東西に延びる開析谷がめぐる。今回の調査地点は、この私部城南の開析谷の中にあたり、現在の交野市役所別館の西に位置する。この地点に、市役所の第二別館を建設することとなり、試掘確認調査の機会が得られた。

この開析谷内部については、従来私部城跡の範囲外としていたために、これまで発掘調査が実施されてこなかった。このため谷内部の堆積状況や、堀などの遺構の有無について、これまで確認できていなかった。今回は、こうした課題を解決する

ために、調査を実施した。

南北約17m、東西約2mの調査区を設定し、遺構の有無を確認しながら掘り下げを行った。

(2) 基本層序 (第312図)

(a) 近現代整地土

現在の地表面は駐車場として利用されており、アスファルト舗装されていた。2層以下を切る現代擾乱も確認できる。

下層の浅黄色の粗砂は、上面を平坦に揃えるもので、0.8m～1.0m堆積する。市役所別館建設前の学校グラウンドの整地土である。同層中には、スプリンクラーなどの配水パイプが含まれていた。同層の段階の状況は、航空写真や、教育委員



第310図 2012-5次 調査地点位置図



第311図 2012-5次 調査区平面図

会所蔵の風景写真で確認できる。

(b) 近世耕作土

青灰色の砂質シルトが水平に堆積する。水田などの耕作に伴うものとみられる。第12層中で近世瓦片が出土するなど、近世遺物が含まれる。中世以後から昭和初期の学校建設までの堆積層である。

(c) 中世耕作土

近世～近現代層と同様の砂質シルトが水平に堆積する。瓦器碗片等の中世までの遺物を含むことから上層と分けた。同層中には溝などの遺構も確認できる。

開析谷内部が本格的に利用されるようになるのが、この層の段階である。

(d) 中世以前の堆積層

色調は中世耕作土層と類似する青灰色であるが、上層の耕作土とみられる層に比べ、擾拌が少ないシルト・粘土層である。第28・29層の下面

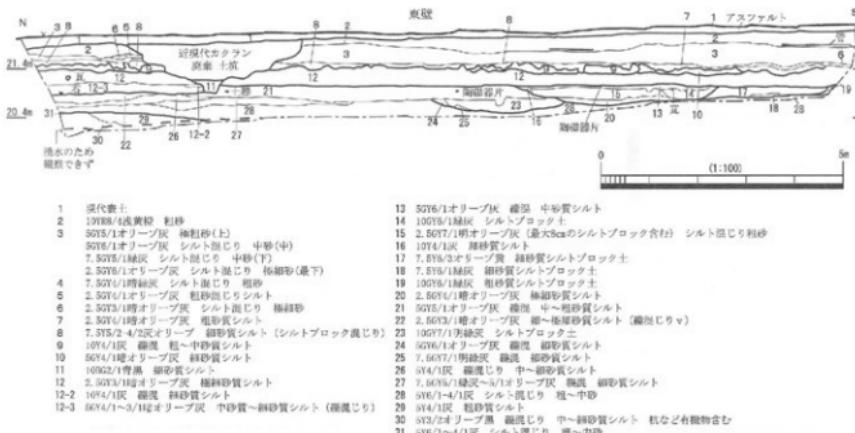
で北側が高く、南側が低く傾く堆積状況をみせる。この傾斜は開析谷の自然地形を反映したものとみられる。中世に入るまでは、同谷内部について、本格的な農地利用はなされていなかったことをうかがわせる。弥生土器とみられる土器小片を含む。

(3) 遺構

調査地中央から南よりに位置する中世層中で、数条の溝を確認している。緑灰色から青灰色のシルトブロック土を埋土としている。

溝1は、13～15, 20層を埋土とし、残存幅は4.1mと広いが、深さは0.2mと浅い。溝2は17層を埋土とするものである。北側の上端は溝1により削られる。幅は少なくとも2.7m以上である。深さは0.2mほどである。

溝3は23～25層を埋土とし、残存幅は2.7mと広いが、深さは0.3mと浅い。これらは同時併存するものではないが、方向は一致しており、やや場所を変えながら掘り込まれる。いずれも耕作等にともなう水路とみられる。



第312図 2012-5次 調査区断面図

また、調査区より南部における工事時に、井戸を確認した。木枠を伴うもので、近世から近代頃のものとみられる。

(4) 出土遺物（第313図）

出土遺物は、主に中世の耕作土とみられる堆積層中から土器片が出土している。

中層にあたる第12～13層では瓦器椀片などが出土している。327は須恵器片で蓋の端部片とみられる。古代のものである。328・329は土師質土器小片で、椀皿類の口縁部片である。平安時代頃までのものとみられる。中層までの出土遺物には、中世前半までの遺物が認められた。

中～下層の第27・28層では瓦器椀・土師器皿が検出された。

334はやや灰色がかかった褐色系の胎土のものである。千喜良分類ではk類にあたり、12世紀後半前葉頃のものとみられる（千喜良2002）。

330・331は大和型III期ごろの瓦器椀口縁部片である。12世紀中頃から13世紀中頃のものとみられる。

332は体部片であるが、内外面ともに濃密にミ

ガキが施されており、II-1期ごろまで、12世紀中頃までにおさまるものとみられる。

333は三角形の高台片をともなう。内面に輪状のミガキ痕跡が認められ、大和型か備葉型のものと考えられる。12世紀後半頃のものとみられる。

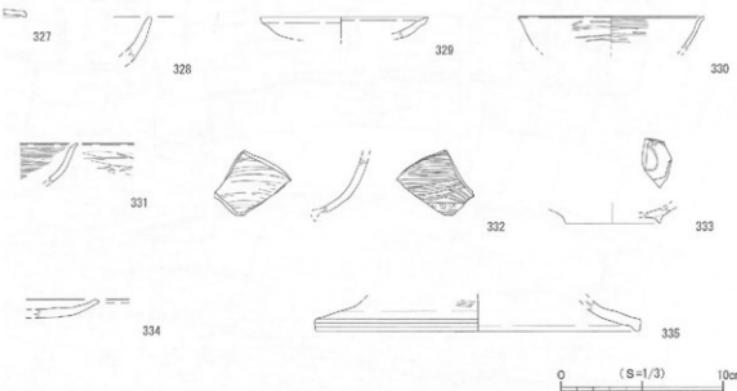
335は傾斜して堆積する第29層で出土した弥生土器の端部片である。高坏の脚端部として推定復元したが、壺類などの口縁部である可能性もある。谷部周辺でも弥生時代の水田等の遺構が確認される可能性が考えられる。

古代後半から中世前半の間の遺物が混じる層から水平堆積が認められるようになっており、開析谷内の水田等の利用が始まった時期を示すものと考えられる。

(5) 小結

以上のように、私部城域南の開析谷内部の堆積状況を確認した。調査範囲が限定されているものの、次の手がかりが得られた。

開析谷内の利用の経過については、中世前期までは、自然地形を残していたものと考えられるようになった。



第313図 2012-5次 調査区出土遺物

中世前期の鎌倉時代頃に、平坦面を形成し、溝をめぐらすなどの整備がなされ、耕作地として利用されることとなった。以後は、近現代まで耕作地として利用されていたものとみられる。私部城が機能した戦国期頃についても特殊な遺構は確認されず、水田としての利用がなされていたものとみられる。

城に関わる明瞭な遺構は確認されなかつたものの、この堆積状況が城の防備と密接に関係するものと考えられる。次項で、周辺の状況を勘案しながら評価することとしたい。

第2項 私部城南の調査成果

(1) 私部城南の開析谷の現況

私部城南の開析谷の南北幅は約50～80mである。その谷筋は現在の無量光寺南付近から始まり、西に500mほど延びて、「長砂」と字名がついた天

野川の旧氾濫原につながる。

現況では市役所の建設と宅地化により不明瞭になっているが、昭和初期の測量図や（第314図）、航空写真（挿図写真2）では、私部城の立地する段丘との落差が明瞭に認められる。

また、現況でも谷中央部を水路が通り、近年まで無量光寺南付近には池がいくつか存在していた。このように水路・池が集中する状況からは、2012-5次調査において確認された泥田状の地形が、開析谷内部一面に広がっていたものと考えられる。

(2) 谷内部の道

開析谷内部の西側には、私部街道から派生する道が谷を横断して通る。また無量光寺の南には山根街道が谷を横断して北田家住宅方面までのびる。いずれも利用され始めた年代の詳細については不明である。ただし、状況証拠として、2012-



第314図 私部城跡南の開析谷（昭和36年大阪府測量図 スケール3000分の1）



第315図 私部城南の開析谷 南北断面推定図

2次調査で山根街道の軸と一致する区画溝の年代が14世紀頃までに遡ることや、街道の周辺で南北朝期頃の遺物・遺構が確認されていることからは、これらの街道またはその原形となる道の年代も中世段階に位置づけられる可能性が高いものと考えられる。

私部街道から開析谷を越え、城側へ入った付近には、昭和36年の測量図より、果樹園として利用されていたことがわかる。その状況は旧交野小学校の風景写真で確認できるが、こんもりとした高台であったことがわかる（写真図版3写真）

12)。また山根街道から城側に入った付近にも無量光寺やほかの寺院が立地する高台がある。こうした地形とあわせて、城域に入る道をおさえていたものと考えられる。

(3) 私部城機能時の開析谷の状況

2012-5次調査では、谷内部の堆積状況が確認された。この結果では、堀などの明瞭な遺構は認められず、耕作に伴うような浅い溝が確認されたのみであった。近年までの周辺の地形状況と発掘



挿図写真2 私部城南の開析谷 昭和23年(1948)米軍航空写真(国土地理院)

成果をあわせて勘案すると、私部城段階の開析谷内部は一面には水田または泥田状の地形が広がっていたと推定される。

この地形利用自体は耕作を目的としたものとみられるが、開析谷の規模もふまると、城の防御を考える際に重要な機能を果たしたことがうかがえる。私部城段階の谷内部の泥田状地形の上面の標高は今回確認されたもので、T.P. 20.5m前後と推定される。すぐ北側の台地部縁辺との比高が2mほどは容易にある。私部城中心部との比高は最大で7mほどとなる。交野の平野部においてこの比高を生み出す泥田状の地形は、城を守る要害として機能したことは想像に難くない。

(3)『室町殿日記』の記載の「外堀」

ここまでみてきた城の南の開析谷の位置づけを探る時に、『室町殿日記』の記載を欠かすことができない（佐竹編 1980、馬部氏より教示）。史実とは異なる記述も認められる史料であり、批判的にとらえる必要はあるものの、現状で最も戦国期に近い時期の城跡の状況と、当時の認識の一端を記した史料として貴重である。

この記述の中では、「後家が城」は、南を大手として矢倉と四、五十間の外堀により守りを固めたと記される。現況の開析谷の痕跡の最大幅が、現市役所付近で南北幅80mほどになることから、おおむね合致してくるものである。また、「深さはふんりやう水なんなんとして積もりかたし」とある。やや誇張をはらんでいるかもしれないが、深く、水をたたえていた様子はおおむね一致するものといられる。ただし、堀の深さを詳細に示す「底へは九間十間など堀（ママ）せ候へはさためて水際までは六七間つつ候はん」との記述に関しては数値は一致しない。相当の誇張を含む部分があることも確認できる。

「後家が城」の名称が江戸期の枚方市域の文書に登場することなどもふまると、『室町殿日記』

の作者は、少なくとも安土桃山時代から江戸時代初め頃までに私部城と周辺の状況を確認しているものとみられる。軍記として記述される際に一定の誇張もしたものとみられるが、江戸時代初め頃までの間、廃城されていた私部城南の開析谷内部で展開されていた泥田状の地形について、堀跡と認識されていたことがうかがえる。

(4)まとめ

以上のように、発掘調査と現況の地形観察の結果、私部城城南の開析谷については、戦国期に平坦な泥田状の地形を呈しており、水田などの耕作を行っていたものと考えられる。

この水田面を形成する谷筋は、最大幅80m、長さ500mほどの規模が推定された。その北側に城が築かれた際には、自然地形を利用した要害として城の南側を防備する際に重要な機能を果たしたことは疑いがない。安土桃山時代末期から江戸時代初め頃に成立した軍記においては、城の南側の外堀と認識され、記述された。

ただし、私部城築城に伴い地形改変を行った痕跡は現況で乏しい。郭や堀をめぐらすために著しい地形改変を行った私部城中心城との差は大きい、既存の自然地形を水田耕作などに利用されていたものを、巧みに城の防備に活用したものと位置づけられる。

第18節 私部城跡発掘調査のまとめ

第1項 私部城以前の遺構の変遷

(1) 私部城跡及び下層遺構の概要

各時代の遺構・遺物の分布状況と変遷の概要を述べた後に、各時期の様相を整理して述べる。また、発掘成果と第4章と第5章の成果との関連についても整理してまとめとしたい。

まず私部城域の遺構・遺物の概要をみておきたい。後に私部城が築城される台地上で活発に遺跡形成がなされるようになるのは、弥生時代中期頃のことである。ここでは、自然地形を利用し、集落城が形成されていた。

ただし、この集落城は弥生時代後期以後に続かず、古墳時代の遺構・遺物はほぼ認められない。

古代については、遺構は不明で、わずかながら奈良時代頃の瓦などの古代遺物が混入する。私部城域より南の私部南遺跡では古代の集落城が認められることから、これに付随する古代の遺構・遺物が今後増加する可能性も残る。

中世においては、私部城の盛土下層などから、おおむね鎌倉時代頃から南北朝期頃および室町時代頃の中世遺物・遺構が検出されている。これは、私部城築城以前から、中世私部の集落城による開発が進展していたことを示すものである。特に、私部城以前の中世遺物の多くは、私部城の中心城ではなく、やや離れた字市などで確認されていることが重要になる。第5章で文献史の成果から、私部城築城以前より活発に活動していた光通寺や、その支持勢力の存在について述べられるが、発掘地調査成果からは、その主体は私部城域の周辺の私部南部から東部に集中していた可能性が高い。こうして中世私部の集落城が展開していた台地の北西端に大きく地形変更を加えることによって私部城が築かれた。

次に各時代の遺構・遺物を整理する。

(2) 自然地形と弥生時代の遺構

私部城跡の発掘調査では、多くの自然谷をはじめとした自然地形が確認された。私部城はこの自然地形を巧みに改変して築城され、周辺の谷地形を防御に利用していたことから、中世末にいたって私部城がいかにして築城されたのかを考える時に、極めて重要な点である。

また、この自然地形の台地上には、弥生時代中期頃の集落城が展開していた。

(a) 1966・1969年度地点

三郭の下層にあたる。谷地形に落ち込む弥生時代包含層が確認されていた。これは弥生時代の谷地形と考えられる。人為的に形成されたものではないと考えられるが、環濠に近い機能を果たしたものとみられる。

同堆積層中からは弥生時代の石庖丁等の磨製石器類のほか、弥生時代中期中頃の土器片が検出されていた。弥生時代の間に埋没したものとみられる。

(b) 1994・2次調査地点

現在の本郭中央を東西に分断する位置に自然の谷地形を確認した。この谷は、層序から私部城築城の直前まで存在した可能性が高いものである。

また、谷地形より東半の高台上で竪穴建物1基が検出されていた。出土遺物は少ないが、ピット中から打製石片が検出されている。おおむね他の弥生時代竪穴建物と同じく弥生時代中期頃のものと位置付けられる。

(c) 2011・7次調査地点

本郭の西半に位置する。竪穴建物2基が検出された、そのうち竪穴建物2は一部を検出したのみで出土遺物も極めて少なく、おおむね弥生時代中

期頃と確認できるのみであった。

もう1基の竪穴建物1では、中心部の炉を検出したほか、覆土中から打製石器などの製作に用いられたとみられる敲石、磨製石器の製作に用いられた砥石など製作に関わる石器類が認められた。また磨製石器では石斧、打製石器では石鏽が検出されたほか、覆土中にサヌカイト剥片が少量ながら認められた。

(d) 2012 - 2 次調查地點

削平により形態が不明瞭になっていたが、豎穴建物の周溝とピット群を検出した。少なくとも3

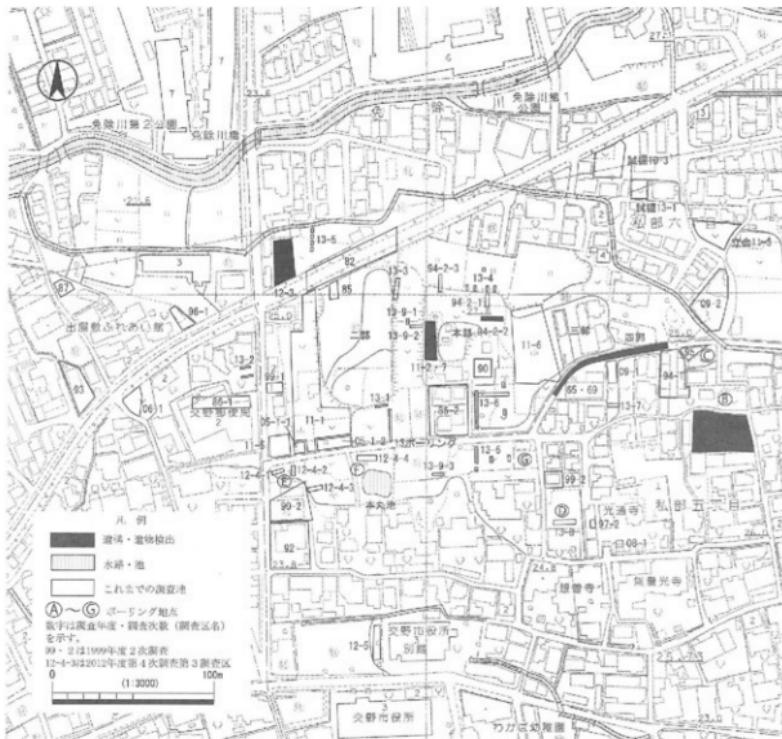
基分の堅穴建物に復元される。出土遺物は土器小片、サヌカイト剥片がわずかに含まれるのみであった。

(e) 2012 - 3 次調査地点

二郭北西の郭上面で弥生時代の土器片等を含む
ピットがわずかながら検出されている。年代の詳細は不明ながらこの台地上も弥生時代に利用され
たことがわかる。

(f) 弥生時代遺構のまとめ

以上のように、私部城の下層では、多くの自然



第316図 私部城下層 弥生時代遺構・遺物分布図

谷が埋没していた。そしてその合間の高台上に堅穴建物が立ち並び集落域を形成していた。

枚方・交野台地上では台地上の谷を標高の代替として利用していることが明らかにされている（荒木・西田 2000）。私部城下層の弥生時代集落もまたこれと同様の性格のものと考えられる。

なお、台地周辺には多くの自然谷ばかりでなく、低湿地帯も多く分布していた。こうした地形を利用して水田が営まれていた可能性は極めて高い。今後の調査の中で注意する必要がある。

その年代は弥生時代中期を中心としたものである。相前後する時期に、弥生時代前期後葉の私部南遺跡の集落形成が開始しており、この後に続くものであった。当初交野の低地部に定着した人々が、台地上へと進出する現象は、北河内一円で認められていることであり、この私部城下層の弥生時代集落遺跡も同様のものと考えられる。なお、弥生時代後期については私部南遺跡で水田城や、流路に伴うしがらみ遺構は確認されているが集落城は確認されていない。

またその後の古墳時代においても私部城下層では遺構・遺物がほぼ認められない。森遺跡をはじめとして上私部遺跡や私部南遺跡が集落・生産域として利用されるようになるなかで、後に私部城として利用される段丘上は集落城として開発されることはなかったものと考えられる。

（3）古代の遺物

確実な古代の遺構は確認されていない。わずかに認められるのは、奈良時代頃の瓦である。1994-2次調査地点など本郭で認められる。

これらはいずれも平瓦または丸瓦片に限定されており軒丸・軒平瓦は確認されていない。また、中世遺物に混入するものである。周辺のものが転用されたものとみられる。確実な遺構に伴うものも認められておらず、現状では周辺の郡津長宝寺跡などの古代・中世寺院のものが持ち込まれたもの

と考えられる。ただ、今後の調査の中で未確認の古代寺院が私部集落内で確認される可能性は残る。

私部城の築城までの経過を考える時に重要なのは、私部南遺跡の古代集落域などに比べて極端に遺物・遺構が少ないとある。後に私部城が築かれる台地上は、古墳時代以後、古代にいたるまで、開発の対象となっていたことがわかる。

（4）私部城築城以前の中世遺跡

これまで私部城は南北朝期に築城された可能性も指摘されてきた。しかしながら、南北朝期頃の遺物・遺構として確実なものは郭の盛土下で検出されるものが大半である。南北朝期頃には現在に残るような城は築かれていなかった。また、各調査地における堆積状況からは、後述の16世紀中頃から後半の築城にいたるまで、多くの自然谷が存在していたと判断できる。弥生時代の集落域として利用された後は長らく谷地形の入り混じる利用しにくい台地縁辺部として取り残されていたものとみられる。

顯著な遺構・遺物は次のようなものが確認された。

（a）1994-2次調査地点

本郭整地土下層で検出されたピットと遺物が私部城期以前のものである可能性が高い。ただし、集落域としての様相は不明であるとともに、遺物出土量も少ない。

（b）2005-1次調査地点

二郭の南と、本丸池西の郭（土壘状遺構）との間にあたり、溝と中世遺物が確認されている。調査面積に対して比較的多く集落域が存在した可能性が高い。また、わずかながら平瓦片も認められることが注目される。

(c) 2011 - 1次調査地点

二郭の中ほどに盛土下層から丸瓦・青磁片などの遺物が溝中に検出された。この溝自体は盛土中から掘り込まれているとみられるとともに、刃先痕跡を残し不定形のものであったことから建物などに伴うようなものではないが、周辺に瓦などの遺物を伴うような遺構が存在したことをうかがわせる。

(d) 2011 - 7次調査地点

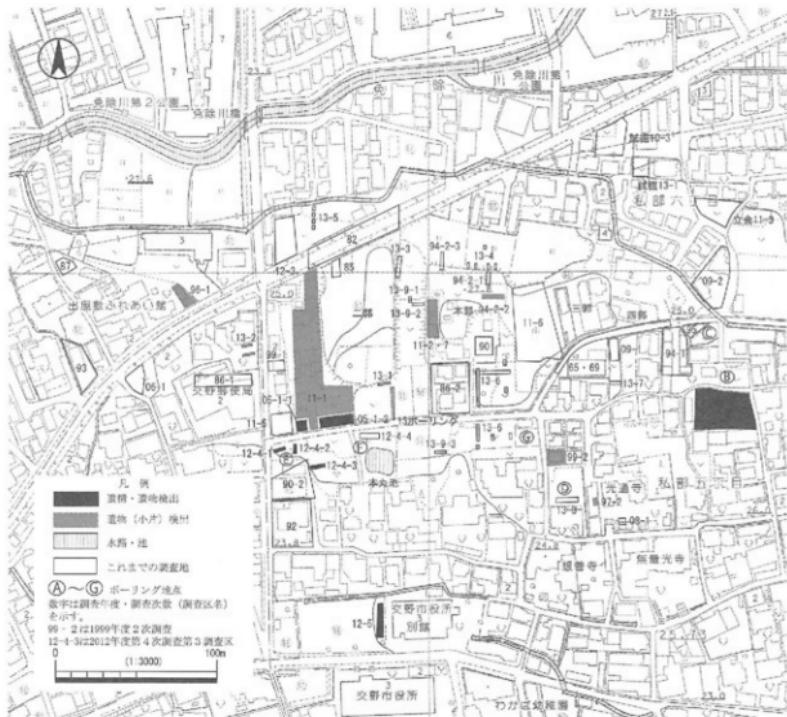
中世の瓦器碗片などが散布していた。私部城築城に伴い、本郭上の整地土中に混入したものとみ

られる。本郭周辺にわずかながら集落域が存在した可能性を示すものである。私部城築城に伴う整地土層下面で溝・ビットが検出されており、その一部が集落域の存在を示すものである可能性があるが様相は不明瞭である。

(e) 2012 - 2次調査地点

字市の中でもっとも標高の高い好立地に位置する。同地点では、古代末から中世初頭にはじまる集落域が確認された。

さらにこの集落域は、13～15世紀頃の段階において、長さ20m以上の区画溝を伴うものとなっ



第317図 私部城築城以前 遺構・遺物分布図

ていた。この頃、平安時代頃まで続いた私部南遺跡の建物群が不明瞭になっており、これにかわり、前の私部集落の中心を担つたものと推定される。第5章で述べられる私部城以前の中世私部の勢力の存在を示す遺構群である。

中でも、瓦が比較的多く検出されていることが注目される。こうした区画溝等の遺構が寺院に密接に関連したものである可能性が高い。

(e) 2012 - 4次調査地点

本丸池西の郭盛土下層で溝やピットなどの遺構とともに、14～16世紀頃までの遺物・遺構が検出された。私部城築城以前の集落域が存在したことと確認された。

(f) 2012 - 5次調査地点

私部城域南の開析谷の水平の砂混じりシルト層中で瓦器碗片などが検出されている。その近くでは、浅い溝なども検出された。中世前半から水田などの耕作域であったとみられる。

(g) 中世段階の遺構・遺物のまとめ

以上のように、中世でも15世紀頃までの集落域は私部城の中心域までは明瞭にはおよんでおらず、依然として弥生時代以来の自然の谷地形が多く残存していた。

むしろ、中世前半から始まる集落形成は、私部城の周辺域において著しく進んでいた。字市の中心部である2012 - 2次調査地点をはじめとして、古道に近い地点を中心としたものであった。さらに注意したいのは2012 - 2次調査の成果で明瞭なように、北北西から南南東にふれる方位軸をもとに集落域が形成されたとみられることである。これは現在の私部集落の大半で踏襲されている地割である。古道の方位軸もこれに沿うものである。

私部城の中心域に限定してみられる正方位軸の地割が、中世でも私部城の築城期のみに現れた特殊なものであることを示している。

(5) 小結

以上、私部城域では、弥生時代以降に遺跡形成が進んだが、その後は古代から中世にいたるまで、人為的な改変が及んだ痕跡は極めて少なかった。中世前半から始まる集落形成に関しても、私部城中心城においては古くからの地形を大きく改変するものではなく、検出される遺構・遺物の量も極めて少なかった。

これとは対照的に、私部城周辺の字市付近などでは、古代末から中世初頭に集落形成が進み、中世前半の間に区画溝を伴う遺構群が認められるようになっていた。また、区画溝の方位軸から、この段階に、現在の私部集落に引き継がれる町割の原型が形成されていたものと考えられるようになった。私部南半の私部南遺跡などの成果もふまえると、私部城築城までの私部集落の中心は、私部の東部の字市周辺や、私部南半に存在したことかがえる。

第2項 私部城期の遺構と遺物

(1) 私部城期の遺構と遺物の概要

從来から明瞭に遺存していた郭や土壘状遺構などの地上遺構に関しては、その構築方法や、細部構造、年代について手がかりが得られるようになった。これまでの40年近い調査の蓄積によって、現況の地形では確認しづらい地下遺構も多く残存していることが明らかになった。

私部城の中心域については多量の盛土と、切土を行なながら郭と堀群が形成されていた。また城の周辺に存在した自然地形を、巧みに城の防備に利用していることもうかがえる。

こうした堀や郭は、長期間利用されることによる多量の遺物の蓄積や、機能時堆積層の形成、あるいは改修の痕跡などが認められなかった。発掘の成果からは比較的短期間の間に集中的に機能し

た城の姿が明らかになりつつある。その年代は、廃絶時の出土遺物の年代からみて16世紀中頃から後半、その中でも後半よりの年代とみられる。出土遺物の様相などもふまると、安見氏による築城期にあたる可能性がたかい。ただし、その年代の限定が難しい箇所もあることをふまると、安見以前の鷹山氏段階に城郭の一部が形成されていた可能性も考えられる。

遺物などにより年代を限定することは難しい面も残すものの、私部城の中心部の遺構には、それ以前の中世私部で認められた北北東から南南西の方位軸ではなく、南北の正方位軸を取り入れた遺構が多く認められることに注目する必要がある。この正方位軸は、中世から近世の間に一時樹のみながら字市でも採用されている時期がある。これは私部城の築城に伴い城の中心部で採用された正方位の地割が、城周辺の旧集落におよんだことを示している可能性がある。

次に個別に城の各遺構の内容を整理する。

(2) 郭・土塁

(a) 本郭と本郭南平坦面

築城以前は、自然谷地形などを残し、上面は起伏に富む形態を残していたものとみられる。これを盛土により埋没させた痕跡が認められた。この盛土と同時に、本郭北側斜面の切岸が形成されたものと推定される。

また、郭上面の地盤面上にも周囲に土壘基礎の高まりを残しつつ、複雑な形狀の平坦面を形成していることから相当量の切土も実施しているものと推定できる。

本郭の平面形は、南北方向を軸とする正方形に近く、南東部と北西部に突出部を伴う。この突出部について、外輪形虎口として復元される案もある。周辺の防衛のために重要な部分であったことは確かであるが、ここに虎口が存在した痕跡は確認できていない。

また、今回の調査の中で、本郭南に地盤層から構成される平坦面が張り付くことが確認された。この平坦面上の調査成果からは、本郭の形成と同時期に形成された可能性が高いものである。この平坦面は、そのまま二郭・三郭にも連結するものであり、郭群をつなぐ通路の機能を備えるものと考えられる。また、その周囲にめぐらされた堀群とともに屈折を何地点かに伴う複雑な形狀をとっていた。

本郭や、平坦面上では軒丸・軒平瓦を含む瓦群が出土している。周辺で瓦を利用する建物が存在した可能性が高い。その構造等は現況では不明であるが、現在も石材が散布され、これまでの調査等でも石材が検出されてきたことから、礎石などを伴うものであった可能性もある。

(b) 二郭と周辺

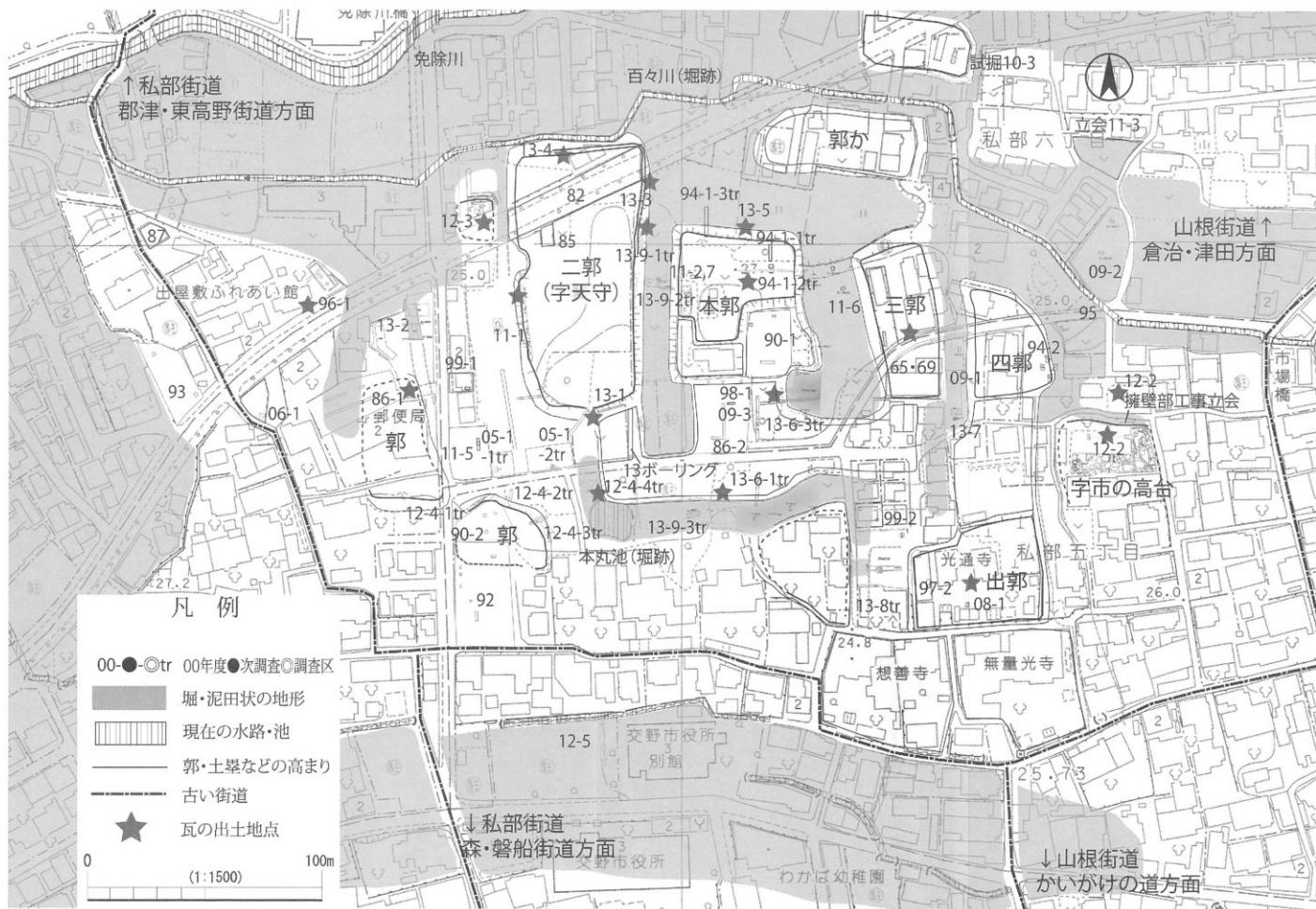
二郭付近の築城以前は、北半に東西方向にのびる自然谷が存在したことが確認された。この自然谷を盛土により埋没させるとともに、郭西斜面を切土して長方形の郭形態が形成された。その方位軸はおおむね南北方向をとるものである。

また、今回の調査の中で、二郭北西には南北方向の堀が存在し、この堀を隔てて郭が存在することが確認された。二郭北西の堀は二郭南半にまでは伸びないことから、二郭南西部には帶郭状に平坦面が張り付くことも確認された。

二郭上面の構造は不明な点が多いが、井戸や土坑・ピットなどがこれまでの調査で確認されており、施設の痕跡が良好に遺存するものとみられる。また、その周辺から瓦や土器類などが多く検出されてきた。郭上面の建物に瓦が伴っていた可能性が高い。

(c) 三郭

三郭付近では、弥生時代の谷部を埋める包含層が確認された。築城以前においても、自然地形の起伏を残す地点であったと推定される。築城時に、



地盤面に少なくとも1m以上の盛土を一定面積行い、現況の長方形の郭を形成したことが確認された。その西辺にはやや傾きが認められるが、東側斜面はほぼ南北方向にのびる形態をとる。

(d) 四郭

調査数は限定されているものの、同地点では盛土はほとんど行わず、地盤層をそのまま利用して郭として利用しているものとみられる。いびつな形態をとるのも、人為的改變が必要最低限に抑えられた結果とみられる。

(e) 出郭

現在の光通寺が立地する高台における調査では、現況の地形は1m前後の盛土を行うことによって形成されたものであることが確認された。その形態は、南北方向を軸とする四角形である。その西側に帯郭または通路として機能する平坦面が張り付き、さらにその西側で堀跡が確認された。出郭上面では、多量の瓦が検出されている。周辺の寺院から転用されるなどして、郭上面の建物に転用されたとみられる。

(f) 本丸池西の郭（土塁状遺構）

現況では土塁状に残存する遺構であるが、昭和初期の航空写真や測量図から、郭として復元される。郭形成以前にも小規模な高台と集落域が存在しており、それを1~2m前後の盛土によって埋没させて郭が形成された。その形は四郭と同様にややいびつな四角形である。上面の遺構としては、郭西縁にて、築地として復元される可能性のある南北方向の2条の溝が検出された。

(g) 郡便局付近の郭

昭和初期の写真・測量図により、郭が存在したことが確認された。現況ではその大半は削平されており、構築方法等は不明ながら、一部は二郭などに匹敵する標高のものであったとみられる。

(3) 堀

(a) 本郭・二郭間の堀

現況の堀の形成以前から、自然谷が存在した痕跡を確認した。自然の谷地形に切土を加えることによって、現況の箱堀が形成された。現況で土橋状に残る東西方向の畦畔は、堀の機能時の底面の段差を反映したものである可能性が高い。少なくとも、堀の機能時に土橋が存在しなかったことを確認した。

(b) 本郭・三郭間の堀

堀の底面には低地帯の泥田状の堆積が広がっており、堀の形成以前から低地部が入り込む谷が存在した可能性が高い。本郭東側斜面に切土を行い、三郭西側斜面に盛土を行い堀が形成されたものとみられる。箱堀と推定復元される。おおむね南北方向に延びるが、本郭南東隅の突出部により屈曲して本郭南側に回り込み、複雑な形態をとる。

(c) 三郭・四郭間の堀

堀の形成以前の地形については不明瞭である。ただし、南北方向にまっすぐ延びる形態は不自然である。部分的に自然谷が存在した可能性は高いが、新規に掘削を行うことで設定されたものとみられる。同堀跡の廃絶時の堆積層からは、瓦・陶磁器類が出土し、その年代を16世紀後半頃に置くことが可能である。

(d) 二郭西の堀

二郭と二郭北西の郭の間に南北に入り込む堀跡を確認した。これは二郭南半まで延びるものではないことが確認されている。

(e) 郡便局付近の郭の堀

発掘調査によって、郡便局付近の郭東側で底面に高低差をもつ堀跡が検出されている。また郭西側には自然の谷地形を利用したものとみられる堀

状の地形が存在した。いずれも南北方向に延びるものである。

(f) 本丸池の堀と本郭南平垣面の堀

二郭の南から南へ延びた後、ほぼ直角に東へと屈曲する池が現在も確認できる。これまででも堀跡と推定されてきたが発掘により、箱堀と復元されるものと追認された。これがさらに東へ延び、本郭南平垣面の南に張り付く堀へ続くとみられる。本郭南平垣面の堀は、今回の発掘調査の結果、ランク状の屈曲を伴い東へと延びるものであることが確認された。

2つの堀跡は連続する可能性が高いものであるが、検出された堀底面の標高に高低差が認められた。このため、土橋や堀内障壁などの施設が伴う可能性が考えられる。

(g) 百々川の堀跡

現在コンクリート擁壁がなされており、発掘調査は行えていない。しかしながら、二郭北端などで確認された高低差や幅は、堀として十分機能し得るものであった。その年代などが今後の課題となる。

(4) 関連する可能性のある遺構

2012 - 2次調査で確認された北方位をとる遺構は、層序や出土遺物から推定される年代からも私部城期に近いものであった。この正方位をとるのは同地点でこの一時的なものであり、近世以後現代まで西北西、南南東の方位が優位となる。これは、私部の集落中心域にまで、一時的に私部城の築城の影響が及んだものとみることができる。ただし、私部城の築城自体は客体的なものであったために、その廃城以後はその影響が廃れたものと考えられる。

(5) 私部城跡の出土遺物

私部城跡の遺物と確認できたのは、郭上面で検出された遺物群である。

(a) 瓦

これまでの私部城跡の調査で、もっとも多く検出してきた。

分布と出土状況・年代 本郭上の1994 - 2次調査2土坑で大量に出土した。出土状況からは郭上面で利用されたものが、廃城に伴い投棄されたものとみられる。出郭上の1997 - 2次調査井戸出土資料も同様のものとみられる。他に軒平瓦・軒丸瓦が認められるのは二郭東斜面の2013 - 3次調査と本郭南平垣面の2013 - 6次調査である。二郭周辺では限定的な発掘調査の中で本郭に次いで瓦が検出されており、今後も資料が増加することが予想される。また、本郭南平垣面周辺でも比較的多様な瓦が出土している。建物等における利用が想定されるのはこうした地点である。これらの地点における瓦群は、廃糞土坑や、堀の埋土など、城郭の廃城に伴う堆積土中に伴っていた。また、瓦自体の年代観も16世紀代の中でも中頃から後半ごろに位置づけられるものが認められた。このことから、私部城の機能時には、本郭・二郭やその周辺を中心として、瓦を利用した施設が存在したものとみられる。

なお、私部城東の2012 - 2次調査地点の中でも第1調査区の区画溝で検出された瓦群は私部城以前のものと考えられる。築城以前の光通寺などの寺院が周辺に存在することをうかがわせる。

このほかに、2012 - 2次調査部では多量の丸・平瓦が出土しており、暗渠などに転用された一群と推定される。この他の平・丸瓦のみで構成される出土地点についても建物以外へ転用された可能性が高い。建物に伴うものでないにしても、私部城域において豊富に瓦が利用されていたことを示す資料と評価できる。

なお、私部城全域でも、完形に復元できたものは数点であった。このことから、再利用可能なものについては、周辺や他の城郭などで転用されたものと推測される。

瓦の特徴・製作技法と系譜 軒平瓦をはじめとした瓦の製作技法については、北河内のみならず、摂津方面や奈良方面などの技術系譜が認められた。こうした特徴のものが入り混じることからは、中世山岳寺院などの構築にともない、交野地域周辺で活動していた瓦工人も動員しつつ、摂津など他地域の工人も併せて瓦製作と供給が行われたものとみられる。なお、それはあくまで摂津・河内・奈良など、比較的近隣の地域内のものであり、広い目でみれば畿内地域在来の瓦製作の延長線上に生まれたものと位置づけられる。

(b) 土師器

極めて出土量は少なく、本郭上、5点ほど、そのほかには堀埋土中にわずかに含まれるのみであった。

(c) 瓦質土器

本郭上の1992-2次調査2土坑、二郭東側斜面の2013-3次調査などで一定量出土している。瓦質の深鉢、摺り鉢などである。出土量は少ないと、内容は大和盆地との共通性が高いものである。

(d) 陶磁器類

部城期のものと確定できるものは極めて少ない。三郭・四郭間の堀の調査である2013-7次調査で検出された備前陶器大皿などがあるのみで

第5表 私部城跡瓦出土地点・重量一覧

城域における位置	調査次・調査区・採集地点	軒平瓦		軒丸瓦		平瓦		大瓦		道具瓦		不明	
		点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
本郭上面	1994-2次第2調査区土坑1	3	1683.1	3	617.8	288	46881.0	60	11948.5	4	823.7	1	3.4
	1994-2次第2調査区ピット6										1	56.9	
本郭北斜面	1994-2次第3調査区			6	4009.6	2	3011.0	3	607.7				
	2013-4次第1~2調査区			3	234.8							1	94.9
本郭・三郭間の堀	2013-8次第2調査区			9	835.4	1	181.1					1	4.9
	2013-6次第2調査区10箇	1	18.7	5	821.1	1	32.2	3	157.4	1	5.5		
本郭南平垣面・堀	2013-6次第2調査区537箇			10	484.3	5	752.8						
	2013-6次第5調査区			9	1348.0	1	62.5					2	38.7
本郭南平垣面・堀	2013-6次第1調査区1湖			2	134.2	1	53.9						
	2013-6次第1調査区									1	386.0		
本郭南平垣面・堀	2013-6次第6調査区1湖			1	104.5							3	79.6
	2013-6次第7調査区1湖	1	68.7	8	602.7	2	93.7					1	4.9
本郭・二郭間の堀	2013-6次第8調査区1湖	1	66.6	3	67.5								
	2013-9次第1・2調査区			23	2935.0	3	298.0						
二郭南平垣面・堀	2013-3次	1	286.3	1	67.7	25	4792.4	7	794.1				
	二郭南平垣面・堀									2	948.0		
二郭北～北西部	1982年			9	5737.8						1	1198.0	
	2012-3次			1									
二郭南～南西部	2013-5次			3	210.3	1	88.6					1	54.4
	2011-1次			1	521.0								
二郭南～南西部	2005-1次			1	215.4								
	2013-1次			2	398.9								
二郭南の堀(本丸池)	2012-4次第4調査区									1	807.9		
	本丸庭西の堀			9	1602.1	3	258.1				1	41.9	
廻使局付近の堀	1988-1次			87	15928.8	4	168.7			1	9.9		4.3
	1995-1996年度			1									
三郭～四郭	三鷹古墳探査			3	533.4								
	2013-7次			3	226.7	9	2278.6					53.6	
出郭(現・光通寺)	4次探査			4	612.0								
	1997-2次	3	3161.5	3	1187.7	279	54131.2	113	34284.6	7	9908.0	5	188.7
私部城東(字市場)	1999-2次							321.0					
	2013-8次			3	314.8								
私部城東(字市場)	2012-2次第3調査区	1	475.5			18	3433.2	12	1184.5			1	58.1
	2012-2次第1調査区			5	544.5	2	849.4					1	14.6
私部城東(字市場)	2012-2次第1調査区10箇			5	844.2	2	1072.5					1	11.2
	2012-2次第2調査区			3	73.4							1	12.3
私部城東(字市場)	2012-2次第3調査区			3	233.0								
	合計	9,	6632.4	9,	1961.0	842	154041.7	229	69358.5	28	15610.6	21	588.5

ある。特に、本郭上面の調査においても出土がほぼ皆無であることが注目される。郭上面を徹底的に片づけたものか、郭上では利用されることが少なかったか、いざれかの可能性が考えられる。

(e) 鉄器類

ごくわずかであるが、2013 - 3次調査の郭斜面で検出された鉄片と2011 - 1次調査の二郭上面西端から検出された刀子の可能性のある鉄片がある。いずれも破片で投棄されたものと考えられるが、二郭において利用された可能性がある。

第3項 発掘調査成果のまとめ

(1) 私部城の推定範囲

調査結果からは、字城を中心として郭、堀などの遺構が密集していることが改めて確認された。本郭から三郭を中心として、周間にめぐらされた郭や堀を一連の城域として認めることができる。

その一方で、私部城の周辺には自然の谷地形や低地部が存在し、これも巧みに城の防衛に取り入れられている。これは明瞭な人為改変を伴うものではなかった。こうした地形については、城域とは区別する必要もある。私部城の明確な城域を推定するには、他の城郭との比較検討が必要になるが、現状で畿内地域の平地城郭の様相については不明な点が多い。周辺地域の悉皆調査を経たうえで、城域の詳細について再度検討する必要がある。

(2) 私部城の年代・構造と特質

私部城以前の中世私部の集落については高級陶磁を出土する私部南遺跡や、2012 - 2次調査で確認された区画溝と遺構群など、私部南部から東部に中心があったと考えられる。私部城の中心部が築かれた私部集落の北端は、築城以前は自然谷も残り、中世の集落開発が必ずしも及んでいなかつ

た地点と評価できる。

私部城は、16世紀の中頃から後半の間のごく短期間に、この空閑地を活かして築かれ、機能した城郭である。見方によっては、中世私部集落の中心域に寄り添うように築かれた城とも評価できる。私部城が中世私部の中で客体的な存在であったことは、私部城中心部の南北方向の地割が、その後、私部集落の中で徹底されることはなかったことからもうかがえる。

私部城は交野台地の開析谷と台地を利用しつつも、多量の切土と盛土を駆使して正方位軸を意識した連郭式の平地城郭を築いたものである。発掘調査によって明らかになったことは、東西南北に極めて多くの堀を配置して郭群を防備していることである。

畿内地域における平地城郭の様相は不明瞭なものが多く、類例を求めるることは難しい。その中でも本郭南に張り付く複雑な形態の平坦面については、大和の筒井城に類似する面がある。また郭周辺の堀の形態については河内の若江城と共通する可能性がある。3つの郭が連立する点は大和の今市城や伊勢の国府城との共通性が垣間見える。私部城の縄張り形態は、平地城郭として複雑な形態をみせるものの、いわゆる織豊城郭からの影響を認めるほどには至っていない。これは、石垣が現状で認められないことからも判断できる。河内や大和など、畿内地域の平地城郭の延長線上に築かれた縄張りと現状では評価される。

また、私部城は第4章で明らかにされるように、織豊城郭に先行して瓦を利用していているという点で、畿内地域の先進性を示す平地城郭である。瓦の内容のみならず、城主となった安見氏の立ち位置もふまえると、織豊城郭の成立期に重要な影響を与えたことがうかがえる。さらに、第5章で明らかにされるように、戦国期の畿内における争乱の中で重要な役割を果たした城郭であった。私部城は政治・文化の中心地であった畿内において醸成された平地城郭の到達点の一つと評価できる。

参考文献（第1～3章）編著者名五十音順・年代順

- 足利健亮 1985『日本古代地理研究』、大明堂
- 芦田淳一 1998「總持寺出土の中世瓦・瓦当接合技法を中心に」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』、帝塚山大学考古学研究所
- 網仲也 2006『上私部遺跡と渡来人の動向』『古墳時代に生きた渡来人の軌跡 要旨集』、(財)大阪府文化財センター
- 後川恵太郎編 2007『私部南遺跡I』センター調査報告第154集、財団法人大阪府文化財センター
- 石部正志 1989『考古学からみた奈良街道』『歴史の道調査報告書第4集 奈良街道』、大阪府教育委員会
- 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992『有岡城・伊丹郷町II』
- 伊藤晃 1995『備前』『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
- 岩崎誠編 1991『勝龍寺城発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財調査報告書第6集、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
- 植木久・鈴木秀典・中川信作・宮本佐知子・八木久栄 1988『大坂城跡III』、財団法人大阪市文化財協会
- 上田修編 1995『光通寺』交野市史研究紀要第6輯、交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団
- 上田修編 2003『想善寺』交野市史研究紀要第15輯、交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団
- 上田修編 2010『無量光寺』交野市史研究紀要第23輯、交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団
- 内田大輔編 2005『交野市の石造文化財I - 私市・私部・神宮寺・倉治地区編 - 』交野市石造文化財調査報告書I、交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団
- 内田大輔編 2006『交野市の石造文化財II - 郡津・森・寺・傍示・星田地区 - 』交野市石造文化財調査報告書II、交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団
- 近江俊秀 1994『大和瓦質擲体考』『研究紀要第二集』、財団法人山良大和古代文化研究会
- 大阪城天守閣編 1997『秀吉と桃山文化一大阪城天守閣名品展一』
- 大阪府住宅供給公社・鶴枚方市文化財研究調査会 1992『津田城遺跡発掘調査概要報告』
- 小川暢子 1995『私部城跡・発掘調査概要報告書1 - I』、交野市教育委員会
- 小川暢子 1999『平成10年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』交野市文化財調査報告 1998-II、交野市教育委員会
- 奥野和夫・山口博志 1989『昭和63年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
- 奥野和夫 1990『1989年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
- 奥野和夫・小川暢子 2003『平成14年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
- 奥野和夫・小川暢子 2005『平成16年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
- 奥野和夫・真鍋成史 2000『平成11年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
- 奥野和夫・真鍋成史編 2001『森遺跡Ⅲ』交野市埋蔵文化財調査報告 2001-VII、交野市教育委員会
- 奥野和夫・真鍋成史 2004『平成15年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
- 奥野平次・鵜飼満男 1976『郡津郡衙遺跡範囲確認・調査概要』交野市文化財調査概要 1975-2、交野市教育委員会
- 奥野平次・鵜飼満男 1977『郡津郡衙遺跡範囲確認・調査概要』交野市文化財調査概要 1977-3、交野市教育委員会
- 奥野平次 1981「第5章 伝説」『交野市史民俗編』、交野市史民俗編
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
- 景守紀子・中光司・米田昭一 1986『交野市史自然編I』、交野市
- 交野考古学研究会 1955『石礎第1号』
- 交野考古学会 1956『石礎第5号 開元寺跡発掘報告』
- 交野古文化同好会 1982『石柱50号』
- 交野町教育委員会 1970『私部「城」弥生遺跡調査書』
- 交野市教育委員会 1991『平成2年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』交野市文化財調査概要 1991-3

- 交野市教育委員会 1993『平成4年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 1995『私部城跡・発掘調査概要報告書1・』
交野市教育委員会 1998『平成9年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2000『平成11年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2006『平成17年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2010『平成21年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市教育委員会 2014『平成25年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』
交野市文化財事業団 2004『交野市内の刻印瓦について』『交野市文化財だより』第13号
交野市文化財事業団 2012『交野市の瓦』
片山長三編 1976『交野町史増補改訂一・二』、交野町
片山長三 1981『交野市史 交野町略史 復刻編』、交野市（1963初版、1970増補改訂）
元興寺文化財研究所 1982『中・近世瓦の研究・元興寺篇』
木下利謙・上田修 2008『堺小松寺』交野市史研究紀要第21輯、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩 1992『法隆寺の至寶 瓦』、小学校
小島博子 1998『山根街道』『地域文化誌なんだ』第63号、まんだら編集部
小島道裕 1993『歴史地理的な方法による調査』『城館調査ハンドブック』、新人物往来社
小谷利明 2013『天下再興の駆けと私部城 発表レジュメ』、交野市文化財事業団
小林章男 1991『続鬼瓦』、共同精版印刷
才原金弘編 1988『若江遺跡第27次発掘調査』、（財）東大阪市文化財協会
佐川正敏 1989『中世・近世の丸瓦』『伊河留我』法隆寺資材帳調査概報10、法隆寺昭和資材帳編纂所
佐竹昭広編 1980『室町殿日記 下 京都大学蔵』、京都大学国語国文資料叢書一七
佐藤亜里 1996『大和における瓦質土器の展開と画期』『中近世土器の基礎研究XL』、日本中世土器研究会
佐藤良二・綿川一徳 2010『近畿地方』『講座日本の考古学I 旧石器時代（上）』、青木書店
篠原豊一 1984『多聞城跡の調査』『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度、奈良市教育委員会
清水亜弥 2014『戦国 大阪の城—動乱の時代と天下統一— 図録 大阪のお城がわかる本』、高橋市立しろあと歴史館
鶴柄俊夫 1995『各地の瓦質土器』『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
皆原正明 1983『畿内における中世土器の生産と流通』『古文化論叢』、古代を考える会・藤澤一夫先生古希記念論集刊行会
千田嘉博 2006『奈良県高山城の構造』『文化財学報23・24集』、奈良大学文学部文化財学科
武内雅人 2001『丸瓦製作技術からみた近世瓦の生産と流通』『ヒストリア』第173号、大阪歴史学会
立石堅志 1995『瓦質土器（奈良火鉢）』『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
田中幸夫 1995『垂墨を通過した天王寺系瓦工人』『畿豐城郭』第2号、畿豐城郭研究会
田中幸夫 2004『播磨の中世瓦』
棚橋利光 1989『二、河内中北部の街道（東西道） 三、街道の現状』『歴史の道調査報告書第4集 奈良街道』、大阪府教育委員会
千喜良淳 2002『中・南河内における土師器皿の変遷』『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』、東大阪市教育委員会
千葉篠智 1973『はげ山の文化』、学生社
土山公仁 1990『常陸系城郭における瓦の採用についての予察—同窓あるいは同型瓦を中心にして—』『研究紀要4』、岐阜市歴史博物館
中光司 1981『第六章 地名』『交野市史民俗編』、交野市
中井公 1979『多聞城跡発掘調査報告』、奈良市教育委員会
中井均 1981『交野城』『津田城』『田原城』『日本城郭大系12 大阪・兵庫』、人物往来社
中井均 1982『交野城跡と北河内の城跡』『地域文化誌なんだ』第16号、まんだら編集部
中井均 2011『私部城の歴史と構造』『シンポジウム「私部城」資料集』、交野市文化財事業団
中井均 2013『付録解説 烏帽子形城跡の縄張り図』『大阪春秋』No.149、新風書房

- 中西裕樹 2004 「私部城」『図説近畿中世城郭事典』、城郭談話会
- 中西裕樹 2013 「田原城とその周辺」『城からみた畿内時代の田原 資料』市民講座「桃源郷田原」、田原の明日を拓く会・摂河泉地域文化研究所
- 難波洋三 1992 「第6節 徳川大坂城期の炮烙」『難波宮跡の研究第九』、財団法人大阪市文化財協会
- 西田敏秀 1998 「河内国交野郡素描 -奈良時代～平安時代前期の遺跡群を中心として-」『網干海教先生古希記念考古学論集』
- 西田敏秀・荒木幸治 2000 「淀川左岸地域における弥生集落の動向」『みずほ』第32号、大和弥生文化の会
- 乗岡実 2001 「備前焼大甕縄年レクチャー資料」『関西近世考古学研究IX』、関西近世考古学研究会
- 馬部隆弘 2004a 「城郭由緒の形成と山論—「津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実態—」『城館史料学』、城館史料学会
- 馬部隆弘 2004b 「津田城一付、本丸山城」「犬田城」『図説近畿中世城郭事典』、城郭談話会
- 馬部隆弘 2005 「偽文書からみる畿内国境地城史 -「偽文書」の分析を通して-」『史敏』2号、史敏刊行会
- 馬部隆弘 2009 「牧・交野一揆の解体と織田政権」『史敏』二〇〇九春号（通巻六号）、史敏刊行会
- 濱田延光 2001 「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『市史紀要第8号』、寝屋川市教育委員会
- 平尾兵吾 1972 『北河内史蹟史話』（1931年初版）
- 枚方市文化財研究調査会 1988 「図録・枚方の遺跡」
- 福岡憲編 1988 「重要文化財北田家住宅 主屋・表門・乾蔵・北蔵・土蔵（含裏門）・根木納屋 修理工事報告書」、（財）文化財建造物保存技術協会
- 福永信雄編 1993 『若江遺跡第38次発掘調査報告』、財団法人東大阪市文化財協会
- 藤原学 2002 『達磨窯の研究』、学生社
- 船築紀子・熊谷博志・吉田綾子・三好孝一 2011 『私部南遺跡II』、（財）大阪府文化財センター
- 振角卓哉 2006 「仁正寺藩誕生 レジュメ」、日野町教育委員会
- （財）文化財建造物保存技術協会編 1988 『重要文化財北田家住宅修理工事報告書』、明新印刷株式会社
- 真鍋成史編 1993 『新宮山遺跡』交野市埋蔵文化財調査報告 1992-II、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
- 真鍋成史 1997a 『平成8年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』、交野市教育委員会
- 真鍋成史 1997b 「河内国・守部氏に関する基礎的考察 -古墳時代鍛冶遺跡の実態解明に向けて-」『河内古文化研究論集』
- 真鍋成史 2003 「交野市内の刻印瓦について」『関西近世考古学研究XI』、関西考古学研究
- 真鍋成史編 2004 『須弥寺遺跡』交野市埋蔵文化財調査報告 2003-II、交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団
- 水野正好 1992 『交野市史 考古編』、交野市教育委員会
- 水野正好 2009 「北河内に息づいた人々」『一北河内の古墳一前・中期古墳を中心に』、（財）交野市文化財事業団
- 三宅俊隆 1986 「第六節五 津田城遺跡」『枚方市史第12巻』、枚方市史編纂委員会
- 三好孝一ほか 2011 『私部南遺跡III・有池遺跡・上私部遺跡・上の山遺跡』、（財）大阪府文化財センター
- 村田修三 1980 「北田原城」「高山城」「日本城郭大系10三重・奈良・和歌山」、新人物往来社
- 森田克行 1984 『押津高櫻城』高櫻市文化財調査報告書第14冊、高櫻市教育委員会
- 矢倉嘉人編 2005 『上の山遺跡I』、（財）大阪府文化財センター
- 山川均 1996 「城郭瓦の創製とその展開に関する覚書」『織豊城郭』第3号、織豊期城郭研究会
- 山崎信二 2000 『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊
- 山崎信二 2003 「近世瓦の技法と編年」『関西近世考古学研究XI』、関西考古学研究
- 山崎信二 2008 『近世瓦の研究』、同成社
- 若林幸子編 2007 『有池遺跡I』センター調査報告第152集、財団法人大阪府文化財センター
- 若林幸子・黒須姫希子 2009 『上私部遺跡III』、（財）大阪府文化財センター
- 若林幸子 2010 「開発拠点としての集落一上私部遺跡の発掘調査成果を中心に」『発掘！発見！縁立つ道 ヤマト政権の生産基盤を掘る！ 講演記録集』交野市教育委員会・（財）交野市文化財事業団

第6表 遺物観察表1

次 数 No.	出土地點 No.	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口幅 /深幅 (cm)	湖厚 (cm)	焼成 /破幅 (cm)	残存率	備考
1	第2調査区 土坑1	-	瓦	軽平瓦	牛糞陶 2.5~3mmの大粒少量含む	堅微	黒面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 瓦面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰白色	-	2.0	-	瓦当面と 平瓦部 1/2	唐草文 平瓦部は圓心偏東方向のナ ダ、瓦当と接する部分東側り 且当と平瓦の接合部は接着 部C
2	第2調査区 土坑1	2層	瓦	軽平瓦	やや粗 能動な砂粒多く含む 3~3mmの大粒含む	堅微	瓦面iT.8T/1灰褐色 瓦内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰白色	-	-	-	瓦当面の 一部	唐草文の一筋が残る
3	第2調査区 土坑1	-	瓦	軽平瓦	やや粗 1mm以下の砂粒(雲母・鉱石 など)多く含む 3mmの大粒(灰石)少量含む	やや 軟	瓦面iT.8T/1灰褐色 瓦内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰白色 器外iT.8T/1灰白色	-	3.0	-	瓦当面と 平瓦部の 一部	瓦当面はナダ、くびれ部 分工具による強いナダ 瓦当外縁に端面取扱
4	瓦釜											
5	第2調査区 土坑1	-	瓦	軽丸瓦	やや粗 3mmの大粒(灰石)含む 1mm以下の砂粒(雲母など) 含む	堅微	瓦面iT.8T/1灰褐色 瓦内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色 10mmT.4/1に黄褐色	-	外区幅 1.9	-	瓦当面 2/3	こくほ(小腰筋) 外区幅と内区幅 の差は底 部に腰筋 瓦當と瓦当の後部は瓦 当部にナダで直しを施す
6	第2調査区 土坑1	-	瓦	軽丸瓦	素 1mm以下の砂粒(雲母)多 く含む	堅微	内面iT.8T/1浅黃褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰白色	-	瓦区幅 2.2	-	丸瓦部の 一部	使用方法の可塑性あり 丸瓦部は圓心偏東方向のナ ダ、瓦当切ぎ
7	第2調査区 土坑1	-	瓦	軽丸瓦	素 1mm以下の砂粒含む	堅微	瓦面iT.8T/1灰褐色 瓦内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰白色	-	外区幅 2.3	-	瓦当の 一部	瓦当 外区幅に薄利
8	第2調査区 土坑1	2層	瓦	平瓦	素	堅微	内面iT.8T/1オーリーブ色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色	23.8	2.1	30.0	3/4	端面偏方向のナ ダ、瓦当偏方向のナ ダ
9	第2調査区 土坑1	-	瓦	平瓦	素	やや 軟	内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色	23.5	2.0	30.1	2/3	端面偏方向のナ ダ、瓦当偏方向のナ ダ
10	第2調査区 土坑1	-	瓦	平瓦	やや粗 2mmの大砂粒(花崗岩)含 む 1mm以下の砂粒(雲母)多 く含む	堅微	凸面 iT.8T/2浅黄色 2.3T/2浅黄色	25.0	2.2	-	底面 2/3	端面偏方向のナ ダ、瓦当偏方向のナ ダ、ハレ 形
11	第2調査区 土坑1	-	瓦	丸瓦	やや粗 1mm以下の砂粒(花崗岩)含 む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色 器外iT.8T/4/1に黄褐色	-	2.2	-	玉縁側の 一部	瓦當吊り筋 とその間に瓦板
12	第2調査区 土坑1	-	瓦	丸瓦	やや粗 砂粒含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色	12.6	2.1	-	玉縁側の 一部	凸面偏方向のナ ダ、瓦當吊り筋
13	第2調査区 土坑1	2層	瓦	丸瓦	やや粗 2mm以下の砂粒少量含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色	-	2.0	-	玉縁側の 一部	凸面偏方向のナ ダ、瓦當吊り筋、コビキ板
14	第2調査区 土坑1	-	瓦	丸瓦	素 1mm以下の砂粒(雲母)少 量含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰白色	-	2.1	-	下縁側の 一部	凸面偏方向のナ ダ、瓦當吊り筋、瓦底
15	第2調査区 土坑1	沃魚上	瓦	丸瓦	やや粗 全面上に細粒(雲母)少含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 2.3T/2灰褐色 2.3T/2灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色 器外iT.8T/1灰褐色	-	2.2	-	体部の 一部	端面吊り筋、瓦底 部
16	第2調査区 土坑1	3層	瓦	丸瓦	2mm以下の砂粒少量含む	堅微	凸面 iT.8T/1灰褐色 2.3T/2灰褐色 2.3T/2灰褐色 2.3T/2灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色 器外iT.8T/1灰褐色	(10.8)	2.0	-	端面側の 一部	凸面偏方向のナ ダ、瓦底 部
17	第2調査区 土坑1	-	瓦	丸瓦	素 1mm以下の砂粒含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰白色	-	1.7	-	体部の 一部	凸面偏方向のナ ダ、瓦底吊り筋、コビキ板
18	第2調査区 土坑1	-	瓦	丸瓦	やや粗 3mm以下の粗、1mm以下の粗 雲母多く含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色	-	2.7	-	体部の 一部	凸面偏方向のナ ダ、瓦底吊り筋、微かに鉛錆
19	第2調査区 土坑1	-	瓦	面瓦	やや粗 1mm以下の多く含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 内面iT.8T/1灰褐色 器内iT.8T/1灰褐色 器外iT.8T/1灰褐色	-	1.9	-	体部の 一部	瓦當吊り筋著しく調整不際 感
20	第2調査区 土坑1	-	瓦	丸瓦	やや粗 1mm以下の砂粒含む 鐵錆の跡等を含む	堅微	凸面iT.8T/1灰褐色 1.5T/2灰褐色 2.3T/2灰褐色 器内iT.8T/1灰白色 器外iT.8T/1灰白色	16.5	1.9	-	玉縁側	凸面偏方向のナ ダ、瓦當全面に所産の布目板、 細いコビキ板、瓦底の鉛錆

第7表 遺物観察表2

次 数 No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径 /横幅 (cm)	厚さ (cm)	器葉 /破片 (cm)	残存率	備考
21	第2調査区 土坑1	2層	瓦	不明	胎 0.5~2mmの大砂粒含む 鐵錆な質含む	難燃	内面:2.5mm/灰白色 外面:2.5mm/灰白色 胎内:2.5mm/灰白色	-	3.0	-	-	体部の 内面格子目印有り
22	第2調査区 土坑1	3層	瓦	瓦瓦	やや粗 均分的に1.5mmの大砂を含む	難燃	内面:2.5mm/灰白色 外面:1.0mm/灰白色 胎内:1.0mm/灰白色	-	2.0	-	-	体部の 内面格子目印有り
23	第2調査区 土坑1	3層	瓦	道具瓦	やや粗 2~4mmの大白、褐色鐵錆含む 4mmの大砂含む 鐵錆、自然砂粒多く含む	難燃 やや 不良	内面:5.0mm/灰白色 外面:5.0mm/灰白色 胎内:3.5mm/灰白色 胎内:3.5mm/灰白色	-	2.3	-	-	体部の 内面ケズリ 凸面側タキ
24	第2調査区 土坑1	-	瓦	平瓦	やや粗 2mm以下の砂粒含む 5~6mmの大砂(石)より含む	難燃	内面:2.5mm/灰白色 外面:1.0mm/灰白色 胎内:2.5mm/灰白色	-	2.3	-	-	気泡部 体部の一帯 内面ケズリ 凸面側目印に
25	第2調査区 土坑1	4層	瓦	平瓦	1mm以下の砂粒含む	難燃	内面:2.0mm/灰白色 外面:2.0mm/摩耗オーバーブラック 胎内:2.0mm/灰白色	-	1.9	-	-	体部の 内面ケズリ 凸面側タキ
26	第2調査区 土坑1	-	瓦	平瓦	胎 0.5mm以下の中砂、鐵錆な質 含む	難燃	内面:2.0mm/灰白色 外面:2.0mm/灰白色 胎内:2.0mm/灰白色	-	2.1	-	-	扶桑部の 内面ケズリ 一帯黒目タキ
27	第2調査区 土坑1	-	土師器	II	胎 1~2mmの大黒色砂粒含む 2mmの大砂粒含む 鐵錆含む	良好	内面: 1997/4/25/4/25/4 1997/3/8/28黄褐色 7.5mm/3/25/4/25/4 胎内: 1997/4/25/4/25/4 黄褐色	口径 (L, D) 底厚 (D, A)	6.0	2.1	-	1/6 内外鉄板ナダ 無拵器
28	第2調査区 土坑1	-	土師器	II	胎 1~2mmの大黒色砂粒含む 2mmの大砂粒含む 鐵錆含む	良好	内面: 1997/3/10/6/6 6/10/6 外面: 7.3mm/7/4/25/4 7.3mm/7/4/25/4 胎内: 7.3mm/7/4/25/4 黄褐色	(16.6)	6.0	1.3	-	1/6 内外鉄板ナダ 無拵器
29	第2調査区 土坑1	-	土師器	II	胎 1~2mmの大黒色、白色砂粒 鐵錆含む	良好	内面: 1997/3/10/6/6 6/10/6 外面: 7.3mm/7/4/25/4 7.3mm/7/4/25/4 胎内: 7.3mm/7/4/25/4 黄褐色	口径 (L, D) 底厚 (D, A)	6.0	1.5	-	1/4 内外鉄板ナダ 無拵器
30	第2調査区 土坑1	-	土師器	III	胎 1mmの大砂粒含む 鐵錆含む	良好	Pt-赤茶・濃茶: 7.5mm/7/4/25/4 黄褐色	口径 (L, D) 底厚 (D, A)	6.0	1.5	-	1/6 内外鉄板ナダ 無拵器
31	第2調査区 土坑1	-	陶製品	鉢	-	-	-	外径 (L, D)	0.11	-	-	光面 天竺三足
32	第2調査区 土坑1	-	土師器	II	胎 鐵錆含む	良好	Pt-赤茶・濃茶: 7.3mm/7/4/25/4 鉢	口径 (L, D)	6.0	-	-	口縁部 内面強引狭 ナダ 内外鉄板ナダ 無拵器
33	第2調査区 土坑1	2層	ガラス 製品	ガラス玉	-	-	-	径 (D)	2.0	-	-	類似 物の様なのが付く可動性 あり 判斷不確
34	第2調査区 土坑1	2層	瓦	盤	胎 黑色砂粒、雲母多く含む 2~3mmの大砂粒含む(高閃石 含む)	難燃	内面: 9/23/1/2/1 外面: 9/23/1/2/1 胎内: 9/23/1/2/1 黄褐色	(40.0)	1.1	(9.0)	口縁部 底部1/10	全体的に開裂ナダ 内面強引狭 ナダ 下半強引狭状況
35	第2調査区 ピット6	-	瓦	瓦瓦	胎 4.5mm以下の砂粒含む 2~3mmの大砂粒含む	難燃	内面:16mm 外面:15mm 胎内:16mm	-	1.9	-	-	体部の 内面ナダ
36	第2調査区 ピット6	-	瓦	標記	やや 粗	やや 粗	内面:6/7/1 外面:7.5mm/1 胎内:10/10/6/4 黄褐色	-	-	-	底部 1/9 内外鉄板ナダ 内面の覆り付2.5cmに本を 詰め	
37	第1調査区	2層	瓦	瓦瓦	三星花原	胎 黑色砂粒、雲母含む	難燃	底厚 (L, D)	0.0	残存厚 (D, A)	3.1	底部の 内面強引ナダ 内面強引方角のケズリ後 張り付け箇所をナダ

第8表 遺物観察表3

次 数 No.	出土地点	出土順序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径 /奥幅 (cm)	器厚 /底幅 (cm)	残存率	備考
38	調査区北端	整地土層	瓦器	板瓦		堅膜	内・外面:33/暗灰色 裏内:1077/灰白色	-	6.4	-	口縁部ナダ 内腹面輪郭ナダ 小片に縫合部が内側する
39	調査区北端	整地土層	瓦器	板瓦		堅膜	内・外面:34/灰色 裏内:1077/灰白色	-	6.4	-	口縁部ナダ 内腹面ともに縫合ナダ 小片に縫合部がわずかに外派する
40	調査区北端	整地土層	瓦器	板瓦	やや粗	内・外面:35/灰色 裏内:1077/灰白色	-	6.4	-	口縁部 内腹面 外腹面ナダ	
41	調査区北端	整地土層	瓦器	板瓦	やや粗 1mm以下の砂含む	やや粗	内・外面:36/灰色 裏内:17, 88/1灰白色	-	6.4	-	口縁部 内腹面に縫合部らしい 小片に縫合部が内側に二条状現象
42	調査区北端	整地土層	瓦器	板瓦	粗	内・外面:38/1灰白色 裏内:1086/41灰白色 裏内:1086/41cぶつ・黄褐色	-	6.4	-	口縁部 内腹面輪郭ナダ 小片に縫合部が内側に一条状現象	
43	調査区北端	整地土層 下部	瓦器	板瓦	やや粗 1mm以下の砂含む	堅膜	内・外面:36/灰色 裏内:1086/1灰白色 裏内:1086/1bぶつ・黄褐色	-	6.4	-	口縁部 内腹面に縫合部らしい 小片に縫合部
44	調査区北端	整地土層	瓦器	板瓦	燒素	堅膜	内・外面:38/1灰白色 裏内:1086/1灰白色	-	6.3	-	口縁部のみ 内腹面に縫合部らしい
45	調査区北半	整地土層	瓦器	板瓦		堅膜	内・外面:36/灰色 裏内:1077/1灰白色	-	6.3	-	内腹面輪郭ナダ 口縁部輪郭ナダ 外腹面輪郭ナダ 口縁部内側に一条状現象 大和型 (13c型)
46	南北 サブ トレンド	整地土層	瓦器	板	やや粗 1mm以下の砂含む	堅膜	内・外面:36/灰色 裏内:17, 87/2灰白色	-	6.3	-	口縁部 内腹面輪郭ナダ 小片に縫合部 縫合型 瓦束?
47	調査区北半	整地土層	瓦器	板瓦	燒素	堅膜	内・外面: 7, 88/1灰白色 裏内:18/1灰白色	-	6.3	-	裏付け高台 内腹面のもじぎや 縫合型
48	南北 サブ トレンド	整地土層	瓦器	板瓦	-	内・外面: 7, 88/1灰白色 裏内:18/1灰白色	-	6.4	1.0	-	口縁部～ 内腹面に縫合部あり 底部小片
49	東西 サブ トレンド	整地土層	陶器	板	粗	内・外面: 12, 89/1オーラープ灰褐色 裏内:1086/2ぶつ・黄褐色	(15.0)	6.4	-	口縁部 1/8	内腹面縫合
50	調査区 中央部	整地土層	陶生土器	壺	4.5cm大の縫合と 2mm以下の砂含む	軟	内・外面: 1077/6灰褐色 裏内:16/1灰白色	底径 (7.7)	6.9	-	底部3/4 内腹面に縫合部らしい
51	整穴建物1	上部 腰削時	陶生土器	壺	やや粗 2mm人の砂含む	軟	内・外面: 1077/6灰褐色 裏内:16/1灰白色	-	6.7	-	口縁部 内腹面に縫合部らしい 小片に縫合部内凹
52	整穴建物1	上部 腰削時	陶生土器	壺	やや粗	内・外面:1078/4灰褐色	-	6.5	-	口縁部 内腹面に縫合部らしい 小片に縫合部が内側に把手する 口縫合部断面に方孔を呈す	
53	整穴建物1	上部 腰削時	陶生土器	壺	粗 1mm人の砂含む	軟	内面: 1077/4cぶつ・黄褐色 外面: 1077/3cぶつ・黄褐色 裏内: 1073/オーラープ黒色	-	6.4	-	口縁部 内腹面2mm～3mmの丁寧な 縫合で手 (支拂所) 外面に縫合ナダ 口縫合部断面は方孔及び断面
54	整穴建物1	-	陶生土器	壺	やや粗 5mm人の砂含む	やや粗	内面: 1077/4cぶつ・黄褐色 外面: 1078/4cぶつ・黄褐色	(15.6)	6.6	-	口縁部 底部下方のみケズリ 内腹面ナダ
55	整穴建物1	上部 腰削時	陶生土器	壺	粗 2.5mmの白い小砂含む 黄褐色を多く含む	軟	内面: 1078/4cぶつ・黄褐色 外面: 1077/4cぶつ・黄褐色 裏内: 1077/4cぶつ・黄褐色 外面: 1078/4cぶつ・黄褐色	-	6.5	-	口縁部 内腹面三角形の突起が3 走る 口縫合1-4式?
56	整穴建物1	上部 腰削時	陶生土器	壺	やや粗 2mm以下の砂含む	やや粗	内面: 1073/オーラープ黒色 外面:1078/6灰褐色	-	6.7	-	1/2 内腹面に縫合部らしい 縫合型?

第9表 遺物観察表4

次 数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径 /鉢幅 (cm)	器厚 (cm)	器高 /鉢高 (cm)	残存率	備考
57		壁穴建物 1	-	非生土器	不明	粗 3mm以下の砂含む 2mm以下の砂粒多く含む	灰	内面: 10mm/4にぶい黄褐色 外面: 10mm/4にぶい黄褐色 裏面: 10mm/2にぶい黄褐色	底径 (3.0)	1.0	-	底部完存	内面雲に磨滅著しい 手縫ね
58		壁穴建物 1	郊付近	非生土器	不明	粗 3mm~1mmの大砂含む 3mmの不規則含む	やや灰	内面:7.5mm/6焼魚 外面: 10mm/3にぶい黄褐色 裏面:7.5mm/6黄褐色	底径 (4.0)	0.6	-	底部1/7	内面雲滅著しい 外面マダ
59		壁穴建物 1	-	非生土器	器	粗 5mm以上の大砂含む 1mm以下の砂粒多く含む	灰	内面:7.5mm/6焼魚 外面: 10mm/4にぶい黄褐色 裏面:7.5mm/6黄褐色	底径 (4.0)	0.5	-	底部1/2	内面雲滅著しい 外側マクタリ、ナダ、頭 丸と 外側底部マクタリ 外側底付近
60		壁穴建物 1	郊付近	非生土器	不明	粗 2mm以下の砂粒多く含む	灰	内面:1 外面:1 10mm/4にぶい黄褐色 外面:2.5mm/6等々黄褐色	-	0.5	-	1/3	円曲わざかにハケヨ低窓 外側雲滅著しい
61		壁穴建物 1	頂付近	非生土器	器	やや粗 3mm以上の大砂粒多く含む 3mm以下の砂粒多く含む	やや灰 灰	内面:10mm/6焼魚 外面: 10mm/4にぶい黄褐色	底径 (3.7)	0.6	-	1/4	内面ハケヨ低窓あり 内面底部に擦痕凹凸 出わざかにハケヨ低窓あり
62		壁穴建物 2	-	非生土器	器	粗 3mm以下の砂粒少々含む	やや灰	内面:7.5mm/6焼魚 外面:2 10mm/3にぶい黄褐色	底径 (7.0)	0.7	-	底部1/6	内面雲滅著しい 外側低窓駆心から 外側底付近ケツジナダ
63		壁穴建物 2	床面直上	非生土器	器	水蒸し型 土器 把手少	灰	内面:7.5mm/6焼魚 外面:2.5mm/6等々黄褐色 裏面:10mm/3にぶい黄褐色	-	1.2	-	1/2	外ナダ強調
64		壁穴建物 2	-	非生土器	器	やや粗 3mm以上の石含む 3mm以下の砂粒多く含む	良好	内面:6mm/4灰褐色 外面:10mm/4にぶい黄褐色 裏面:10mm/3にぶい黄褐色	-	1.5	-	底部1/2	内面雲に磨滅著しい 内面底部に擦痕 手縫ね 全体的にビ熱痕跡あり
65		壁穴建物 2	-	非生土器	器	粗 3mm以上の砂粒多く含む 1mm以下の砂粒多く含む	灰	内面:2.5mm/4黄褐色 外面: 2.5mm/4にぶい黄褐色 裏面: 2.5mm/5等々黄褐色	底径 (5.0)	0.5	-	底部1/6	内外雲に磨滅著しい 内面底付近に擦痕凹凸 出わざかにミガキ痕跡
66		壁穴建物 2	-	非生土器	器	粗 2~3mmの大砂多く含む 5mmの大砂粒あり	やや灰 灰	内面:2.5mm/2灰褐色 外面: 10mm/3にぶい黄褐色 裏面:7.5mm/2黒色	底径 (6.4)	0.4	-	底部1/3	内面雲に磨滅著しい 内面底付近に擦痕凹凸 出わざかにミガキ痕跡
67		壁穴建物 1	壁土～ 直上	石器	刮片	-	-	-	2.5	0.7	2.0	-	サスカイト
68		壁穴建物 1	壁土～ 直上	石器	刮片	-	-	-	2.7	0.5	1.9	-	サスカイト
69		壁穴建物 1	壁土～ 直上	石器	刮片	-	-	-	3.0	1.0	2.0	-	サスカイト
70		壁穴建物 1	壁土～ 直上	石器	刮片	-	-	-	2.4	0.4	2.0	-	サスカイト
71		壁穴建物 2	床面直上	石器	刮片	-	-	-	2.9	0.4	2.1	-	サスカイト
72		壁穴建物 2	壁土～ 直上	石器	刮片	-	-	-	3.0	1.0	3.0	-	サスカイト
73		壁穴建物 1	-	石器 未調品	器	-	-	-	2.8	0.7	1.5	-	サスカイト
74		壁穴建物 2	壁土～ 直上	石器	刮片	-	-	-	2.6	0.4	2.1	-	サスカイト
75		壁穴建物 1 竪り灰 駆心南東	壁土～ 直上	石器	石斧	-	-	-	4.4	2.3	7.5	-	鉄加熱
76		壁穴建物 1 駆心南東	壁土～ 直上	石器	砾石	-	-	(灰) 4.7 (灰) 3.2	4.4	16.7	-	貝殻	
77		壁穴建物 1 駆心南東	壁土～ 直上	石器	砾石	-	-	-	5.1	4.7	18.0	-	波紋岩

第10表 遺物観察表5

次 数 No.	出土地点	出土層序	材種	種類	胎土	焼成	色調	口径 /横幅 (cm)	器厚 (cm)	縦高 /横幅 (cm)	残存率	備考
78	本部南東部	表探	陶製品	灰	-	N3/褐色	口径 (11.1) 底径 4.1	0.1	2.2	13.1#逆差	多量の墨 表文内に「長光上器」の 文字	
79	本部南東部	表探	瓦	瓦	1mm以下の砂粒含む	堅致	赤面: N4/灰色 肉面: 2.5/1黄灰色	15.6	2.4	34.2	広楕円形の一部を 欠く	凸面側方向のナデ 凹面側縫合部分に内凹き 有り砂粒、表面凹
80	本部南東部	表探	瓦	平瓦	やや粗 1~3mmの大約の色調多く含 む	堅致	赤面: N9/2#オーリーブ色 肉面: 3/1/1灰色 器内: 7.5/6/1灰色	26.0	2.4	-	狭楕円形を 欠く	凸面ともに僅・細ナデ 凸面にハラレ砂
81	第3調査区 付近	表探	A	平瓦	1~4mmの大約の砂粒含む 1~3mmの砂粒(表石、雲母 など)多く含む	堅致	面面: 2.5#4/2#緑灰褐色 肉面: 10/10/2#灰褐色 器内: 10/10/2#灰褐色	-	2.1	-	体部の 一部	凸面ともに摩耗著しく削 耗の跡有り 表面にハラレ砂
82	第3調査区	壁部下層	土紡器	泡格	やや粗 1~4mmの大約の砂粒(黒雲 母など)多く含む	堅致	内・外面: 肉面: 10/9/5/3#灰褐色	-	1.2	-	口縁部の 一部	氯化著しく調整不良跡
83	第3調査区	壁部下層	瓦	平瓦	やや粗 3mm以下の砂粒、砂多く含む	堅致	面面: 1#3/1#暗緑灰色 肉面: 3/1/1#暗青色 器内: 7.5/6/1#灰色	-	1.9	-	広楕円 凸面ともにナデ	
84	第1調査区 付近	表探	瓦	瓦瓦	やや粗 2mm以下の砂粒、堅緑かな黒雲 母含む	堅致	面面: 3/3#灰褐色 肉面: 3/1/1#黄褐色 器内: 3/6/6#灰色	-	2.6	-	体部の 一部	凸面全面に布目層、低い ナデ痕 周縁部ナデ 周縁部に横に三段、斜方 角に見られる
85	第1調査区 西側	-	瓦	平瓦	1mm以下の砂粒(白)、黒雲母 など)多く含む	堅致	面面: 3#灰褐色 肉面: 10/8/1#灰白色	-	2.2	-	広楕部 周縁部ナデ	
86	第1調査区	表土～ 1層	瓦	屋根瓦	やや粗 1mm以下の砂粒含む ところどころに1mmの大約の砂 粒(白)が含む	堅致	面面: 2.5/6/2#灰褐色 肉面: 2/5/2#灰褐色 器内: 2/5/2#灰褐色	-	2.5	-	便面～ 体部の 一部	凸面側ナデ 周縁部ケズリ 周縁部高いナデ痕
87	第1調査区	柱脚中	瓦	平瓦	1~6mmの石(白雲母)、4mm以 下の砂(白雲母、白英)多く含 む	堅致	面面: 2.5/6/2#灰褐色 肉面: 2.5/6/2#灰褐色	-	2.2	-	体部の 一部	凸面に施すタタキ
88	第1調査区	-	瓦	瓦瓦	やや粗 2mmの大約の砂 3mmの大約の砂	堅致	外面: 3/6/2#オーリーブ色 肉面: 2.5/6/1#灰褐色	-	2.5	-	体部の 一部	ケズリ、ナデあり 部位不明
89	第1調査区	-	瓦	平瓦	やや粗 1~5mm白色系(表石)が多い 1~2mmの黒雲母など多く含む	堅致	面面: 6/2/1#暗シラーアイ 肉面: 6/2/1#暗シラーアイ 器内: 6/2/1#暗シラーアイ	-	2.1	-	体部の 一部	凸面ともにナデ 周縁部に横仔層
90	第1調査区	-	瓦	屋根瓦	やや粗 3~5mmの大約 1mmの大約含む	堅致	面面: 7.5/7/1#灰褐色 肉面: 7.5/7/1#オーリーブ色 器内: 10/10/1#灰褐色	-	2.7	-	体部の 一部	凸面側がむち打痕 周縁部高いナデ痕
91	第4調査区	海側 第26層	海殻	瓶	1mm以下の雲母含む	堅致	内面: 外面: 7.5/7/1#灰褐色 器内: 7.5/7/1#灰褐色	蓋持 2.6	-	底面1/2 見込み、瓶外外面に給け		
92	第2調査区 37層	-	瓦	瓦瓦	1mm 1mm大までの硬含む(表石 など) 1mm大までの白っぽい砂含 む 1mm大までの黒雲母含む 合計がからゆ(黒雲母)が見 られる	堅致	面面: 3/3#灰褐色 肉面: 3/4/1#灰褐色 器内: 3/5/6/1#灰褐色 とともに10/10/6/暗褐色	-	2.4	-	丸瓦の 一部	凸面側ナデ、一部裏ナデあ り表面布目模
93	第2調査区 37層	地盤上 盛土	瓦	瓦瓦	やや粗 1mm以下の大約の色調含む 5mmの大約の砂	堅致	面面: 10/9/6/3#灰褐色 肉面: 3/3#灰褐色 器内: 7.5/7/1#灰褐色	-	-	-	凸面側ナデ 丸瓦の 一部	凸面側に低いナデ痕、荷 物方向に強い軽擦か
94	第2調査区 37層	-	瓦	瓦瓦	やや粗 1mm以下の大約の砂	堅致	面面: 5/6/1#灰褐色 肉面: 5/6/1#灰褐色 器内: 2.5/10/1#灰褐色	-	2.2	-	体部の 一部	周縁部高いナデ痕
95	第2調査区 37層	-	瓦	瓦瓦	やや粗 1.5mm以下の大約の砂(黒雲母、白 雲母)多く含む	堅致	面面: 5/6/1#灰褐色 肉面: 5/4/1#灰褐色 器内: 5/7/1#灰褐色	-	2.5	-	丸瓦の 一部	凸面側ナデ 周縁部全体に布目。 部分的に斜張

第11表 遺物観察表6

次 数	No.	出土地点	出土層番	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径 /横幅 (cm)	器厚 (cm)	縦高 /横幅 (cm)	残存率	備考
	96	第2調査区 37層	北壁断面 第1層 頂部層	瓦	平瓦	素 1mm以下の砂多く含む	堅焼	田中窯:186/1灰白色 藤井:158/2灰白色	-	2.3	-	全体の 一部	凸凹痕・横ナメ
	97	第2調査区 37層周辺	北壁断面 第4層 頂部層	御器	板	褐 黒色や赤色む	堅焼	内・外面:160TB/1灰白色 器内:12.6C9H/1	-	0.4	-	口縁部 小片	口縁部 小片に1条の黒斑
	98	第2調査区 37層周辺	北壁断面 第4層 頂部層	御器	皿	褐 黒色や赤色む	堅焼	内面:186/1灰白色 外側:167H/1灰白色 器内:12.6C9H/1	(17.0)	0.5	-	口縁部 1/16	内面に1条の黒斑
	99	第2調査区 37層周辺	北壁断面 第4層 頂部層	御器	板	褐 黒色や赤色む	堅焼	内面:161V/1灰白色 外側:158/2灰白色 器内:17B/2灰白色	-	0.3	-	口縁部 小片	内面に1条の 黒斑
	100	第2調査区 37層周辺	北壁断面 第7層 頂部層	御器	板	褐 黒色や赤色む	堅焼	内・外面: 7.5C9H/1灰白色 器内:159V/1灰白色	-	0.5	-	口縁部 小片	内外面に焼け、後施塗
	101	第2調査区 37層周辺	北壁断面 第9層 頂部層	御器	皿	赤 黑色や赤色む	堅焼	内・外面: 505H/1灰白色 器内:101V/1灰白色	-	0.7	-	底部の 赤色付け 蓋合部に1条の黒斑底裏 1部、蓋付付合 見込み部分は焼成初期未付け	
	102	第2調査区 37層周辺	北壁断面 第10層 頂部層	御器	皿	褐 黒色や赤色む	堅焼	内・外面: 7.5C9H/1灰白色 器内:157/1灰白色	-	1.5	底面 0.7	-	内外面及び背面内面に焼け 又は焼付け 蓋合部に1条の黒斑 蓋付付合
	103	第2調査区 10層	第21～ 25層	磁器	板	褐 黒色	堅焼	内・外面: 2.3W8H/1灰白色 器内:158/2灰白色	堅厚 (4.0)	0.4	-	底部小片	内外面に焼け付
	104	第2調査区 10層	第21～ 26層	土師器	皿	やや褐 黒色や赤色む	やや堅 軟焼	内・外面: 10J8H/3灰褐色 器内:2.3W6H/1灰白色	-	1.6	-	身部分の 一部	底部の 1部に焼成不適切
2 0 1 3	105	第2調査区 10層	第21～ 27層	土師器	脚付 瓶	やや赤 黒色	やや堅 軟焼	内・外面: 2.3W8H/2灰白色	堅厚 (11.4)	0.7	-	底部1/6 外側1/2	口縁部ナメ 瓶底底裏 瓶底
6	106	第2調査区 10層	第21～ 28層	瓦	軒丸瓦	やや赤 1mm以下の砂(雲母)含む	やや堅 軟焼	田中窯:186/1灰白色 角井:2.5V7/3灰黄色	-	0.9	-	瓦蓋部 小片	瓦蓋部 瓦底部
	107	第2調査区 10層	第21～ 29層	瓦	平瓦	やや赤 1mm以下の砂多く含む(雲 母含、不規則)	堅焼	田中窯:186/1灰白色 藤井:158/1	-	2.0	-	瓦蓋部の 一部	瓦蓋部ナメ 瓦底部ナメ 瓦底にハナレ物
	108	第2調査区 10層	第21～ 30層	瓦	屋瓦瓦	やや赤 1mm以下の砂(赤、長らな ど)多く含む 1mm以下で金物(瓦舟)多く 含む	堅焼	田中窯:100G/1 焼成済 器内:154/4/灰白色 器内:159H/1/灰白色	-	2.0	-	全体の 一部	瓦底部ナメ
	109	第2調査区 10層	第21～ 31層	瓦	平瓦	やや赤 1mm以下の砂(雲母)多く 含む	堅焼	田中窯:100G/1 焼成済 器内:154/4/灰白色 器内:159H/1/灰白色 器内:159V/1/灰白色 器内:157/1/灰白色	-	2.1	-	全体の 一部	凸凹ナメ
	110	第2調査区 10層	第21～ 32層	瓦	平瓦	やや赤 1mm以下の砂、表面に雲母多 く含む	堅焼	田中窯:157/1灰白色 器内:154/4/灰白色 器内:157/1/灰白色 器内:157/2/灰白色	-	1.9	-	全体の 一部	口縁部 凸凹部にハナレ物
	111	第2調査区 11層	-	瓦器	板	やや赤 1mm以下の砂(雲母)含 み	堅焼	内・外面:154/4/灰白色 器内:157/1/灰白色	-	0.6	-	口縁部 内に1条の黒斑、ナメ のみ外側ナメ	
	112	第2調査区 11層	-	肉鉢	不規	赤 0.5cm以上の赤色や褐色含む 1mm以下の白色を含む	堅焼	内・外面:55%灰白色 外面:7.5S03/1灰白色 器内:2.3W6H/1灰白色	堅厚 (7.4)	0.6	-	武器1/10 外側に黒斑	
	113	第2調査区 12層	-	瓦	軒丸瓦	やや赤 4mm以上の赤(花崗岩) 2mm以下の砂(赤・黄他)多 く含む	堅焼	田中窯:186/1灰白色 器内:157/1/灰白色 器内:2.3W6H/1	-	2.0	-	瓦底面 小片	瓦底面に焼成不適 合(5cm)
	114	第2調査区 13層	地山直上	瓦	軒平瓦	やや赤 0.5cm以下の砂(赤・黄他)含 む 黒色な雲母含む	堅焼	田中窯:186/1灰白色 器内:157/1/灰白色 器内:2.3W6H/1	-	1.7	-	瓦底面 一部	瓦底面 の焼成不適切
	115	第2調査区 13層	3層	瓦	平瓦	やや赤 0.5cm以下の砂(赤・黄他)含 む 黒色な雲母含む	堅焼	田中窯:157/1灰白色 器内:159/1/灰白色 器内:2.3W7/3灰黄色	-	1.9	-	全体の 一部	燒失著しく形状不明瞭

第12表 遺物観察表7

次 数 No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口部 /構造 (cm)	器厚 (cm)	脚窓 /脚板 (cm)	残存率	備考
116	第6調査区 1号	上層	瓦	平瓦	やや暗 1~3mmの白色透明白含む 3mm以下の黒色透含む	やや 堅致	凹面: N6/灰色 凸面: N4/灰色~ N5/黑色 2.367/1 裏面: T.917/1灰白色 器内: T.917/1灰白色	-	2.0	-	底盤の 一部	周八面ナゲ
117	第7調査区 1号	中~下層	粘土土器	土たは 鉢	赤	やや暗 2mm以下の中粒(黒透、黒 石英など)多く含む	やや 軟	内・外面: T.7.910/6褐色	幅3.1	-	-	手捻れ成型 器のままであるまたは棒の底部
118	第1調査区 1号		瓦	縦板	やや暗 2mm以下の中粒少含む 4mm以上の硬含む	やや 軟	P: 内・外面: 2.177/1灰白色 器内: T.178/1灰白色	-	0.9	-	口縁部 化粧面D層 小片 15cm~15cm	外表面ナゲ 化粧面D層 小片 15cm~15cm
119	第7調査区 1号	上層	磁器	碗	無	無	内面: 1019/1灰白色 外面: 1019/1灰白色 器内: 2.166/1灰白色 器内: 2.167/1灰白色 1019/1~1019/1灰白色	(16.0)	0.3	-	口縁部 に縫合内面に施釉 内面に施釉あり	口縁部 に縫合内面に施釉 内面に施釉あり
120	第7調査区 1号	上層	磁器	不明 (焼け)	無	無	内面: 1019/1灰白色 外面: 1019/1灰白色 器内: 2.167/1灰白色 器内: 2.167/1灰白色 1019/1~1019/1灰白色	(11.2)	0.3	-	口縁部 1/20 0.5mm厚の施釉	口縁部 1/20 0.5mm厚の施釉
121	第6調査区 1号	下層	瓦器	鉢か やや暗	無	無	内面: T.17.916/1灰白色 外面: T.17.917/1灰白色 器内: 1019/1灰白色	-	0.7	-	底盤の 一部	手捻りして調整不均一
122	第7調査区 1号	中~下層	瓦器	縦板	やや粗 2mm以下の中粒(黒透、石 英など)多く含む	やや 軟	内・外面: 2.177/1灰白色 器内: T.177/1灰白色	-	口縁部 1.0	-	口縁部 無施釉して調整不均一 内面に薄く保有者	口縁部 無施釉して調整不均一 内面に薄く保有者
123	第7調査区 1号	中~下層	瓦器	鉢か やや暗	無	無	内・外面: T.174/4 7.177/4L灰白色 7.177/3L灰白色	-	1.1	-	体調~ 底盤の 外表面ナゲ 小片	体調~ 底盤の 外表面ナゲ 小片
124	第1調査区 2土坑	-	瓦質土器	不明	やや暗 少しある(雲母等)	無	内面: 1019/6灰白色 外面: 2.176/1灰白色 器内: 1019/7灰白色 1019/7/3L灰白色	-	-	-	小片	表面に薄く保有者
125	第1調査区 2土坑	-	瓦	平瓦	やや暗 1~3mmの融合含む(雲母が多 く見られる)	やや 軟	凹面: 2.176/2灰白色 2.176/2L灰白色 器内: 1019/7灰白色	-	2.6	-	側面 底盤の 一部	側面とともに施化して調整 不均一
126	第1調査区 2土坑	-	瓦	平瓦	やや暗 1~4mmの大粒(花崗岩等)、 1cm以上の石含む 2mm以下の砂含多く含む	無	凹面: T.174/4灰白色 器内: T.178/1灰白色	-	2.6	-	側面~ 底盤の 一部	側面と底盤に明確な面取り
127	第1調査区 第7~ 8~10層	磁器	碗	無	無 黒色透含む	無	内・外面: 2.177/2オリーブ色 器内: T.177/2灰白色	-	0.4	-	青緑 白縁部 内面に凹面状のナゲ 全体に細かい入がみられ る 0.5mm以下の施釉	青緑 白縁部 内面に凹面状のナゲ 全体に細かい入がみられ る 0.5mm以下の施釉
128	第1調査区 第7~ 8~10層	磁器	碗	無	無 黒色透含む	無	内・外面: 1019/1灰白色 器内: T.178/1灰白色	-	0.2	-	口縁部 小片	白緑 内面に凹面状のナゲ 0.5mm以下の施釉
129	第1調査区 第7~ 8~10層	陶器	碗	無	無 黒色透含む	無	内面: 7.199/7/3L灰白色 外面: T.178/1灰白色 器内: T.178/6灰白色	底盤 (4.0)	-	-	底盤 内面に凹面状のナゲ 1/4~0.5mm以下の施釉	底盤 内面に凹面状のナゲ 1/4~0.5mm以下の施釉
130	第1調査区 南東隅	-	陶器	碗	無	無	内面: T.178/1灰白色 外面: 1019/7灰白色 器内: T.178/1灰白色	底盤 4.8	0.5	-	底盤 完全 底盤のくびれ部分に施付け	内面に凹面状のナゲ 完全 底盤のくびれ部分に施付け
131	第1調査区	7層	陶器	碗	無	無	内面: T.178/1灰白色 基内: 2.168/2灰白色	-	0.3	-	内面に凹面状のナゲ 小片 全体に細かい入がみられ る	内面に凹面状のナゲ 小片 全体に細かい入がみられ る
132	第2調査区	第78層	土師器	壺	やや暗 1mm以下の雲母多く含む	良好	内面: T.178/1灰白色 外面: 1019/7灰白色 器内: T.178/7灰白色 1019/7/4L灰白色	-	0.8	-	口縁部~ 底盤の 一部	内面に凹面状のナゲ 底盤より下方に保有者
133	第2調査区 東東隅	表土	瓦	平瓦	無 1~5mmの大粒の白色融合含 1mm以下の雲母多く含む	無	凹面: T.174/4灰白色 1.367/1灰白色 6.937/4L灰白色 器内: 1019/6/1灰白色	-	1.7	-	側面~ 底盤の 一部	凸凹模様ナゲ 正面にパリ跡

第13表 遺物観察表8

次 数	No.	出土地点	出土層序	材種	器種	出土	焼成	色調	口径 /瓶幅 (cm)	器厚 (cm)	器高 /瓶幅 (cm)	残存率	備考
134		第2調査区	第12層	瓦	通瓦、瓦 (断面灰 化)	やや密 め細かい 砂を含む	堅焼	内面: 8Y6/1灰 色 外側: 2, 8Y7/1灰白色	-	2.1	-	小片	凸凹面ナゲ
135		第1調査区	第2層	瓦	平瓦	半生燒 1~2mmの砂粒 0.5mm以下の砂粒少々	堅焼	内面: 7, 0Y7/1灰白色 外側: 烧肉	-	2.0	-	広輪郭の一 部	凸凹面ナゲ
136		第2調査区	第2層	瓦	平瓦	半生燒 1~3mm大の白色斑多く含む 1~4mm大の黒色斑合む	堅焼	内面: 2, BY7/1灰白色 外側: 2, 8Y7/1灰白色 砂粒: 1, 8Y6/1灰白色 焼肉: 2, 8Y7/1灰白色	-	2.2	-	体部の一部	焼まさうあり 内面: 2, 8Y7/1灰白色 外側: 2, 8Y7/1灰白色
137	137	第2調査区	第31層	生土、土	埴 土た(2) 土	1~4mm白燒(灰質化)、 1mm以下灰雲母含む	やや 不良	内面: 7, 0Y6/1灰白色 外側: 2, 8Y7/1灰白色 砂粒: 2, 8Y7/1灰白色 焼肉: 10Y7/3灰褐色	直径 (cm)	-	-	直部 小片	内面に複数正規、微かに灰 色斑斑点しく網目不規則
138		第1 調査区	第25層	土師器	皿	半生燒 1~5mm大の赤褐色斑合む 1~3mm大の白い斑合む 1mm大の黒色斑合む	良好	内面: 7, 0Y6/1灰白色 外側: 2, 8Y7/1灰白色 砂粒: 2, 8Y7/1灰白色 焼肉: 7, 0Y7/2灰褐色	-	0.3	1.5	体部小片	へき皿か
139		第1 調査区 1段上	-	土師器	不明	半生燒	やや 軟	内面・裏・焼肉: 10Y6/3灰褐色	-	0.8	-	口縁部 小片	丸井著しく測定不規則
140		第1 調査区	-	瓦	瓦	1mm 1~4mmの白色斑(灰質化) 2mm大の黒色斑(灰質化)含む 1mm以下灰雲母多く含む	堅焼	内面: 8Y6/2灰オリーブ色 8Y6/6明るい黄 外側: 2, 8Y7/1灰白色 砂粒: 2, 8Y7/1灰白色 焼肉: BY5/6明るい黄褐色 BY5/6明るい黄褐色	-	2.1	-	側部～ 底部	凸凹面ナゲ 单孔器
141		第1 調査区	-	鉢製品	-	-	-	-	2.6	0.1~ 1.4	-	刀身の 一部	残存員: 8.7cm
142		第1 調査区 北サブ トレシテ	-	土師器	皿	やや粗	やや 軟	内面・裏・焼肉: 7, 0Y6/3灰褐色	-	0.8	-	小片	内外面ナゲ
143		第1 調査区 北サブ トレシテ	-	瓦	瓦	半生 3mm以下灰雲母を少量含む	堅焼	内面: 2, BY7/2灰褐色 外側: 2, 8Y7/1灰白色 砂粒: 2, 8Y7/1灰白色	-	2.0	-	側面～ 底部	側面全面に半生層、一部ナ ゲ化し 内面底方弧ナゲ化はケズ 一部にハラレ
144	144	第1 調査区 中サブ トレシテ	-	土師器	皿	やや粗	やや 軟	内・外裏・裏肉: 7, 0Y6/3灰褐色	口 径 (7.6) 瓶 底 (2.7)	1.0	-	口縁部 1/7	内外面同様ナゲ 底部外壁ナゲ
145		第1 調査区 中サブ トレシテ	地山出土	土師器	壺焼	やや粗 0.5mm以下灰雲母多く含む	やや 粗	内・外裏: 8Y6/6明るい黄褐色 外側: 10Y6/4灰褐色	口 径 (17.2)	0.8 0.5	-	口縁部 1/11	口縁部 外壁粗粒化、底 部
146		第1 調査区 中サブ トレシテ	-	生土、土器	不明	半生 2~4mm大の赤褐色(灰質化) 2mm大の黒色斑(灰質化) 1mm以下灰雲母多く含む	やや 軟	内・外裏: 10Y6/4灰褐色	口 径 (17.2)	0.8	-	底部小片	内面ナゲ
147		第1 調査区 中サブ トレシテ	上地	瓦質土器	盤型	半生燒 2~3mm大の砂粒 3mm大の砂粒あり	良好	内・外裏: Na/8Y6/灰色 内側: 10Y6/4灰褐色	口 径 (45.0) 底径 (38.0)	1.0 0.7	-	口縁部 1/4	新規欠損 内面底端ナゲ 内面底凹型底板 内面底ともに風化・堆積 著
148		第1 調査区 中サブ トレシテ	-	瓦	軒瓦	やや粗 1~3mm大の砂粒多く含む 3mm大の砂粒あり	やや 軟	内面: 2, BY7/2灰褐色 外側: 10Y6/4灰褐色	外 縁 上 面 (1.2)	-	-	-	壁文 口縁に凹溝あり 1/3部丸付 風化著しい
149		第1 調査区 中サブ トレシテ	-	瓦	平瓦	半生 4mmの縫 1~3mm大の砂粒 2mm以下灰雲母(灰 面)を含む	堅焼	内面: 2, BY7/2灰褐色 外側: 2, BY7/2灰褐色	-	2.0	-	底端部	側面に丸い削り痕
150		第1 調査区 中サブ トレシテ	-	瓦	平瓦	半生 3mm以下灰雲母(灰 面)を含む	堅焼	内面: 10Y6/3灰褐色 外側: 10Y6/3灰褐色	-	2.1	-	体部の 一部	側面底 部 凸凹面ナゲ 凸凹面明瞭なビスピ底(堅 張部)

第14表 遺物観察表9

次数	No.	出土地点	山土層序	材種	器種	鉱土	他成	色調	口徑/底径(cm)	器厚(cm)	底高/底径(cm)	残存率	備考
151	第1調査区 中サブ トレンチ	-	瓦	埋板り瓦 瓦	やや密 1~4cm大的黒色粉粒含む 1~3mm大的白色粉粒含む 粉粒多く含む	鉱土	2. 35/4.25灰黄色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 6	-	底面～ 底部の一部 底面に赤褐色	-	
152	第1調査区 南サブ トレンチ	-	瓦	軒丸瓦	やや密 2~3mm大的砂粒(花崗岩、 石英など)多く含む	鉱土	2. 05/6.31灰白色 2. 05/6.1青灰色	内径 16.0	-	瓦底面の 一部	瓦底面に赤褐色	瓦底面に赤褐色	
153	第1調査区 南サブ トレンチ	-	瓦	瓦	やや密 粉粒細か含む	鉱土	2. 05/6.25灰黄色 2. 05/6.21青灰色	-	3. 0	-	瓦縫隙の 界面付近 一部	瓦縫隙付近	
154	第1調査区 南サブ トレンチ 焼却	-	瓦	平瓦	やや密 2~3mm大的場合む 1mm以下の粉粒(石英、黑 雲母等)多く含む	鉱土	2. 05/6.25灰黄色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 0	-	小片	剥離あり	
155	第1調査区 南サブ トレンチ	-	瓦	平瓦	やや密 1~2mm大的粉多く含む 1mm大的粉含む 粉粒細か含む	鉱土	2. 05/6.31灰黄色 2. 05/6.21灰黄色	-	2. 1	-	鉄塗装の 一部	鉄塗装付 内側摩耗し 調整不明瞭	
156	第1調査区 南サブ トレンチ	-	瓦	平瓦	やや密 2mm以下砂粒(黒色)含む 6mm大的含む	鉱土	2. 05/6.25灰黄色 2. 05/6.21灰黄色 2. 05/6.21灰黄色	-	2. 2	-	瓦縫隙の 一部	瓦縫隙に 赤褐色	
157	第1調査区 南サブ トレンチ	-	瓦	瓦	1~3cm大的白色粉粒含む 1mm以下の黑色粉粒含む	鉱土	2. 05/6.31灰白色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 1	-	底面の 一部	底面剥離、ナデ 内側摩耗、赤褐色 底面無保護	
158	第1調査区 南サブ トレンチ	-	瓦	平瓦	やや密 2mm以下白色・黑色(黒 色)含む	鉱土	2. 05/6.25オーライグ灰 色 2. 05/6.21灰色 2. 05/6.21黑色	-	2. 5	-	広縫隙の 一部	広縫隙ナデ 内側摩耗、調整不明瞭 部分あり	
159	調査区周辺 本田 耕作土中	-	瓦	瓦 (堆积)	やや密 2~4mm大的塊(表面近く多 く含む)	鉱土	2. 05/6.25灰白色	-	-	-	塊状の 一部	裏面には赤褐色 工具でのケツリ、ナデ	
160	調査区周辺 本田 耕作土中	-	瓦	瓦	やや密 5~7mm大的塊多く含む 1mm以下の粉粒多く含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 9	-	瓦の 一部	竹管状工具による剥離あり	
161	調査区南壁	-	瓦	平瓦	やや密 3mm以下の粉粒(石英、黒雲 母など)含む 1mmの粉粒多く含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 5	30.2	底面の 一部	底面剥離ナデ 内側摩耗ナデ、工具、ハナレ ガ、ナダ	
162	調査区南壁	-	瓦	平瓦	やや密 5mm大的塊(石英・長石)含 む 2~3mm大的粉粒(長石)多 く含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21オーライグ灰 色	-	1. 9	-	底面の 一部	底面全面にハナレ粉多い (黒雲母など) 内側摩耗、ナデ 剥離ナダ	
163	調査区南壁	-	瓦	埋板り瓦	やや密 4mm大的 1mm以下の粉粒(黒石・黄 石)多く含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 1	-	底面の 一部	底面剥離ナデ 内側摩耗ハナレ粉多い (黒雲母など) 内側摩耗	
164	調査区南壁	-	瓦	埋板り瓦	やや密 1~3mm大的砂粒・粉多く 含む(長石・長方) 5mm大的粉粒(石英)含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色 2. 05/6.21灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 5	29.5	底面の 一部	底面無 内側摩耗ナダ	
165	調査区周辺	-	耐候性 鉄製品	錆	-	鉱土	-	外径 2. 5	0. 1	-	完形	未確認	
166	第1調査区 井戸13	-	瓦	瓦	やや密 2. 5mm以下砂粒を少量含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色 2. 05/6.21灰白色	-	2. 1	-	剥離～ 底面の 一部	剥離ナダ、全面に底面 ナダ	
167	第1調査区 井戸10	-	瓦	平瓦	やや密 2mm以下砂粒を含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色 2. 05/6.21灰白色	30.2	3. 4	29.5	完形	全面工具による文様を千鳥 に刷す	
168	第3調査区 露土 掘削中	-	瓦類	瓦	やや密 0. 5mm以下の黑色粉粒含む	鉱土	2. 05/6.25灰白色	[13. 8]	0. 6	-	口縫部 1/17	口縫部内面に沈 積新積ナダ 剥離	

第15表 遺物観察表10

次 数 No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径 (横幅 (cm))	胎厚 (cm)	器高 (横幅 (cm))	残存率	備考
2 0 1 1 1	第4調査区	-	陶器	短 筒 器 精緻	型板 板	内面: 内面: 外面: 内面: 内面:	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	6.4	(0.3)	体部小片	真入あり 内面に嵌物状の文様あり	
	第6調査区 ピット23	-	鉄製品	刀子か く								- 鋸刃長8.7cm
	第4調査区 漆	-	瓦	丸瓦			やや赤い 3mm以下の砂粒多く含む					- 亜鉛タグリ、前方角ナデ 前面光り無機、赤り強
172	第1調査区 度(南側)	4層	瓦器	または 瓦	内 外 1mm以下の砂粒(花崗岩?)少 量含む	やや 赤	内・外面:褐色 内面:10%灰白色	-	0.5	-	裏面: 内面: 1/10灰 色	裏面: 内面: 1/10灰 色
173	第1調査区 度(北側)	5層	瓦器	板	やや赤 1mm以下の砂粒(黒武昌?)含 む	内 外 板	内・外面: 内面: 外面: 内面: 内面:	-	0.4	-	口縁部 内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	口縁部内面に2条の沈痕 内面: 内面: 内面: 内面: 内面:
174	第1調査区 度(北側)	6層	瓦器	板	やや赤 1mm以下の砂粒(黒武昌?)含 む	内 外 板	内・外面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	0.3	-	口縁部 内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	口縁部~ 内面に黒斑にマガキ無 体部小片
175	第1調査区 度(北側)	3層	瓦器	板	やや赤 1mm以下の砂粒(黒武昌?)多 く含む	内 外 板	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	(9.4)	3.1	-	口縁部~ 内面横 体部: 内面: 内面: 内面:	口縁部~ 内面横 体部: 内面: 内面: 内面:
2 0 0 5 1	第1調査区 度(北側)	3層	瓦器	板	やや赤 1mm以下の砂粒(黒武昌?)多 く含む	内 外 板	内・外面: 内面: 内面: 内面: 内面:	(10.0)	0.3	-	口縁部~ 内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	口縁部~ 内面: 内面: 内面: 内面: 内面:
	第1調査区 度(北側)	-	土器器	陶器	やや赤 3mm以下の砂粒(石英・高雲 石?)少量含む	やや 赤	内・外面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	0.4	-	口縁部 内面: 外面: 内面: 内面: 内面:	口縁部: 内面: 外面: 内面: 内面:
176	第1調査区 度(北側)	3層	瓦器	板	やや赤 1mm以下の砂粒(黒武昌?)多 く含む	内 外 板	内・外面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	-	-	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:
177	第1調査区 度(北側)	-	土器器	陶器	やや赤 3mm以下の砂粒(石英・高雲 石?)少量含む	やや 赤	内・外面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	0.4	-	口縁部 内面: 外面: 内面: 内面: 内面:	口縁部: 内面: 外面: 内面: 内面:
178	第1調査区 度(北側)	3層	瓦器	板	やや赤 3mm以下の砂粒(石英・高雲 石?)少量含む	内 外 板	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	直径 (9.6)	-	-	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:
179	第1調査区 度(北側)	6層	陶器	皿	精緻	内 外 板	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	通徑 (6.0)	0.4	-	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:
180	第1調査区 度(北側)	6層	瓦	平瓦	やや赤 3mm以下の砂粒(花崗岩) 3mm以下の複合土(尾根岩・高雲 石?)少含む	内 外 板	凹凸面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	2.6	-	体部の 内面横ナデ	内面横ナデ
2 0 1 3 1	第1調査区	北壁 第3層	瓦	平瓦	やや赤い 3mm以上の砂粒含む	やや 赤	凹凸面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	2.2	-	体部の 内面	凸面横方向のナデ、ハナレ
	第4調査区	底部堆土	瓦	茅葺瓦	1mm以下の砂粒含む	内 外 板	凹面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	-	-	体部の 内面	凹面: 内面: 内面: 内面: 内面:
2 0 1 2 1	第3調査区	底盤 第6層 下部	瓦	平瓦	赤 2~4mm白色系(長石ひき含 む 1mm以下の白土・高色彩含 む)含む	内 外 板	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	2.0	-	体部の 内面	凹面: 内面: 内面: 内面: 内面:
	第3調査区	底盤 第6層 下部	瓦	平瓦	赤 2~4mm白色系(長石ひき含 む 1mm以下の白土・高色彩含 む)含む	内 外 板	内面: 内面: 内面: 内面: 内面:	-	-	-	体部の 内面	凹面: 内面: 内面: 内面: 内面:

第16表 遺物観察表11

次 数 No.	出土地点	出土番号	材種	器種	胎土	焼成	色調	口幅 (横幅 (cm))	器厚 (cm)	器高 (横幅 (cm))	残存率	備考
184	第1調査区 ピット5	-	土師器	皿	やや粗 2mm以下の中粒含む	やや 軟	内・外・唇:陶肉: 7.389/6/褐色	(7.1)	0.4	(1.3~ 1.5)	1/3	内外塗ナダ
185	第1調査区 ピット4	-	土師器	皿	やや粗 1mm以下の白色・赤色砂粒多 く含む 黒鉛粉多く含む	内・外 良好	内・外・唇:陶肉: 7.389/6/褐色 外:7.389/6/褐色	(10.4)	0.3	1.3	口縁部 1/16	内外塗ナダ 外裏押さえ
186	第1調査区 ピット3	-	瓦器	碗	素 1mm以下の砂粒を少量含む	堅	内面:7.389/1/灰白色 外面:8.7/灰白色	(10.9)	0.3	4.1	1/2	内裏部上半強い(或ナダ) 以下は押さえ 内裏:7.開口部~7mmの器腹と 底なし 焼成色Ⅲ~IV窯か
187	第1調査区 ピット4	-	瓦	平瓦	やや粗い 1mm以下の砂粒多く含む 3~4mm白色 2~3mmの黑色粉含む 黒鉛粉多く含む	堅	内面:2.45%灰白色~ 3/4灰褐色 底面:2.45%灰白色~ 3/4灰褐色 2.383/8/褐色 器腹:3.1/灰白色	-	2.2	-	-	内裏ナダ 底面二具痕、瓦切り痕 一筋の本筋とともに広範囲に 焼付
188	第2調査区 盛土下下面	下部~ 盛土下部	瓦質土器	粗体	素 1mm以下の砂粒少含む	堅	内・外・唇:3/2/褐色 器腹:1.07/1/白色	(14.0)	1.0	-	口縁部 内外側縫着し隔壁不明瞭 小片付	内裏部 外裏部に縫合縫ナダ
189	第2調査区 盛土下下面	下部~ 盛土下部	瓦器	不另	やや粗 1mm以下の砂粒多く含む	堅	内・外:素 器腹:8.7/灰白色	(20.0)	0.6	-	口縁部 内・外部に縫合縫ナダ 小片付 底面下平手ハケ	口縁部 内・外部に縫合縫ナダ 小片付 底面下平手ハケ
190	第2調査区 盛土下下面	中世	土師器	糸釜	やや粗 2mm以下の砂粒多く含む 4mm大の砂粒含む	良好	内・外・唇:器腹:12.086/4 1/2/灰白色	-	0.7	-	器部分 内裏部方向に縫合ハケ 1/外裏部	内裏部方向に縫合ハケ 1/外裏部
191	第2調査区 盛土下下面	中世	瓦器	粗体	素 1mm以下の砂粒含む	堅	内面:素/3.1/灰白色 外面:5.5/灰白色	-	0.3	-	口縁部 内面のミズを墨跡化 1/18 複雑型IV-2點付	口縁部 内面のミズを墨跡化 1/18 複雑型IV-2點付
192	第2調査区 盛土下下面	43層	瓦器	粗体	素 2mm大の白色砂粒 1mm大の黄色砂粒含む 黒鉛粉多く含む	堅	内面: 0.087/3/2/灰白色 0.085/1/灰白色 外面: 0.087/2/2/灰白色 器腹: 0.087/2/1/灰白色 器底: 0.087/3/1/灰白色	底板 (10.8)	0.7	-	底面1/10 内外塗ナダ 摩耗部	内面に擦り目 内外塗ナダ 摩耗部
193	第2調査区 土坑	中層	瓦器	粗	素	堅	内・外・唇:3/2/灰白色 器腹:1.5/2/灰白色	-	0.3	-	-	内裏部ナダ後、残存部分に 3mm強度でミガキ、口縫部 に1本の本筋 小片付ナダ 縫合型
194	第2調査区 土坑	中層	瓦器	粗	素	堅	内・外・唇:3/2/灰白色 器腹:1.5/2/灰白色	-	0.3	-	口縫部 内面ナダ 小片付	内面擦りナダ、縫合ミガキ 内面ナダ
195	第2調査区 土坑	下部~ 趾下部	瓦器	粗	1mm以下の砂粒少含む	堅	内・外:素 器腹:3.7/3/灰白色	-	0.3	-	口縫部 内・外・唇:3/2/灰白色 器腹:3.7/3/灰白色	内裏ナダ後折方角のハケ 立、細い吸えガタ 縫合型
196	第2調査区 土坑	中層	瓦器	粗	素	堅	内面:1.9/1/灰白色 器腹:1.5/1/灰白色 器底:1.5/1/灰白色	-	0.3	-	口縫部 内面擦りナダ 小片付	口縫部 内面擦りナダ 小片付
197	第2調査区 土坑	趾下部	瓦器	粗	1mm以下の砂粒少含む	堅	内・外・唇:3/2/灰白色 器腹:3.7/3/灰白色	(11.4)	0.3	(3.6)	-	内面擦ナダ後上方に底ハケ 立、細い吸えガタ 縫合型
198	第2調査区 土坑	下部~ 趾下部	瓦器	粗	素	堅	内・外:素/3/4/灰白色 器腹:3.7/3/灰白色	(10.4)	0.3	-	口縫部 内・外・唇:3/2/灰白色 器腹:3.7/3/灰白色	内面擦ナダ後接合部 1/4/縫合型IV-3點付
199	第2調査区 土坑	-	土師器	皿	1mm以下の砂粒少含む	良好	内・外・唇:器腹: 7.389/1/灰白色	-	0.4	1.3	小片 擦耗してく縫合不明瞭	内裏吹き
200	第2調査区 土坑	下層	土師器	皿	1mm以下の砂粒少含む	やや 軟	内・外・唇:器腹: 7.389/1/灰白色	-	0.3	1.1	小片 擦耗してく縫合不明瞭	内裏吹き
201	第2調査区 土坑	中層	土師器	皿	やや粗 1mm以下の砂粒(黒鉛など) 多く含む	やや 軟	内・外・唇:器腹: 7.389/1/灰白色	-	0.4	0.9	小片 吹き	内裏吹き
202	火器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
203	第2調査区 土坑	-	土師器	皿	素 1mm以下の砂粒を少量含む	良好	内・外・唇:器肉: 10.938/4/灰黃褐色	-	0.4	-	口縫部 のみ	内外塗ナダ
204	第2調査区 土坑	下層	土師器	皿	素	やや 軟	内・外・唇:器肉: 7.389/4/灰黃褐色	(5.6)	0.4	1.3	1/4	内外塗ナダ 内裏に弱い側面圧痕

第17表 遺物観察表12

次 数	No.	出土地點	出土層位	材種	器種	埴土	焼成	色調	口徑 /側幅 (cm)	器高 (cm)	器葉 /縦幅 (cm)	残存率	備考
	205	第2調査区 土坑		土師器	皿	1mm以下の砂粒少含む	やや 軟	内・外赤・黒褐色: 1050B/4赤黄褐色	(6.4)	0.4	1.2	1/5	内面焼ナダ 外底ナダ
	206	第3調査区 土坑	下部～ 最下部	土師器	皿	質地多く含む 1mm以上の砂粒少含む	やや 軟	内・外赤: 1090E/4赤黄褐色 外底:837/3赤褐色 縁肉:1050B/4赤	(7.2)	0.4	1.2	口部～ 底部 内面底部に押さえ 直線状に斜め	外外面部黒帯 内面底部に押さえ 直線状に斜め
	207	第2調査区 土坑	下部	土師器	皿	やや密 3mm以上の砂粒含む 1mm以下の砂粒少含む	良好	内・外赤・黒褐色: 7.038/4赤黄褐色	(7.4)	0.4	1.3	1/3	内面焼ナダ 外周部黒帯
	208	第2調査区 土坑	最下部	土師器	皿	1mm以下の砂粒少含む	良好	内・外赤・黒褐色: 7.038/4赤黄褐色	(9.0)	0.4	1.2	1/5	内面後壁ナダ 外周部黒帯
	209	第2調査区 土坑	下部～ 最下部	瓦器	鉢	やや粗い	堅焼	内・外赤・黒褐色 縁肉:877/1赤白	-	-	1.2	-	口縁部 小片
	210	第2調査区 土坑	下部～ 最下部	瓦器	小鉢	やや密 2mm以下の砂粒少含む	やや 軟	内・外赤: 1050B/3赤黄褐色	-	-	1.0	口縁部 小片	口縁部黒帯で調整小明暗 外底焼ナダ
	211	第2調査区 土坑	下部～ 最下部	瓦器	羽釜	やや粗 鉢底な砂粒を含む	やや 堅焼	内・外赤: 1090E/1赤色 縁肉:877/1赤色 内底:1013A/2黒褐色	-	-	0.7	-	口縁部 小片
	212	第2調査区 土坑	下部～ 最下部	瓦質土器	鉢	やや粗 3mm以下の砂粒(質地はか 多く含む)	堅焼	内・外赤: 1050B/1赤白 内底:1013A/1赤白 縁肉:1050B/1赤白	-	-	0.6	-	底部 小片
2 0	213	第2調査区 土坑	下部	土器	盤	1mm以下の白色砂粒含む 3mmの大粒の黄褐色砂粒あ る	堅焼	内・外赤: 1014E/4赤褐色 内底:877/3赤褐色	(6.3)	0.9	-	口縁部～ 全体	内外面焼ナダ 全体部の接触部は焼 け
1	214	第2調査区 土坑	相山の一 つ上の層	石晶石	罐	-	-	-	-	-	-	-	同上に繊維あり
2	215	第2調査区 土坑	下部～ 最下部	瓦	平瓦	3mmの大粒(岩石)含む 1mm以下の砂粒(質地など)多く 含む	堅焼	内面:1050B/1赤褐色 内底:1050B/2赤褐色 縁肉:1050B/3赤褐色	-	2.3	-	供奉部～ 底面	陶器斜方角ナダ 河岸付着 白泥化
3	216	第2調査区 土坑	最下部	瓦	平瓦	やや密 少含む 1mm以下砂粒(雲母など)多 く含む	堅焼	内面:877/2赤褐色 内底:1050B/1赤褐色 縁肉:1050B/3赤褐色	-	2.0	-	体部の 一部	頭頂部ナダ 内斜方角ナダ、深い凹 り底、工具痕
4	217	第2調査区 土坑	15層	瓦	丸瓦	やや密 鉢底な砂粒を含む	堅焼	内面:1050B/1赤褐色 内底:1050B/2赤褐色 縁肉:1050B/3赤褐色	-	2.2	-	体部の 一部	内面全面に溝 内面焼ナダ、布目模、切欠 孔
	218	第2調査区 土坑	下部	土師器	桶	1～4mmの白色砂(長石) 含む 2mm以下の白色砂粒多く含 む 1mm以下の黒色砂粒含む	堅焼	内面: 1050B/2オーリーブ色 内底:1050B/1赤褐色 縁肉:1050B/3赤褐色	-	1.8	-	桶面～ 全体	同上金属性に赤褐色 底面全面
	219	第3調査区 底土下部	-	瓦器	筒	密	堅焼	内・外赤: 1050B/1赤褐色 縁肉:877/1赤褐色	(12.0)	0.2	-	口縁部 小片	ナダ 堅焼型IV-3期
	220	第3調査区 底土下部	-	土師器	皿	やや密 2mm以下の砂粒多く含む	軟	内・外赤: 7.038/6赤褐色	-	0.5	-	底部小片	器蓋部、調整不規 則手ねかげ
	221	第3調査区 底土下部	-	瓦器	筒	密 1mm以下の砂粒少含む	堅焼	内・外赤: 1050B/1赤褐色 縁肉:1050B/1赤褐色	-	0.3	-	口縁部 小片	内面焼ナダ後1mm後 底に2mmの穴あり
1	222	C調査区	-	瓦	平瓦	やや密 3mmの大粒含む 2.5～4mmの大粒多く含む	堅焼	内面:2.035/2赤褐色 内底:2.035/2赤褐色 縁肉:877/1赤褐色	-	2.2	-	体部の 一部	同上より厚つ
9	223	C調査区	-	瓦	平瓦	やや密 3mm以下の砂粒 2～2.5mmの大粒含む	堅焼	内面:984/1赤褐色 内底:986/1赤褐色 縁肉:1050B/1赤褐色 内底:1050B/1赤褐色	-	2.2	-	体部の 一部	同上部付着、奥の方のナ ダ、ハナレ形 内斜方角の方のナダ コキAと呼ぶ
8	224	C調査区	-	瓦	平瓦	やや密 2mm以下の砂粒含む	堅焼	内面:1050B/1赤褐色 内底:1050B/1赤褐色 縁肉:1050B/1赤褐色	-	2.2	-	底部～ 底面	底面横方向のナダ 底面上にハナレ形
6													
1													

第18表 遺物観察表13

次 数 序 号	出土地点	山土層序	材種	器種	胎土	施成	色調	口径 /頭幅 (cm)	器厚 (cm)	器高 /底幅 (cm)	残存率	備考
225	C 調査区	-	瓦	平瓦	やや暗 2~3mmの砂含む	堅腹	頭面 2.0mm/2段黄色 底面:1.0mm/1段色 側面:1.0mm/1段色	-	1.8	-	広輪部~側面の一部 面接ナダ 凸面接ナダ	
226	C 調査区	-	瓦	平瓦	やや暗 1mm以下の繊 とろこごろにさ~4mmの 繊(石質)含む	堅腹	頭面 0.9mm/4段黄色 底面:0.9mm/4段色 側面:1.0mm/3段色 内面:0.7mm/4段色	-	2.1	-	広輪部~側面の一部 輪郭線	
227	C 調査区	-	瓦	平瓦	やや暗 0.2mm以下の無色繊(鐵骨 含む) 2.0mm以下との白色繊含む とろこごろにさ~4mmの 繊	堅腹	頭面 7.6mm/4段黒色 底面:7.6mm/4段色 側面:8.0mm/4段色 内面:7.6mm/4段色	-	2.5	-	広輪部 面接ナダ 凸面接ナダ	
228	C 調査区	-	瓦	平瓦	馬糞等含む 1~4mmの白色繊(長石) 多く含む	堅腹	頭面:0.9mm/輪白色 内面:0.9mm/1段色 底面:1.0mm/1段色	-	2.5	-	広輪部~ 体部の一部 面接ナダ 凸面接ナダ	
229	- 駅生時代 白石層	石器	石包丁	-	-	-	-	14.3	0.5	8.9	完形	堅腹骨
230	- 駅生時代 白石層	石器	石包丁 (木製品)	-	-	-	-	30.2	1.0	6.8	-	堅腹骨
231	第1調査区	-	陶器	盆	1~3mmの白色繊多く含 む	堅腹	内面: 3%~2%オーブル色 外面:1.0mm/2段黒色 底面:1.0mm/2段色	(47.6)	1.1	-	口縁部 小片	内面正反面接ナダ 外面に細 縫隙
232	第1調査区	-	磁器	皿	0.5mm以下の無色繊含む	堅腹	内面:0.5mm/輪白色 底面:2.6mm/1段色	-	0.2	-	口縁部 小片	輪付 内面正反面 面に接付け
233	第1調査区 底面	-	陶器	不伊	4mm以下の白色繊(長石) 含む 2mm以下で雲母多く含む	堅腹	外面:1.0mm/2段黒色 内面:1.0mm/2段色~ やや 不良 表面:1.0mm/2段黄褐色~ 1.0mm/2段黒色、黄褐色~ 1.0mm/2段黒色	(33.6)	0.9	-	底部1/6	内面ナダ 外接ナダ 輪接縫
234	第1調査区 底面	-	瓦	丸瓦	やや暗 2mm以下の砂粘(石質、雲 母、長石など)多く含む	堅腹	内面:0.5mm/灰褐色 底面:1.0mm/1段色	-	2.5	-	広輪部の 一部	内面ナダ 底面毎日板、内切り痕
235	第1調査区	裏切 11層下 ~12層	瓦	丸瓦	1mm以下の砂粘(雲母)含む	堅腹	内面:0.5mm/灰褐色 底面:1.0mm/1段色	-	1.9	-	腰部の 一部	内面泥板のナダ、工具痕 底面毎日板
236	第1調査区	-	瓦	丸瓦	やや暗 1~4mmの白色繊(長石 多く含む) 2mm以下の砂粘(雲母、長石 など)多く含む	堅腹	内面:0.5mm/1段白色~ 5%灰褐色 底面:0.5mm/1段色 内面:0.5mm/1段色	-	2.6	-	堅腹部~ 体部の 一部	凸面接方向のナダ 同様に日板、吊り痕
237	第1調査区	北壁17層	瓦	丸瓦	やや暗 2mm以下の砂粘(石質、雲 母など)多く含む 1mmの大不良	堅腹	内面:0.5mm/灰褐色 底面:1.0mm/1段色	15.7	2.7	-	1/2 内面毎日板 底面毎日板	凸面接方向のナダ、側面付 近に工具 内面毎日板ヒビ、吊り痕 型、内側日板 底面毎日板
238	井戸内	5~6層	瓦	軒平瓦	やや暗 3~4mmの繊(雲母、長 石など)多く含む 2mm以下の砂粘(雲母、長石) 多く含む	堅腹	内面:0.5mm/1段色 底面:0.5mm/1段色	25.6	2.4	-	平瓦部 のみ	複数 瓦当面 瓦当面は底面正反の可能性あり 瓦外縁に焼面面取り 平瓦接合焼成方向にナダ シントの接合部分は強ア 凸面接方向に幅広のナダ 周囲にバク
239	元寺境内 灰瓦	表模	瓦	軒平瓦	やや暗 1mm以下の白色砂粘含む 1mmの砂含む	-	凸面:0.5mm/2段白色 底面:0.5mm/1段色 底面:1.0mm/1段色	-	-	-	瓦当面 底面草文	
240	井戸1	-	瓦	軒平瓦	やや暗 1mmの砂粘含 2mm以下の砂粘(石質、雲 母など)多く含む	堅腹	凸面:0.5mm/1段色 底面:0.5mm/1段色	-	2.7	-	平瓦部の 一部	凸面面に界線残る 周囲ナダ

第19表 遺物観察表14

次 数 No.	出土地点	出土層序	材種	器種	胎土	焼成	色調	口径 /横幅 (cm)	器厚 (cm)	基高 /底幅 (cm)	残存率	備考
241	井戸1	-	瓦	軒丸瓦	赤 1~3mmの大粒の黒色含む 2~5mmの大粒の白色含む 黄土含む	堅壁	瓦面:白/灰色 器内:白/灰色	外径高 2.5	1.2	外径高 0.9	瓦面 内径:白 2/3	二つ口文 内径に朱文 軒丸瓦 内壁に白文 軒丸瓦を4個確認
242	井戸1	-	瓦	軒丸瓦	赤		瓦面:白/青色 器内:白/灰色	外径高 (14.2)	1.9	外径高 1.0	瓦面 内径に朱文 瓦面 内壁に白文 軒丸瓦 内壁に白文 軒丸瓦を4個確認	
243	井戸1	5-6層	瓦	軒丸瓦	やや赤 4mmの大粒(灰・黄・灰)混合 2~3mmの大粒(石英など) 多く含む 1mm以下の砂粒(滑石など) 多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:白/灰色	外径高 (14.5)	2.8	外径高 1.3	瓦面 内壁に朱文 軒丸瓦の底面が向かうナダ 3/4切端 瓦面と底面の接合部分は強 いナダ、底面 軒丸瓦を2個	
244	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3mmの大粒含む 2~3mm以下の中粒多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:19%白/灰色	13.6	2.1	-	凸面 内壁に朱文 軒丸瓦の底面が向かうナダ、 3/4切端 瓦面と底面の接合部分は強 いナダ、底面 軒丸瓦を2個	
245	井戸1	-	瓦	丸瓦	赤 2.5mm以下の砂粒多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:2.5%白/オリーブ灰色	13.9	2.0	-	体調の 凸面前方のナダ、撇かみ 1/2切端 瓦面と底面、瓦り筋	
246	井戸1	-	瓦	丸瓦	赤 1.5mm以下の砂粒多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:白/灰色	-	2.0	-	玉縁裏の 凸面前方のナダ 一部斜面と底面	
247	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 4mmの大粒(灰・石英など) 2mm以下の砂粒(灰・青・灰 など)多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:10%白/灰色	-	2.0	-	滑り止め 部分 瓦面有目模、吊り筋、捺ナ ダ	
248	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3mm以下の中粒多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:7.5%白/灰色	13.9	2.0	-	凸面前方のナダ 体調の 1/2切端、瓦面と底面、瓦り筋 底端工具の内向き	
249	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:30%白/灰色	14.1	2.0	-	凸面前方のナダ 一部斜面と底面、瓦り筋	
250	井戸1	-	瓦	丸瓦	赤 3mm以下の砂粒多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:30%白/灰色 器内:10%白/オリーブ灰色	-	2.0	-	体調の 1/2切端 瓦面と底面、瓦り筋	
251	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3mmの大粒の砂粒含む 1mm以下の砂粒多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:7.5%白/灰色	-	2.0	-	凸面前方のナダ 一部斜面と底面、瓦り筋	
252	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3mmの大粒含む 2mm以下の砂粒多く含む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:10%白/灰色	-	2.0	-	体調の 一部 凸面前方のナダ、工具の 瓦面と底面、瓦り筋	
253	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3mmの大粒含む 1~2mm以下の砂粒多く含 む	堅壁	凹凸面:白/灰色 器内:青肉:白/灰色	-	2.0	-	凸面前方のナダ 底面有目模、吊り筋、捺ナ ダ	
254	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 2mm以下の砂粒少含む	堅壁	凹凸面:青肉:白/灰色 (13.8)	2.0	-	体調の 一部 凸面前方のナダ 底面有目模、内側 瓦		
255	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 5mmの大粒(花崗岩)少含む 2mm以下の砂粒(滑石・石英 など)多く含む	堅壁	凹面:白/灰色 器内:30%白/灰色 器内:30%白/黄色 器内:5%灰白色	-	2.0	-	体調の 一部 凸面前方のナダ 底面有目模、瓦り筋	
256	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤	堅壁	凸面:7.5%白/灰色 凹面:30%白/灰色 器内:7.5%白/灰色 器内:5%灰白色	-	2.0	-	体調の 一部 凸面前方のナダ 底面有目模、瓦り筋	
257	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3mmの砂粒を含む 4mmの大粒(花崗岩)を含む	堅壁	凹面:30%白/灰色 器内:30%白/灰色 器内:7.5%白/灰色 器内:5%灰白色	-	2.0	-	体調の 一部 凸面前方のナダ 底面有目模、瓦り筋	
258	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3~5mmの大粒(灰・花崗岩) 黄土多く含む	堅壁	凹面:7.5%白/灰色 器内:30%白/灰色 器内:7.5%白/灰色 器内:5%灰白色	-	2.0	-	体調の 一部 凸面前方のナダ 底面有目模、瓦り筋	
259	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3~5mmの大粒(灰・花崗 岩) 黄土多く含む	堅壁	凹面:30%白/灰色 器内:30%白/灰色 器内:30%白/灰色	-	2.0	-	体調の 一部 凸面前方のナダ 底面有目模、瓦り筋	

第20表 遺物観察表15

次 数 No.	出土地点	出土層序	材種	器種	埴土	焼成	色調	口径 /横幅 (cm)	厚さ (cm)	容 量 (ml)	残存率	備考
260	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 4mm人の脚含む 2mm以下の砂粒多く含む	堅焼	凸面:SM/1灰褐色 凹面:SM/1Cに赤い褐色 器内:SM/1青灰色	-	2.6	-	凸面堅方向のナデ 凹面青白底、吊り締は直線的	
261	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3.5cm人の脚(石英・花崗岩) 多く含む	堅焼	凸面・裏面:NS/淡色	-	2.4	-	体側の 凸面堅方向のナデ、工具痕 凹面瓦底、粘板	
262	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 3mm以下の砂粒む	堅焼	凸面:IPW/1灰褐色 凹面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.6	-	体側の 一部 凸面堅方向のナデ、工具痕 凹面瓦底、粘板	
263	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 3.5~1mm以下の砂粒多く含む 3~4mmの大粒含む	堅焼	前面:SM/1灰褐色 背面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色 器内:SM/1灰褐色	-	2.2	-	器側面 堅凸面ナデ 凸面にハナレ跡	
264	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 2mm以下の砂粒多く含む 3~4mm以下の大粒含む 7mmの大粒多く含む	堅焼	凸面:SM/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.1	-	器側面 凸面ナデ 凸面に難かにあ切り痕	
265	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 3mm以下の砂粒含む 1mm以下の砂粒多く含む	堅焼	凸面:SM/1灰褐色 裏面:SM/1灰褐色 器内:SM/1灰褐色	-	2.2	-	器側面 凸面ナデ、機付蓋 凸面ナデ、工具痕	
266	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 3mm以下の砂粒含む 1mm以下の砂粒多く含む	堅焼	前面:SM/1灰褐色 背面:SM/1灰褐色 器内:SM/1灰褐色	-	2.2	-	器側面 凸面ナデ、機付蓋 凸面ナデ、工具痕	
267	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 1mm以下の砂粒多く含む 3mmの大粒含む	堅焼	前面:IPW/1灰褐色 背面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.0	-	器側面 凸面堅斜残る	
268	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 2mm以下の砂粒含む	軟	前面:IPW/1灰褐色 背面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.1	-	体側の 凸面ナデ 凸面瓦底	
269	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 3mm以下の砂(石英岩・石英 など)含む	堅焼	凸面:SM/1灰褐色 裏面:SM/1灰褐色	-	2.1	-	体側の 凸面ナデ 凸面瓦底	
270	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 3mm以下の砂粒含む	堅焼	前面:SM/1灰褐色 背面:SM/1灰褐色	-	2.0	-	体側の 凸面ナデ ハナレ跡、工具痕 あ切り痕	
271	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 0.5~1mmの砂粒 2~3mmの大粒含む 砂粒含む	堅焼	前面:IPW/1灰褐色 背面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.0	-	体側の 凸面ナデ 凸面全体にあ切り痕	
272	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 2mm以下の砂粒含む 3~4mmの大粒含む	堅焼	前面:SM/1灰褐色 背面:SM/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.0	-	体側の 一部 凸面ナデ ハナレ跡、工具痕 あ切り痕	
273	井戸1	-	瓦	平瓦	やや赤 0.5mm人の脚 2mmの大粒含む	堅焼	前面:IPW/1灰褐色 背面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.2	-	体側の 一部 凸面ナデ、工具痕、あ切り痕	
274	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 5mm人の砂粒含む 3mm以下の砂粒多く含む	堅焼	前面:SM/1灰褐色 背面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.0	-	器全体に難か 工具痕後ナデ	
275	井戸1	-	瓦	丸瓦	やや赤 4mmの大粒(花崗岩・石英岩 など) 2~3mmの大粒に多く含む	堅焼	前面:IPW/1灰褐色 背面:IPW/1灰褐色 器内:IPW/1灰褐色	-	2.1	-	凸面堅方向のケズリ 瓦底工具痕、布目痕	
276	井戸1	-	瓦	鳥糞	やや赤 3mm人の脚含む 3mmの大粒に多く含む(花崗岩・石英岩など)	堅焼	瓦底面:SM/1灰褐色 瓦底裏面:SM/1灰褐色 瓦底内:IPW/1灰褐色	外径幅 (13.3)	3.0	外縁厚 1.2	巴 外縁 瓦底面内に崩つてナデ、 加熱跡 瓦底裏面内に崩つてナデ 瓦底底部厚2.7cm	
277	井戸1	-	瓦	鳥糞	やや赤 3mm人の脚(石英・花崗岩) 含む 3mm以下の砂(石英・花崗岩 など)多く含む	堅焼	凸面面:SM/1灰褐色 裏面:SM/1灰褐色	-	2.8	-	凸面堅方向のナデ、機付蓋 凸面ナデ、布目痕、あ 切り痕	
278	井戸1	-	瓦	鳥糞	やや赤 含む 3mm以下の砂(石英・花崗岩 など)多く含む	堅焼	凸面面:SM/1灰褐色 裏面:IPW/1灰褐色	-	2.6	-	丸瓦の 凸面方向のナデ 凸面ナデ、布目痕、コビキ痕	

第21表 遺物観察表16

次第 No.	出土地點	出土順序	材質	形状	鉛土	焼成	色調	口径 /横幅 (cm)	器厚 (cm)	器高 (cm)	残存率	備考
279	井戸1	-	灰	丸土	今や粗 3mm以上の砂含む 2mm以下の砂含多く含む(灰 灰・黄褐色)	粗面 凹面(1.5mm)/灰色 内面(1.5mm)/黄褐色 縁肉は、灰白/黄褐色 10mmに亘る/黄褐色	-	3.0	-	丸玉部の 一部	底盤方角内ナダ 圓筒部直壁、底盤	
280	井戸1	-	灰	瓶瓶口又 水呑	今や粗	粗面	凹面/圓内 10mm/灰白色	-	3.7	-	体部の 一部	凸面部分に赤茶色 瓶身・瓶口各しく調節不可
281	井戸1	-	灰	瓶瓶口又 水呑	今や粗 3mm以上の砂(黄白色など) 1mm以下の砂含多く含む	粗面	凹面/圓内/灰色 内面(1.5mm)/灰白色 縁肉(1.5mm)/灰白色 10mmに亘る/黄褐色	-	2.6	-	体部の 一部	凹面ナダ
282	井戸1	-	灰	平丸	今や粗 3mm以上の石 2mm以下の砂(花崗岩)含む	粗面	凹面(1.5mm)/灰色 10mmに亘る/黄褐色 内面(1.5mm)/灰白色 2.0mm/花崗岩黄色 10mm/花崗岩	-	2.6	-	体部の 一部	凹面ナダ 凸面全体に赤茶色を残す
1 9 9 7 - 2	井戸1	-	瓦	瓦丸	今や粗 3mm以上の砂 2mm以下の砂含多く含む	粗面	外面(1mm)/灰色 内面(1mm)/灰色～ 灰白	23.8～ 37.6	2.2～ 2.5	長さ 44.2 底面 11.5	1/2	錐底 表面の電刷は灰先 E.鼻、鼻、耳は丁寧なケズ リナダ。蓋えらか。外側 に2~4cmの半周標準縫隙 を残す 内面は、底盤部に周囲に2~4cmの 縫隙だけ、内側は工具で削り 取り、ナダ
284	サブ トレント 内	-	瓦器	圓筒	1mm以上の混色砂含む 2mm以下の砂含多く含む	粗面	内面(1mm)/灰色 外面(1mm)/灰白色 内面(1mm)/灰白色 縁肉(1mm)/灰白色	[23.6]	0.9	-	口縁部 1/10	内面ナダ 底部上部優美ナダ 指揮位置 内面底ナダ 外側底ナダ後縫ナダ
285	サブ トレント 内	-	瓦器	瓶	1mm 1~2mm混色砂含む	粗面	内面(1mm)/灰色 外面(1mm)/灰白色 内面(2mm)/灰色	-	0.3	-	口縫部 小片	内面混ナダ 内縫合からモガキ
286	サブ トレント 内	-	粘土器	甕	今や粗 1~4mmの白色砂(長谷) 1~2mmの黒い砂(角谷) 多く含む 2mm以下の砂含む	良好	内面: 10mmに亘る/黄褐色 外面:10mmに亘る/灰白色 縁肉:2.5mm/灰白色	-	1.3	-	底部のみ 1/4	外蓋トゲ 單孔者しく調節不明確
287	サブ トレント 内	-	粘土器	甕 または 壺	今や粗 2mm~3mmの大粒砂(長谷) 1mmの黒い砂含む 2mm以下の砂含む 見られる	良好	内面(1mm)/灰白色 外面(1mm)/灰白色 内面(1mm)/灰白色	-	0.7	-	頸部(小 片)	内面混ナダ 内縫合方にハケ目又はモ ガキ 単孔既設
288	サブ トレント 内	-	須恵器	不明	今や粗 3mm以上の白色砂等 1mm以下の黒色の砂含む	粗面	内面(1mm)/灰白色 外面(3mm)/灰白色 内面(1mm)/オーブル灰白色 縁肉(1mm)/灰白色	-	0.8	-	底部小片	底部ナダ
1 9 9 9 - 2	調査区 内	周5号	瓦	今や粗 平丸	今や粗 3mm以下の砂 黒暗な砂含む 2mm以下の砂含む	粗面	内面(1mm)/灰白色 内面(2mm)/灰白色 内面(2.5mm)/灰白色	-	1.7	底盤部～ 体部の 一部	凸面横ナダ	
290	調査区 東中央	地盤押 込上	土師器	崩土	今や粗 1mm以下の中砂含む	今や粗 内面(1mm)/灰白色	内面(1mm)/灰白色 内面(1mm)/灰白色	-	0.3	-	口縫部 小片	内外面横ナダ
291	調査区西端	土師器下部	瓦	平瓦	甕 1~7mmの白色砂(長谷) 多く含む 2mm以下の砂含む	粗面	内面(3mm)/灰白色 内面(3mm)/灰白色 縁肉: 2.6mm/オーブル灰白色	-	1.6	-	体部の 一部	周凸面横方角のナダ
292	調査区 西端	土師器上部	瓦	丸瓦	今や粗 3mm以下の砂含む 内面に3mmの大粒砂あり	粗面	内面(1mm)/灰白色 内面(1mm)/灰白色 内面(1mm)/灰白色	-	2.5	-	体部の 一部	凸面横方角のナダ 圓筒部全周にモガキ
293	調査区 西端	第11号	陶器	瓶	今や粗	粗面	内面(1mm)/灰白色 内面(2mm)/灰白色 内面(1mm)/灰白色 内面(1mm)/灰白色	-	-	-	口縫部 像形	凸面横方角のナダ 圓筒部全周、内縫合、モガキ
294	施設部 立会社	-	瓦	瓦	2~3mmの砂(花崗岩)多く 含む	粗面	内面(1mm)/灰白色	15.0	35.6	34.0	口縫部 像形	凸面横方角の壁(モガキ)
295	施設部 立会社	-	瓦	瓦	3mmの大粒を多く含む 2mm以下の砂含を多く含む	粗面	内面(1mm)/灰白色	[11.7]	6.4	-	体部	凸面横方角のナダ 圓筒部全周、内縫合、モガキ

第22表 遺物観察表17

次数	No.	出土場所	出土順序	材種	器種	繪土	施成	色調	口径 /脚幅 (cm)	器厚 (cm)	腰厚 /脚幅 (cm)	残存率	備考
	296	横堀部 立会区	-	瓦	丸瓦	低い 8mm大の石 3mmの大の小石多く含む	施墨	凸面:377/1脚白色 凹面:377/1脚白色 脚内:377/1脚白色	15.5	2.6	-	-	凸面岡たき痕。工具痕 ヘラケズリ淡ナダ 凹面脚内折れ、足底痕
	297	横堀部 立会区	-	瓦	丸瓦	小や粗 3mm大の礫(赤茶?)多い 2~3mmの礫多く含む	施墨	凸面:377/2脚白色 凹面:377/2脚白色 脚内:377/2脚白色 脚外:377/2脚白色	15.7	6.8	-	-	凸面岡方向のナダ 凹面脚内折れ、足底痕 工具向ナダ 体部
	298	第1調査区	近世	瓦	丸瓦	やや粗 3mm大の礫(赤茶?)多く 2mm以下の砂粒多く含む	施墨	凹面:凸面 378-239オーリーブ 脚内:7.378/1脚白色	-	2.0	-	-	体部の 一部
	299	第1調査区	-	瓦	丸瓦	中や粗 3~4mmの大の礫(長岩?)含む 2mm以下の砂粒(雲母・長石 など)多く含む	施墨	凸面:377 378-239オーリーブ色 1079/1脚白色 凹面:357/1脚白色 脚内:357/1脚白色 脚外:378-239オーリーブ色	-	2.4	-	-	凸面岡方向のナダ 凹面脚内折れ、足底 工具向ナダ 体部
	300	第1調査区 10脚	中世	瓦器	瓦	3mm大の砂粒わずかに含む	施墨	内面:353/2脚白色 外面:2.377/1脚白色 脚内:7.353/1脚白色	-	0.4	-	-	口縁部 小片
	301	第1調査区 10脚	中世	瓦器	瓦	やや粗	施墨	内・外:356/1脚白色 脚内:377/1脚白色	-	0.4	-	-	口縁部 小片
	302	第1調査区 10脚	中世	瓦器	瓦	中や粗 4mm大の礫(石英?)多く含む	施墨	内・外:356/1脚白色 脚内:377/1脚白色	(11.5)	0.4	-	-	口縁部 小片
	303	第1調査区 10脚	中世	土師器	瓦	4mm大の礫(石英?)多く含む	良好	内・外:356/1脚黄色	(9.6)	0.5	-	-	口縁部 1/8
	304	第1調査区 10脚	-	土師器	瓦	やや粗	内・外:356/1脚白色 脚内:7.356/1脚黄色	(7.2)	0.3	-	-	口縁部 内面直張ナダ 1/8	
2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	305	第1調査区 10脚	-	瓦器	圓錐形	中や粗 1mm以下の砂粒を含む	施墨	内・外:353/1脚白色 脚内:2.377/1脚白色	(23.4)	0.6	-	-	内面岡ナダ後張方向のミガ 外面直張ナダ後張方向のミガ 小片 底板:5脚半深鉢型15cm頃
2	306	第1調査区 10脚	-	陶磁器	瓶	やや粗 1mm以下の砂粒少量化	施墨	内・外:353/1脚白色 353/2脚白色 外面:1070/1脚白色 脚内:2.353/1脚白色	-	0.6	-	-	口縁部 小片
2	307	第1調査区 10脚	中世	陶器	瓶	黄 黄色砂粒と2mmの大の礫(に占比 い赤茶?)含む	施墨	内: 353/1脚白色 353/2脚白色 外: 1078/2脚白色 7.353/2脚白色 7.353/2脚白色 7.353/2脚白色	-	0.5	-	-	底部小片 内外面回転模ナダ 外表面5cm以下の中白 白色に黒色の斑をねら
308	第1調査区 10脚	中世	陶土器	土器	2.3am大の砂粒含む	良好	内: 353/1脚白色 353/2脚白色 外: 1078/2脚白色	底盤 7.353/6脚色	0.9	-	-	-	底盤小片 内面押さえ
309	第1調査区 10脚	中世	陶土器	土器	1mm以下の砂粒を含む	施墨	内・外: 353/1脚白色 353/2脚白色	-	0.5	-	-	口縁部 のみ	
310	第1調査区 10脚	中世	陶土器	土器	1mm以下の砂粒を含む	施墨	内・外: 353/1脚白色 353/2脚白色	-	0.6	-	-	底盤小片 内外面回転模ナダ	
311	第1調査区 10脚	中世	陶器	瓶	2.3am大の砂粒含む	施墨	内: 353/2脚オーリーブ色 外: 7.353/2脚オーリーブ色 7.353/2脚オーリーブ色 7.353/2脚白色	(13.6)	0.4	-	-	口縁部 内外面回転模ナダ 1/4.3.5cm以下の蓋物	
312	第1調査区 10脚	中世	陶器	瓶	2.3am大の砂粒含む	施墨	内・外: 353/2脚白色 外: 1078/2脚白色	(16.0)	0.4	-	-	口縁部 内面直張ナダ 小片 3.5cm以下の蓋物	
313	第1調査区 10脚	中世	陶器	罐	2.3am大の砂粒含む	施墨	内: 353/2脚白色 外: 2.353/4(に占比)赤茶 353/2脚白色 2.353/4(に占比)赤茶 353/2脚白色	(23.8)	0.9	-	-	口縁部 全体の 1/4	
314	第1調査区 10脚	-	瓦	丸瓦	やや粗 2mm以下の礫・砂粒多く含む	施墨	内:34/356/1脚白色 凹面:34/356/1脚白色 脚内:7.356/1脚白色	-	-	-	-	玉縁部 一切 「裏面方角へ張り 正面にかすかに斜・横方 の凹部がみられる」	

第23表 遺物観察表18

次級 No.	出土地点	出土層序	材種	器種	土色	洗成	色調	口徑 /横幅 (cm)	縦幅 (cm)	断面 /底面 (cm)	保存率	備考
316	第1調査区 10番	中世	瓦	丸瓦	今や赤 6mm以上の縫(石質か)、 2~3mmの大縫(良)が付 む。 6mm以下の砂粒多く含む。 微細な雪雲少含む	取組	凸面:36/灰褐色 凹面:34/灰褐色 縫内:35/灰褐色	-	2.2	-	体部の 一割	△直腹丸角のナダ 底面全体に灰褐色、軽いコ ビキ風、工具痕
317	第1調査区 10番	中世	瓦	平瓦	切 4mmの大縫含む 3mm以下の砂粒多く含む	やや赤	泥色-青肉: 7.35V/2灰褐色	-	2.1	-	体部の 一割	底面全体に灰褐色 雪雲少含む自然不規則
318	第1調査区 10番	中世	瓦	平瓦	やや赤	取組	内面: 2.3V/2灰褐色 縫内: 2.3V/2灰褐色	-	1.9	-	底面の 側面の 一部	凸面面テグ 側面の 一部ハラシ跡
319	第1調査区 10番	中世	瓦	平瓦	今や赤 1~5mmの大白色 2~3mmの大縫(白色含む) 1mm以下の黒色、白色砂粒多 く含む	取組	内面: 7.3V/4灰褐色 縫内: 7.3V/4灰褐色 縫内: 2.3V/2灰褐色 縫内: 2.3V/2灰褐色	-	1.7	-	体部の 一部	△凸面ナデ 底面部
320	第1調査区 10番 北壁街面 2~11号	中世	瓦	平瓦	1~5mmの大白色 3mmの大縫(白色含む) 2~3mmの大縫(良)が複数有 る。 3mmの砂粒含む	取組	内面: 2.3V/5灰褐色 内面: 2.3V/5灰褐色 内面: 2.3V/2灰褐色	-	1.9	-	側面 体部の 一部	△凸面ナデ 底面部
321	第1調査区	-	土師器	皿	1mm以下の砂粒をごく少量 含む	良好	内・外面-青肉: 10V/7/4灰褐色	(16.2)	0.3	-	側面 体部の 一部	△直筒ナダ 底面ナダ
322	第1調査区 清6	-	瓦器	屋根瓦	1mm以下の砂粒(雲母)含む	取組	内・外面:1.6灰褐色 縫内:10V/7/4灰褐色	(12.2)	0.9	-	口縁部 内面	△屋根瓦ナダ 内面ナダ
323	第1調査区 清17	-	土師器	陶盆瓦	縫	良好	9.3V/6灰褐色	3.8	0.9	1.2	底面	トレンチか 用意所
324	第1調査区 ピット194	-	-	甕土	7~8mmの大縫(石質) 6mmの大チャート 縫大の縫(多く石質) 多 く含む	收	内面: 7.3V/6灰褐色 縫内: 7.3V/6灰褐色 縫内: 10V/8/2灰褐色 縫内: 10V/8/2灰褐色	-	最大 5.4cm	-	-	表此に昔秋の植物灰瓦あり 灰瓦化存有
325	第1調査区 井戸1	-	瓦	軒平瓦	やや赤 3mm以下の砂粒含む 凸出:2mmの砂粒含む	取組	内面: 7.3V/6/2灰褐色 内面: 7.3V/6灰褐色 内面: 1.6V/7/4灰褐色 縫内: 1.6V/7/4灰褐色 (心)	2.2	2.2	-	瓦面 底面 1/2	△凸面灰ナダ 壁面底面ナダ 1/2 底面底面瓦にも直取りを施す 直面瓦底面瓦
326	第1調査区 清37	-	陶製品	鉢	-	-	-	外径 3.9	0.1	-	丸形	水道室
327	調査区内 第12~13 層	無機物	井戸器	筒	3.3mm以下の砂粒含む	取組	内面: 10V/6/2灰褐色 内面: 2.3V/2灰褐色 縫内: 2.3V/2灰褐色	-	-	-	小片	破ナダ
328	調査区内 第12~13 層	土師器	塊	やや赤 0.5mm以下の砂粒含む	良好	内面: 2.3V/2灰褐色 内面: 1.6V/6/1灰褐色 縫内: 2.3V/2灰褐色	-	-	-	口縁部 小片	破ナダ	
329	調査区内 第12~13 層	土師器	不明	やや赤 0.5mm以下の砂粒含む	良好	内・外面-青肉: 10V/7/2C.4灰褐色	(16.4)	0.5	-	1/1	破ナダ	
330	調査区内 第27~28 層	瓦器	板	板	内・外面	取組	内・外面: 9.4灰褐色 縫内: 9.4V/7/2灰褐色	(11.4)	0.25	-	口縁部 内面 1/1	口縁部 内面直角部分のミゾケ 1/1 内面直角部分
331	調査区内 第27~28 層	土師器	不明	今や赤 0.5mm以下の砂粒含む	やや赤	内・外面-青肉: 10V/7/2C.4灰褐色	(16.4)	0.5	-	小片	内面直角ナダ後痕ミゾケ	
332	調査区内 第27~28 層	瓦器	柄	柄	内・外面	取組	内・外面: 30.2/2灰褐色 縫内: 2.3V/2灰褐色	-	0.5	-	側面のみ 内面直角部分のミゾケ	側面-内面直角部分のミゾケ 内面直角部分
333	調査区内 第27~28 層	瓦器	柄	やや赤	内・外面	取組	内・外面: 9.4灰褐色	底面 (3.0)	-	-	底面小片	内面直角のみにミゾケ 側面-底面直角又は大和田 模様あり
334	調査区内 第27~28 層	土師器	蓋	蓋	1mm以下の砂粒含む	良好	内・外面: 10V/6/3灰褐色 縫内: 1.6V/2灰褐色	-	0.3	-	口縁部 小片	側面-底面直角して調査不明
335	調査区内 第27~28 層	瓦器	柄	やや赤 2mm以下の砂粒多く含む	内・外面	取組	内・外面: 10V/6/3灰褐色 縫内: 1.6V/2灰褐色	底面 (19.0)	0.5	-	側面1/2 内面直角ナダ	側面-内面直角部分のミゾケ

第4章 私部城と近畿の戦国期城館

中井 均

I はじめに

私部城は大阪府交野市私部に所在する戦国時代の城跡である。史料上では交野城、片野城、私部城と記されているが、現在周知の遺跡としては「私部城跡」として登録されており、これまでの発掘調査も、私部城跡として報告されていることより拙稿も、その名称に従うこととする。

さて、大阪府下では平野部に築かれた戦国時代の城館跡が、その後の開発によってほとんどが地上に痕跡を残していない。そうしたなかにあって私部城跡は曲輪、空堀がよく残された城跡であった。ところが近年城跡付近では住宅開発が進み、これまで保存状況が良好であった城跡自体も危機的な状況となっている。

そこで中心部分を保存し史跡指定を目的として発掘調査が実施されたのである。その結果は報告書で述べられている通りであるが、拙稿ではその成果をもとに私部城跡が近畿の戦国期城館でどのような位置付けができるのかについて分析をおこないたい。

II 構造的特徴

構造

私部城跡は、段丘の先端に選地する平城である。その構造は主郭、二郭、三郭が空堀を隔てて連立する、連郭式縄張りとなっており、主郭には「城」、二郭には「天守」と呼ぶ小字が残されている。この三つの曲輪が中心となり、南方には本丸池と呼ばれる堀跡が残されており、この堀が城の南限と考えられる。北方には百々川が流れ、これが自然の堀の役目を果たしていた。さらに北方には免除川が流れ、両河川間は深田（湿田）となっており、やはり自然の防御施設となっていた。また、三郭

の西側、現在の交野郵便局付近も微高地となっており、曲輪の痕跡と考えられ、ここが城の西端と考えられる。一方、東側も二郭のさらに東側に空堀を隔てて曲輪の痕跡が残り、ここが城の東端と考えられる。

なお、城の南東部に突出して光通寺が位置している。この光通寺に残された寛文4年（1664）の棟札に、「破光通之寺壁仏閣埴地勝境成」とあり、光通寺が私部城主安見氏によって破却されたと記している。破却した後には私部城の一画に取り込まれた可能性がある。

信長の攻城戦

さて、私部城で註目できるのは、『信長公記』に登場することであろう。元亀元年（1570）の条に「高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫、片野に安見右近、伊丹・塩河・茨木・高槻、何れも城々堅固に相抱へ」（10月20日条）と記されており、高屋城に畠山昭高が、若江城に三好義繼が、私部城に安見右近が、さらに伊丹城、塩河城、茨木城、高槻城が織田信長方として堅固に構えられていたと記している。そして元亀3年（1573）には「去程に、三好左京大夫殿非儀を思食立ち、松永彈正・息右衛門佐父子と仰談はれ、畠山殿に対し、既に鉢折に及ばれ候。安見新七郎居城交野へ差向け、松永彈正取出を申付け候。其時の大将として、山口六郎四郎・奥田三川両人、勢衆三百ばかり取出に在城なり。信長公より、討罪すべきの旨にて遣はさるゝ御人数、

佐久間右衛門・柴田修理亮・森三左衛門・坂井右近・蜂屋兵庫・斎藤新五・稲葉伊豫・氏家左京亮・伊賀伊賀守・不破河内・丸毛兵庫・多賀新左衛門此外、五歳内公方衆を相加へ、後詔として御人数

出され、取出を取巻き、しょ垣結まはし置かれ候處に、風雨の粉れに切抜け候なり。三好左京大夫殿は若江に攝籠り、松永弾正は大和の内信貴の城に在城なり。息右衛門佐は奈良の多門に居城なり。』とある。三好義継が信長に背き、松永久秀とその息子久通と謀って、河内守護畠山昭高を攻め寄った。その際に安見新七郎の居城である私部城に対して、攻城戦用の付城としての取出を構えて城攻めをおこなったのである。この私部城攻めに対して織田信長はすぐさま松永勢を討つべく、佐久間信盛、柴田勝家らの家臣をはじめ、五歳内の将軍の奉公衆も加え、取出を取り巻く「しし垣」(鹿垣)を廻らせたという合戦が繰り広げられた。

さて、このように力攻めではなく、取出(付城)を築いたり、包囲網の鹿垣を築く攻城戦は元亀年間頃からの織田軍の恒常的な戦法となる。

ほぼ同じ頃に信長によって攻められた佐和山城(滋賀県彦根市)では、『信長公記』元亀元年七月朔日条に「七月朔日、佐和山へ御馬を寄せられ、取詰め、鹿垣結はせられ、東百々屋敷御取出仰付けられ、丹羽五郎左衛門置かれ、北の山に市橋九郎右衛門、南の山に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛、四方より取詰めさせ、諸口の通路をとめ、」と記されている。浅井長政軍の磯野丹波守貞昌が立て籠もる佐和山城を織田信長軍が攻めたときの状況である。佐和山城を鹿垣で囲い込み、四方に取出を構えて攻めており、私部城攻めの取出を攻めた状況とまったく同じ戦法である。この佐和山城攻めについては、四方の取出のうち東の百々屋敷の取出と、北の山の取出の遺構が残されており、『信長公記』の記述が信頼できることを物語っている。ただ鹿垣に関してはその痕跡は残されておらず、土壘ではなく、柵列であった可能性が高い。

この合戦後に信長が木下藤吉郎と樋口直房に宛てた書状には、「佐和山おさへの諸執(取)出之道具共、両人かたへ可預置候、小谷表之普請之用ニすべく候、」とあり、佐和山城攻めに用いた取出の用材を両人に預けるので、今度はそれを小谷

城攻めの取出の普請に用いよと命じている。攻城戦のための取出の構築はいかに早く造るかが最大のポイントとなる。そのため鹿垣や取出構築に必要な用材は事前に準備されており、築くときにはそれらを持参して組み立てたものようである。つまり鹿垣や取出は現代のプレハブ工法によって築かれたわけである。そして攻城戦が終了するとそれらは解体され、次の戦場に運ばれたのである。

私部城攻めの取出を囲う鹿垣や佐和山城攻めに築かれた鹿垣は、現在その痕跡を残していない。これは破壊されて残っていないのではなく、残らないような構築物であったと考えられる。それは柵列であり、2つの攻城戦で構えられた鹿垣とは、柵列を廻らせるものであった。

ところがその後の鹿垣は土壘へと変化するようである。例えば元亀元年から4年までの小谷城攻めで、同3年に信長は姉川南岸の横山城から、姉川を越え小谷城に相対する虎後前山に本陣を築く。この虎後前山について『信長公記』には「虎後前山より宮部迄路次一段あしく候。武者の出入のため、道のひろき三間々中に高さとつかせられ、其へり敵の方に高さ一丈に五十町の間築地をつかせ、水を閂入れ、往還たやすき様に仰付けらる。」(元亀3年(1572)8月8日条)と記している。深田で足元の悪いところに、信長は幅3間(約6m)もの軍用道路を築いたのである。この道路は小谷側に対しても高さ1丈(約3m)もの土壘を築き、敵に軍勢の移動を見られないようにしていた。さらに敵側には道路に沿って水堀まで掘られた。

同様の土壘は天正5年(1577)から8年にかけておこなわれた播磨三木城攻めでさらに巨大化する。毛利方に与した別所長治の立て籠もる三木城を攻めるために信長方は三木の周辺に30ヶ所以上に取出を築いて包囲した。特に毛利方からの物資が運び込まれる三木～魚住間の道路を封鎖する目的で幾重にも土壘が築かれた。この土壘を三木の多重土壘と呼んでいる。『播磨征伐之事』には「依之為塞三木魚住通路。始君峯廻之付城五六十。其

透々立番屋。堀。柵。乱杭。坂茂木。表引薙棘裡
浚堀。』と記されていたが、実際に発掘された二位谷奥付城跡の土塁では土塁の基底部に2条の溝が掘られていた。おそらくその溝間に櫓が詰められていたものと考えられる。

さらに天正9年の鳥取城攻めでは鳥取城を包囲する土星線はほぼ完成し、包囲網は土星と付城によつて鳥取城を囲い込んでいる。『信長公記』には「とつとりの東に、七・八町程隔て、並ぶ程の高山あり。羽柴筑前守彼山へ取上り、是より見下墨、則、此山を大將軍の居城に拵へ即時にとつとりを取りまかせ、頓て又、二ヶ所のつなぎの出城の間をも取切り、是又、鹿垣結ひまはしとり籠め、五・六、七・八町宛に、諸陣近々と取詰めさせ、堀をほつては尺（柵）を付け、又、堀をほつては堀を付け、築地高々とつかせ、透間なく二重・三重の矢蔵を上させ、人數時の面々等の居陣に、矢蔵を丈夫に構へさせ、後巻の用心に、後陣の方にも堀をほり、堀・尺を付け、馬を乗りまはし候ても、射越の矢にあたらぬごとくに、まれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其内に障屋を町屋作りに作らせ、夜るは手前々々に篝火たかせ、白中のごとくにして、廻番丈夫に申付け、海上には警固舟を置き、浦々焼払ひ、丹後・但馬より海上を自由に舟にて兵糧届けさせ、此表一着の間は、幾年も在陣すべき用意生便敷次第なり」と記される。

また、翌10年から始まった備中高松城攻めでも同様である。一般的に高松城攻めは水攻めと呼ばれているが、基本的には土塁を構築して高松城を囲い込む攻城戦であった。

このように鹿垣と呼ばれていた包囲網は土塁へと変化する。それは柵列から土塁への進化であった。文献史料に登場する鹿垣は現地に遺存しておらず、おそらく柵列であったと思われるが、土塁の上にも柵が廻らされていたものと思われる。そうした柵や柵列間に構えられた井櫓構の用材が常に準備されており、攻城戦が始まると組み立てられたわけである。

ではなぜ力攻めをせず、こうした時間と労力のかかる包囲網を構築したのであろうか。元亀の小谷城攻めでは、『信長公記』に「然りといへども、大谷（小谷）は高山節所の地に候間、一旦に攻上り候事なり難く思食され、」（元亀元年（1570）6月28日条）と、巨大な山城に力攻めは極めてリスクの高かったことを記している。このために包囲戦が選択されたわけで、それはできるだけリスクを避けるためであった。まさに自軍の損傷を出来る限り最小限に止めるための戦いであった。

織田・豊臣軍が多用した包囲網の初原が元亀の佐和山城攻めや、私部城の戦いで構えられた鹿垣であった。さらに私部城で註目されるのは、単なる攻城戦に用いられたのではなく、私部城を攻める松永軍の取出を改めるために後詰として鹿垣を廻らせたという、二重の包囲網戦が繰り広げられたのであった。

ところで松永軍の取出はどのあたりに築かれたのであろうか。こうした臨時的な陣城については地元に伝承を残すところが少なく、松永軍の取出に関してても地元には伝承をまったく残しておらず、不明である。ただ、私部城の南方約700mに位置する私部南遺跡で検出された23-15溝は谷を背後にコの字状に廻るもので、幅は5.1m、深さ2.41mを測る。その断面はV字形の薬研堀で、溝の内側角度が50度、外側が40度となる。報告書では、「一度溝内に入ると上がるが非常に難しい斜度である。」と記している（註1）。遺物が出土しておらず、時代を限定するのはむつかしいが、大きくは中世の遺構であり、断面の形状から城館遺跡の空堀の可能性が高く、距離的には私部城の相城として築かれた取出の堀である可能性は高い。なお、この溝は埋土の堆積状況より内側から一気に埋められており、そうした行為からも臨時的な取出の堀の可能性が高い。

なお、私部南遺跡が松永方の取出となると、信長軍が包囲網として築いた鹿垣はさらにその外方を廻る長大な施設であったこととなる。

III 私部城跡出土の瓦

私部城跡の発掘調査成果でもっとも注目されるのは瓦の出土である。織田・豊臣系城郭の特徴は石垣、瓦葺き、礎石建物という3つの要素が備わった城ということができる。戦国時代の城は軍事的な防御施設であり、山を切り盛りして築いた上の城であった。それが織田信長の小牧山城、岐阜城、安土城の築城によって革命的な変化を遂げたのである。戦うだけの城から、天下人の居城として見せる城へと大きく変化する。城は統一政権のシンボルとなつたわけである。

しかし、一方で16世紀の初頭にはこうしたバツを城に取り入れる地域も出現する。石垣については信濃の松本周辺、美濃、北近江、南近江、西播磨、東備前、北九州、そして三好長慶によって築かれた城などである。瓦に関しては畿内、備前、北部九州などで寺院の瓦を城郭に導入している。礎石建物については全国的に認められるものの天主（天守）に相当する施設は認められない。

そうした織田・豊臣系城郭の大きな特徴のひとつである瓦が私部城跡から出土したことは注目される。これは単に私部城跡の特徴というだけではなく、日本城郭史にとっても重要な問題である。ここでは織田信長の安土築城前後の近畿における城郭の瓦について概観しておきたい。

さて、まず最初に安土築城前後に築かれた城で、瓦が出土した城跡としては、河内〔交野城跡、津田城跡、本丸山城跡、若江城跡、鳥帽子形城跡、飯盛城跡〕、摂津〔有岡（伊丹）城跡、池田城跡、芥川山城跡、高槻城跡〕、山城〔田辺城跡、鹿背山城跡、勝龍寺城跡〕、大和〔多聞城跡、龍王山城跡、立野城跡、椿井城跡〕、近江〔坂本城跡、小谷城跡〕、播磨〔三木城跡、置塙城跡、御着城、豊地城跡、恒屋城跡〕などがあり、全国的にも密集する地域であることがわかる。ここではそれについて簡単に触れておきたい。

河内

・私部城跡（大阪府交野市私部）

私部城跡から出土する瓦については本報告に詳細に述べられているところであるが、その出土状況は本郭に集中しつつも城跡全城から出土しており、瓦当も出土していることより、城郭の建物の多くが本瓦葺きであったことを示している（註2）。軒平瓦の紋様からはこれらの瓦が16世紀中～後半に製作されたことが明らかにされている。吉田知史氏の分析によって私部城跡出土軒平瓦は、永禄5年（1562）銘瓦が出土した大坂本願寺（石山本願寺）の軒平瓦よりやや後出し、若江遺跡27次C地区堀3より出土した軒平瓦よりはやや古いものであることが確認されている。さらに北河内や攝津、奈良などの在来の瓦であることも明らかにされている。

こうしたことより、私部城跡から出土した瓦は織田信長の影響を受けたものではなく、在來の瓦を安見氏が居城に導入したことは明らかである。

・津田城跡（大阪府枚方市津田）

津田城は標高286.5mの国見山の山頂付近に、津田氏によって築かれた山城といわれている。昭和31年に津田町史編さんに伴い、城跡の最高地点を発掘したところ、地表下30cmに焼土層が広がっており、その下15cmで地山となり、その底部付近で瓦片と貿易陶磁の出土したことが報告されているが、詳細は不明。文献史からは、永禄11年（1568）に三好三人衆方であった津田城が松永久秀、三好義継方へ寝返り、義継が津田城に入城している。その後、信長を離反した久秀が元龟4年3月に津田城に入ったことがわかっております、津田城が久秀にとって重要な城であったことがわかる。

ただ、城跡と推定される場所は削り残したと見られる土壠状の高まりによって三方が囲まれてい

るが、背後に堀切も設けられておらず、戦国期の山城としては疑問も残り、ここが久秀の津田城とは断定できない。あるいは山岳寺院の可能性もあり、出土した遺物もそうした寺院に伴う可能性も視野に入れて検討すべきである。

・本丸山城跡（大阪府枚方市津田）

国見山の北西山麓に位置する本丸山に位置する城跡で、古くは津田正時が津田落城後に築いた城と伝えている。この本丸山はほぼ全域が発掘調査されており、戦国時代の堀や石組、丸瓦の暗渠、平瓦の暗渠、焼土塊などが検出されている。出土遺物には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦などがあった。吉田知史氏の分析によれば、軒平瓦は勝龍寺城跡出土の軒平瓦に酷似しているが、本丸山城跡出土の軒平瓦がよりシャープとし、北河内に系譜が求められるとする。また、鬼瓦は宝珠文鬼瓦で、戦国期特有の鬼瓦とし、やはり勝龍寺城跡出土の宝珠紋鬼瓦より先行する瓦とした（註3）。

ところで本丸山城跡そのものの評価であるが、この城を私部城攻めの際に松永久秀が築いた相城のひとつではないかと考えられている。『多聞院日記』元亀3年（1572）4月29日条にある「一、昨夜ツタノ付城落居了云々、実否如何。」のツタ（津田）の付城が本丸山に想定されるのである（註4）。確かに松永氏が大和から河内に進出するには国見山を越えた場所ではある。ただ、本丸山城跡も戦国期の城郭としてはイレギュラーな構造を示しており、この遺跡自体を城館遺跡と断定することには疑問が残る。さらに相城にしては豊富な遺物が出土しており、その点も付城としては疑問が残る。

国見山の山頂部が城郭として疑問だとすることにより、この本丸山こそが津田城ではないかとする考えもある。

筆者は詰の山城として国見山に単郭の小規模な城を築き、その山麓に居館として築いたものが本丸山遺跡ではなかったかと想定している。本丸山

もすべてを城館遺跡として扱うのではなく、屋敷地として階段状に平坦地を構えたものと考えられる。

いずれにせよ、出土した瓦は元亀2年以前のもので、安土城に先行する瓦と評価できるものである。

・若江城跡（大阪府東大阪市若江本町・若江北町・若江南町）

若江遺跡は弥生時代から戦国時代までの複合遺跡である。若江城跡もこの若江遺跡に含まれている。

さて、若江城は室町時代に河内守護を世襲する畠山氏の居城として築かれ、河内守護所となつた城である。実質的には守護代遊佐氏によって築かれたものと考えられている。応仁の乱によって畠山義就は守護所を誉田屋形に移す。

永禄11年（1568）に上洛した織田信長は、三好三人衆に対立していた三好義継を河内北半国守護として若江城に入れ置いた。しかし義継は後に松永久秀とともに反信長方となつたため、天正元年（1573）信長は佐久間信盛に命じて若江城を攻めさせた。若江城では若江三人衆が信長方に内応したため、義継は自刃し、城は落城した。その後若江城は若江三人衆によって支配される。

さらに信長は大坂本願寺攻めの前線基地として若江城に在陣している。本願寺との和解後、廃城となつたようである。

城跡は地上に痕跡を一切残しておらず、城跡推定地付近ではこれまで100次近い発掘調査が実施され、中心部には幅5mを超える溝によって東西140m、南北150m規模の方形区画が確認されている。その溝から大量の瓦や土壁の下地、礎石が投棄された状態で出土しており、城割りによって破却されたものと考えられる。

出土した三巴文軒丸瓦は株文が31を数え、巴は頭が接し、尾は長いという特徴を持つ（註5）。元亀2年（1571）の勝龍寺城跡の瓦に類似する。

宝珠文の鬼瓦は両側の周縁部に円形文を押しており、本丸山城跡出土鬼瓦に酷似する。こうした特徴より天正元年の信長本陣よりも古い様相を呈しており、三好義継段階の若江城に葺かれていた瓦と考えられる。

・鳥帽子形城跡（大阪府河内長野市喜多）

鳥帽子形城の初見は、文正元年（1466）に、畠山義就が河内金胎寺城に出陣し、押子形城に兵を向けたと記された『経覧私要鈔』である。その後、畠山義就系の基家、義央、義堯と、畠山政長系の尚順、植長、高政が鳥帽子形城の争奪戦を繰り広げる。

天正3年（1575）に織田信長は高麗城に三好康長を攻め落とすと、河内国内の破城をおこなうが、鳥帽子形城は信長の配下となつた畠山氏臣の鳥帽子形衆によって支配されていた。豊臣秀吉は天正11年（1583）に中村一氏を岸和田城主とし、翌12年には「同（8月）四日、河内国高麗城ノ奥、ゑほしがた（鳥帽子形）と云古城普請、筑州より被仰付由にて、中孫平人敷にてコサルヽニつきて、」（『宇野主水日記』天正12年8月4日条）とあるように、すでに廃城となつていた鳥帽子形城を中村一氏が羽柴秀吉の命令によって普請している。これは鳥帽子形城を紀州根来寺攻めの拠点として改修したものであった。

この鳥帽子形城跡では昭和61年以来数次にわたる発掘調査が実施されており、主郭からは礎石建物が検出されるとともに、瓦が出土している。出土した瓦は14～16世紀に製作されたもので、14世紀の瓦は周辺の寺院瓦が転用されたものと考えられている。三巴文軒丸瓦は三巴文の外側に圓線を巡らせるもので、その外側には23個の珠文を配している。巴文は頭部が離れ、尾は圓線とは接していない。また、軒平瓦には波状文が認められる（註6）。こうした特徴より瓦は、永禄5年（1562）に畠山高政が三好長慶に敗れた後、天正12年（1584）の中村一氏による改修までの段階、

特に三好三人衆による支配段階の可能性が高く、安土城に先行する瓦と考えられる。

・飯盛城跡（大阪府大東市北条・四条畷市南野）

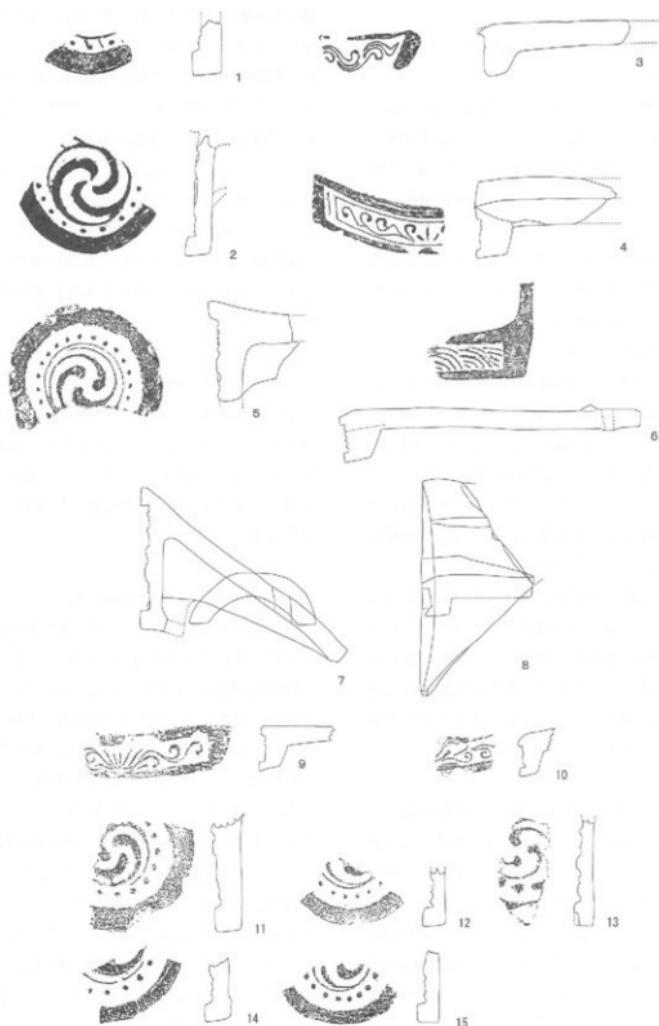
飯盛城は天文年間に畠山義堯が河内支配のために木沢長政に命じて築いた山城である。永禄3年（1560）に三好長慶が芥川山城より飯盛城に入り居城とするが、その4年後の永禄7年（1564）に城内で没した。

その後、三好義継や三好三人衆も飯盛城にいたようであるが、織田信長の上洛後は畠山昭高に与えられる。昭高が遊佐信教の反乱で討たれると、信長は飯盛城を攻め、天正4年（1576）頃に廃城となる。

現存する城郭遺構は永禄3年に入城した三好長慶によって築かれたものと考えられる。広大な山城は北方の防御空間（北城）と、南方の居住空間（南城）から構成されており、近年の分布調査によって北城の大部分が石垣によって構築されていたことが明らかとなっている。安土城に先行する石垣として、同じ三好長慶の居城である芥川山城とともに注目される。

1981年には南城の千疊敷と呼ばれる一画でラジオ局の中継無線基地造営に伴う発掘調査が実施され、かわらけ、瓦質土器、陶器などとともに瓦片が出土している。山城でかわらけが出土するのは山城に居住施設のあったことを雄弁に物語っている。飯盛城では長慶が水諭調停をおこなつたり、千句を詠んだりしており、山城が社会、文化の中心であったことがわかる。こうした住む山城はこれまでの狭い空間としての山城像を大きく覆す結果となった。

この飯盛城跡からは発掘調査で出土した瓦以外にも数点の瓦片が採集されている。小片の丸瓦片で、年代を決定するのはむつかしいが、コピキ痕はA手法であり、天正11年（1583）以前の瓦と見られ、まず三好長慶時代の瓦と見てよい。



1～4：交野城跡、5～6：鳥糰子形城跡
7～8：有岡城（伊丹城）跡、9～15：池田城跡



第1図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（1）

摂津

- ・有岡（伊丹）城跡（兵庫県伊丹市伊丹・宮ノ前・中央）

伊丹城は摂津の国人伊丹氏の居城であったが、天正2年（1574）に織田信長によって摂津守護となつた荒木村重が伊丹氏を滅ぼし、伊丹城を有岡城と改名して居城とした。その後、村重は信長を離反したため、信長は天正6年（1578）12月より有岡攻めを開始する。村重は11ヶ月におよぶ籠城戦を戦うが、内応者が出て、天正7年（1579）10月に落城し、その後廃城となる。

その遺構は地上にほとんど残されていなかつたが、昭和50年度より開始された発掘調査と、江戸時代初期に作成された絵図から徐々に明らかにされつつある。その構造は段丘の縁辺部に選地し、段丘崖面となる東辺中央に本丸を配し、段丘上に懇構を構えている。また、これまでの数十次にわたる発掘調査によって懇構内にも巨大な堀が掘られ、城下町には武家地と町屋を区画していた。

本丸の西北隅の石垣脇からは大量の瓦が出土している。三巴文軒丸瓦は珠文を20個配し、巴文の尾は圓線状に次の尾に接している。軒平瓦は中心飾りを三葉とし、左右に三転する均整唐草文を配している（註7）。こうした瓦は天正2年の有岡城段階のものと考えられる。

- ・池田城跡（大阪府池田市城山町・建石町）

池田城は北摂の国人池田氏居城である。池田勝正是永禄11年（1568）に織田信長が上洛し、摂津進攻を開始すると織田軍下となり、伊丹氏、和田氏とともに摂津三守護となるが、家臣荒木村重によって追放されてしまう。その後、池田城は廃城となるが、天正6年（1578）から開始された有岡城攻めに際して、織田信長が「古池田」を本陣としたことが『信長公記』に見え、その「古池田」が池田城であったと考えられる。最終的な廃城は有岡落城のことであろう。

城は五月山から南方へ張り出した標高35～

55mの洪積台地上に立地している。城の西側には猪名川が流れ、背後には杉ヶ谷川によって形成された開拓谷を控え、西側と南側は台地の崖面を利用し、東側には堀を堀らせて、懇構を形成している。城域の北西端の最高所が本丸で、これまで数次にわたる発掘が実施され、礎石建物、虎口、石垣などが検出されている。なかでも本丸の中央で検出された幅7m、深さ2.5mを測る大溝は礎石建物を破壊して造られており、最後の遺構であることより、織田信長の古池田の本陣に関わる遺構と考えられる。

発掘調査では、少量ではあるが瓦が出土している。軒平瓦は中心飾りが9葉で、下から2本目が3反転する唐草文となる。三巴軒丸瓦は数種類の型式が出土しているが、いずれも巴の尾は長く、次の尾と接して圓線状となるものも認められる（註8）。これらは池田氏の最終段階頃のものと考えられる。

- ・芥川山城跡（大阪府高槻市原）

標高182.6mの三好山の山頂に築かれた山城で、北・西・南の三方には芥川が流れている。

『瓦林正續記』永正7年（1520）10月に「芥川ノ北ニ当リ可然大山ノ有ケルヲ城郭ニソ構ヘ」と記される、摂津の国人能勢氏の居城であった。天文2年（1533）には管領細川晴元が入城し、畿内政治の中心地となる。天文22年（1553）に三好長慶によって入れ置かれていた芥川孫十郎が謀反をおこすと、長慶は芥川山城の東方に位置する蒂仕山に陣を敷き、芥川山城を攻め落とした。その後、長慶自身が芥川山城に入り、居城とする。永禄3年（1560）に長慶が河内飯盛城に移ると、芥川山城は息子の三好義興が城主となるが、永禄6年（1563）に義興が急死すると、三好長逸が城主となったようであるが、永禄11年（1568）に織田信長が摂津に進攻し、高槻の天神馬場に陣取り、芥川山城を攻め落とした。信長は摂津三守護和田惟政を城主とする。惟政は後に高槻城へ移ると、芥

川山城には家臣の高山友照を入れ置いた。元亀2年（1571）に惟政が白井河原の戦いで戦死すると、息子惟長が高槻城主となるが、これを機会と、高山友照・重友が惟長を追放して高槻城に入り、芥川山城は廃城となった。しかし、近年の発掘で17世紀前半の遺物が出土しており、高山氏は高槻城の支城として維持していた可能性がある。

城の構造は、三好山の山頂に本郭を配し、南尾根筋に階段状に曲輪を配置する。この本郭部と谷を隔てて、東側の頂部に出丸と呼ばれる曲輪群が構えられ、さらに堀切を隔てて東側に方形区画された曲輪群が構えられている。東端は自然の谷筋が入り、帯仕山と完全に分離されている。

本郭と出丸間の谷筋が大手であったと考えられ、谷筋の中腹には谷を塞き止めるように巨大な石垣が構えられている。また、出丸の帶曲輪にも石垣が認められ、要所は石垣によって構えられたようである。

2次にわたる発掘調査のなかで、本郭の調査では礎石建物が検出されている。建物は束柱を伴っており、縁を廻らせた建物であり、山上に御殿的施設の存在していたことが明らかとなった。この建物から瓦は出土していない。

出丸の北側帯曲輪より三巴文軒丸瓦が1点採集されている。瓦は灰色を呈し、胎土は粗い。巴の尾は長く、次の尾に接して闇線状となる。珠文も密である（註9）。

・高槻城跡（大阪府高槻市城内町）

高槻城は三好長慶が芥川山城を居城としたときに支城として、入江氏が入れ置かれていた。

織田信長の摂津進攻後、摂津三守護のひとり和田惟政が芥川山城から高槻城を居城としたため、この頃より摂津支配の拠点的城郭として整備されたようである。惟政が白井河原の戦いで戦死すると、息子の惟長が城主となるが、芥川山城に居た高山友照、重友（右近）父子に追われ、高山父子が高槻城に入った。

豊臣政権下で、天正13年（1585）に高山重友が船上城に移されると、高槻は一時秀吉の直轄地となり、その後新庄直頼が城主となる。関ヶ原合戦後は徳川氏の直轄地となり、元和元年（1615）に内藤信正が入城すると近世城郭に大改修され、以後明治まで存続する。

その構造は本丸、二ノ丸を並立させて内堀で囲い込み、その外郭に三ノ丸を配置し、それらを外堀が囲むという輪郭式の網張りであった。

本丸の発掘調査によって石垣の基底部下より梯子桐木と呼ばれる石垣構築の基礎が検出され、近世城郭の石垣構築技術が明らかにされた。また、三ノ丸の外堀からは杭列と横木からなる護岸施設が検出されるなど、近世城郭の普請について多くの成果が得られた調査であった。

出土した瓦では、丸瓦凹部に糸切によるコビキ痕が斜位につくコビキA手法と、コビキ痕が水平につくコビキB手法をはじめて報告されている（註10）。出土した大量の瓦はI期からVI期に時期区分され、I期の瓦は入江氏在城時代末期から高山右近在城時代とされている。三巴文軒丸瓦の特徴は、巴の頭が小さく、尾が長く全体として渦巻状を呈している。珠文は小さく、22個を数える。

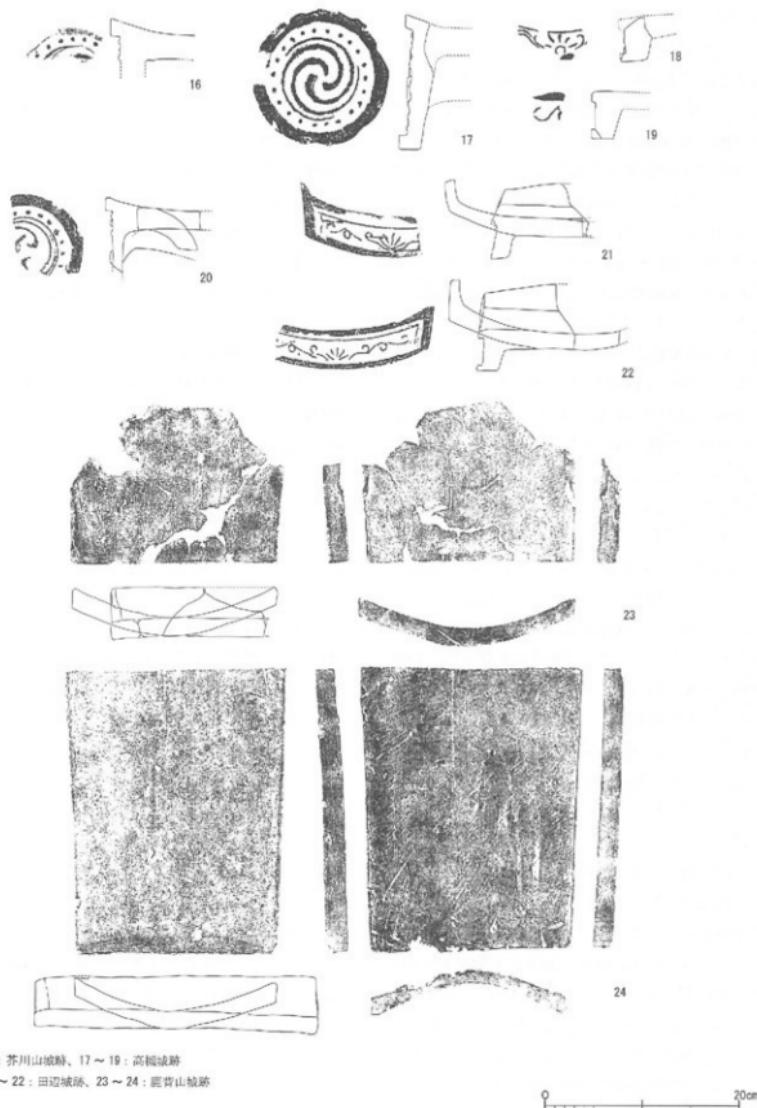
山城

・田辺城跡（京都府京田辺市田辺奥ノ城）

田辺城は、山城国一揆に登場する国人田辺氏の居城である。その築城年代などについては詳らかではない。

これまでに田辺町教育委員会、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって発掘調査が実施されている。特に1996年の京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した調査では矢穴技法によって割られた花崗岩を用いた石垣が検出されている。この石垣は楔形虎口に用いられていた。出土した遺物からこうした虎口や石垣が15世紀後半のものであることが確認され、大きな話題を呼んだ。

出土した軒瓦は小振りで、築地等に使われたも



16: 芹川山城跡、17～19: 高櫛城跡
20～22: 田辺城跡、23～24: 網吉山城跡

第2図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（2）

のと想定されている。軒平瓦は区画線が残り、三巴文軒丸瓦は圓線が残るという特徴より、15世紀後半の製作と考えられる（註11）。

・鹿背山城跡（京都府木津川市鹿曲田）

鹿背山城跡は標高141mの通称城山の山頂に選地しており、城跡からは眼下に木津川を望むことができる。

『大乗院寺社雜事記』には文明元年（1469）に興福寺六方の末寺である菩提院方分に鹿山の名が見え、同じく文明11年（1479）には一乗院の御祈願所として鹿山の名が、さらには成身院順宣が賀世山に出張したこともみえる。こうした記録より15世紀には寺院的施設が鹿背山にあったことがうかがえる。

文明11年（1479）には猪氏や成身院、佐川父子が大和中川寺に出陣したのに対して、木津駿行が加世山に退いたと記されており、木津氏に関わる城郭的施設も存在していたことが知られる。

その後『多聞院日記』永祿11年（1568）に多聞院の手の者たちが三好三人衆に追われてカセ山へ逃げ込んだと記されている。15世紀に興福寺によって構えられた城が、戦国時代には松永久秀による大和支配の北方防衛の出城として大改修が加えられたものと考えられる。

その構造は南北約300m、東西約450mを測る巨大なもので、南山城最大の山城である。並列する3つの頂部を本郭と副郭とし、四方に派生する尾根上すべてを階段状に曲輪を配置しており、先端部には堀切が設けられている。本郭の西側尾根先端部と南端の副郭の周囲には歎状空堀群が巡らされている。

国史跡指定を目的して近年継続的に発掘調査がおこなわれている。その本郭から15世紀のものと考えられる平瓦が出土している（註12）。

・勝龍寺城跡（京都府長岡京市勝竜寺）

室町時代には乙訓郡役所として機能していたと

考えられる。元亀2年（1571）には織田信長より桂川以西の一職を任せられた細川藤孝によって改修されたものが現在残されている遺構と見られる。

発掘調査によって中心部分は石垣によって築かれていることが明らかとなり、櫓形虎口も検出されている。また、大量の瓦が出土しており、石垣上の櫓や堀は瓦葺きの建物であったことがわかった。『東山殿御文庫記』に「殿主」で古今伝授のおこなわれたことが記されており、安土城に先行する天主の存在した城であることは特筆される。

出土した三巴文軒丸瓦は、巴の頭部が渦巻いて接しており、尾は長く次の巴の尾に接している。この軒丸瓦は坂本城跡、小丸城跡（福井県武生市）出土の三巴文軒丸瓦と同范であることが確認されている。

また、軒平瓦は中心飾りが5葉となり、その額部に半円形の圓線を設け、中心飾りは旭日のように、左右に四反転する唐草文が施されている。また、本丸山城跡や若江城跡からも出土している、宝珠文の鬼瓦も出土している（註13）。

これらの瓦も元亀2年（1571）の細川藤孝による改修に用いられた瓦と見られ、坂本城跡出土瓦と同范関係にあることより、織田信長配下の築城に同一人が動員されたことを示すものと考えられる。

大和

・多聞城跡（奈良市多門町）

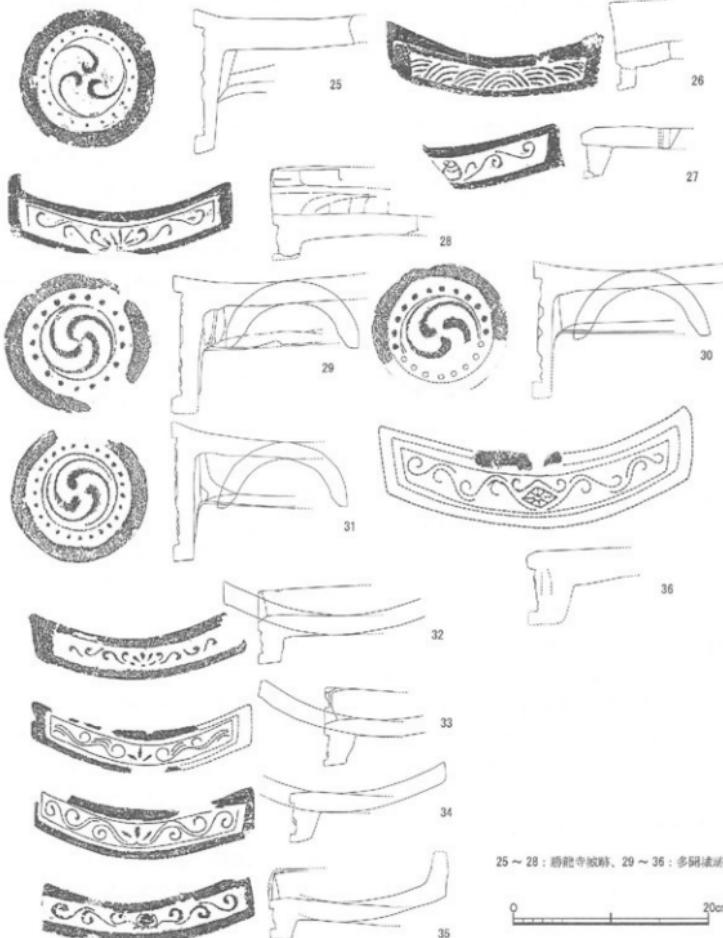
多聞城は永祿3年（1560）に松永久秀がその居城として築いた城である。久秀が織田信長に叛いて信貴山城で降伏すると、多聞城には明智光秀、柴田勝家が入城し、天正2年（1574）には信長が入城し、正倉院の蘭奢待を切り取っている。天正4年（1576）に筒井順慶が大和守護に任じられると、多聞城は破却された。

奈良市街の北方に位置する標高115mの小丘陵を利用して築かれた多聞城は破却されたうえに、

現在は中学校の校地となり、地形以外に城跡の遺構は認められない。ただ、宣教師の報告などから四重の建物をはじめ豪華な建物が建てられていたことが知られる。

また、発掘調査によって大量の瓦が出土してい

る。なかでも特徴が捉えられる軒平瓦について、山川均氏は南都の寺院の瓦そのものを転用した可能性は低く、多聞城の瓦として専用に製作されたものとし、大和の新たな霸者、松永久秀が旧来の寺社権門下の瓦工組織を解体・吸収し、新たに編



第3図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（3）

成した組織によって製作したものであったと想定している（註14）

こうした瓦について、ルイズ・アルメイダは「家及び塔は予が嘗て見たる中の最も良き瓦の種々の形あり又二指の厚さありて真黒なるものを以て覆へり。此の如き瓦は一度葺けば四五百年も更新する必要なし。」と記している。

・龍王山城跡（奈良県天理市柳本町）

龍王山城跡は大和の代表的な戦国時代の山城である。現在の権原市域に勢力をを持つ国人十市氏の山の城として築かれた。永禄5年（1562）頃に十市氏は松永久秀方に降り、以後松永方の城となる。天正3年（1575）には久秀の嫡男久通と十市おなへが祝言をあげ、龍王山城は実質的には久通の居城となる。しかし、天正5年（1577）に久通は久秀とともに織田信長に対して謀反を起こし、信貴山城で自害した。その後信長の手によって取り壊された。

城は標高585.7mの龍王山の山頂に築かれた南城と、標高521m地点に築かれた北城からなる別城一郭タイプの構造となる。

南城では本郭の一段下の帶曲輪で発掘調査が実施され、礎石建物や庭園の遺構が見つかった。この調査で少量はあるが瓦が出土している。瓦は丸瓦と平瓦しかなく、軒先瓦は認められない。瓦の詳細は不明であるが、コビキA手法が回部に残り、年代的には松永氏時代のものと考えられる。

本瓦葺きの建物ではなく、板葺きか柿葺きの屋根の棟に用いられた瓦の可能性が高い。

・立野城（奈良県生駒郡三郷町立野）

立野城は、信貴山の南東部に位置している。これは河内・大和の国境龍田越の要衝にあたる。周辺は大乘院方の国民である立野氏の本貫地であるが、立野城もその居城であったと考えられる。また、『大和志』には「信貴山城の子城が立野村に在る」とあり、松永久秀の信貴山城の南口を抑え

る出城でもあった。

城は4つの曲輪群から構成されているが、いずれもが尾根上に構えられ、個々の独立性が極めて高い構造となっている。

1974年度と1980年度の2次にわたって発掘調査が実施され、D地区と呼ばれる北東部の曲輪からは2時期の建物跡が検出され、瓦が出土している。

出土した軒丸瓦は三巴文瓦、軒平瓦は中心飾りを宝珠文とする唐草文瓦であった（註15）。おそらく松永久秀によって築かれた立野城に葺かれたものと考えられる。

・椿井城跡（奈良県生駒郡平群町椿井・下垣内）

平群谷に構えられた椿井氏の居城である。戦国時代には鳴氏の居城だったようである。

城は矢田丘陵の南端、標高318mの山頂に構えられている。その構造は北城と南城からなる別城一郭タイプである。南城には石垣が認められることより、北城と南城には構築に時間差が存在するようである。

瓦は南城から表採されている。現在知られている瓦は丸瓦2点、平瓦2点のみで、軒先瓦は認められない。丸瓦の凹部にはコビキA痕が残る。

龍王山城と同様に本瓦葺きの建物ではなく、板葺きか柿葺きの屋根の棟に用いられた瓦の可能性が高い。

近江

・坂本城跡（滋賀県大津市下阪本）

永禄11年（1568）に上洛する織田信長は南近江の守護六角氏の觀音寺城を落して、南近江を支配下に置く。さらに元亀2年（1571）には比叡山を焼き討ちし、そこで明智光秀によって築かれたのが坂本城である。

城は北国海道（西近江路）に面した琵琶湖岸に位置し、本丸は琵琶湖に突出し、内堀、中堀、外堀は琵琶湖と直結していたと考えられる。『兼見

卿記』には「城中天主作事以下悉披見也。驚目了。」とあり、安土城に先行して天主の存在していたことがうかがえる。また、小天主の存在も知られており、連立式の天主であった可能性が高い。

天正10年(1582)の本能寺の変後、秀吉軍に攻められ落城するが、直ちに丹羽長秀によって再建され、杉原家次、浅野長政が城主となるが、天正14年(1586)に大津城が築かれ、廢城となる。

城跡では数次の発掘調査がおこなわれている。なかでも本丸の一画に相当する湖岸の調査では焼土を挟んで2面の遺構面が検出されており、下層が明智光秀段階の、上層が丹羽長秀段階の遺構と見られる。

下層からは軒瓦に加え、鬼瓦や鰐瓦などを含む大量の瓦が出土している。II類とされる三巴文軒丸瓦は、20個の珠文を配し、巴の頭は満巻いて接している。また尾は長く次の尾と接している(註16)。このII類は勝龍寺城跡出土瓦、小丸城跡出土瓦と同範囲にある。特に元亀2年(1571)に織田配下として細川藤孝が築いた勝龍寺城跡との同范は両城の瓦製作に同一の工人が動員されたことを示唆しており興味深い。坂本城でも天主が築かれ、瓦が葺かれているということは、この築城には織田信長の強い関与が認められる。あるいは技術的には信長の工人貸与、または信長主導による築城で、そこに光秀が配置されたことも考えられる。

・小谷城跡(滋賀県長浜市湖北町伊部)

小谷城は北近江の戦国大名浅井氏3代50年の居城で、戦国時代を代表する山城である。天正元年(1573)に織田信長軍に攻め落とされると、浅井氏の旧領は羽柴秀吉に与えられた。秀吉は天正3年(1575)に完成する長浜城に移るまで、少なくとも2年間は小谷城を居城としていた。

城の構造は大きく小谷山の山頂部に構えられた大嶽地区、中腹の尾根頂部に構えられた本丸・大広間地区、出丸として築かれた月所丸、福寿丸、

山崎丸、金吾丸、出丸と、山麓の清水谷からなる。

さて、こうした小谷城の構造は浅井氏時代に築かれたものと考えられ、昭和45年度より実施された本丸、大広間の発掘調査でも16世紀後半の遺物が出土している。

瓦はこのときの調査で1点も出土しておらず、浅井氏段階では瓦葺き建物は存在しない。ところが山麓で実施された、ほ揚整備の際に備前焼の大甕とともに多量の瓦が出土したとのことである。発掘調査は実施されておらず詳細は不明であるが、地元に三巴文軒丸瓦1点と、丸瓦3点、平瓦1点のみ保管されている。

三巴文は頭部が接して、尾が長い。珠文は12個残存しており、おそらく16個めぐっていたと考えられる。坂本城跡や勝龍寺城跡出土の軒丸瓦に似るが、ややシャープさに欠け、これよりは後出するものと考えられ、羽柴秀吉が小谷城主の時代に葺かれた瓦と考えられる。丸瓦の凹部にはコビキA痕が残る(註17)。

播磨

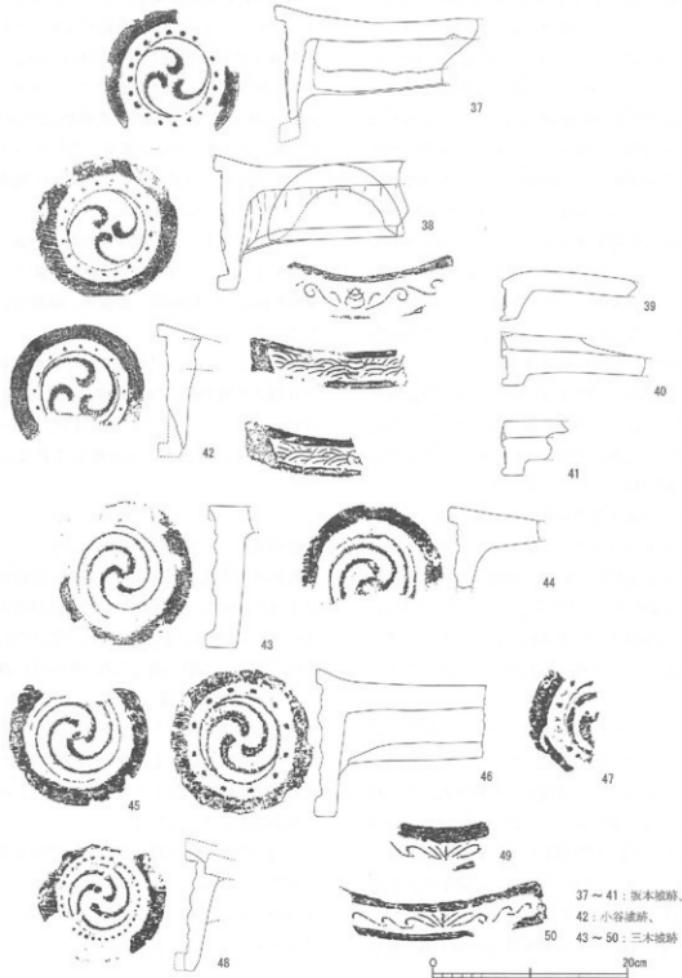
・三木城跡(兵庫県三木市上ノ丸町)

三木城の築城については詳らかではないが、別所則治によって築かれたとする説が有力である。以後別所氏の居城となり、永祿11年(1568)には織田信長の傘下となる。しかし天正6年(1578)に別所長治は信長方を離反し、毛利方となり、三木城に籠城する。これに対して信長軍は長大な包囲網を廻らせた攻城戦を繰り広げる。この戦いが有名な三木の干殺しである。

天正8年(1580)の落城後は城代が置かれていたが、天正13年(1585)に中川秀政が入城する。文祿3年(1594)に中川氏が豊後に移されると、豊臣氏の直轄地となり、城番が置かれた。慶長5年(1600)の閼ヶ原合戦後は播磨は池田輝政領となり、三木城もその支城となり、伊木長門が城主として入れ置かれるが、元和の一国一城令で廃城となる。

城跡は舌状台地の先端に築かれているが、現在地上に痕跡は残していない。これまで数次にわたる発掘調査が実施され、瓦が出土している。田中幸夫氏によつて、三木城跡出土瓦は4類に分類さ

れ、特に多く使われている軒丸瓦（1類）と、軒平瓦（3類）は当初基本として葺かれたものとされている。さらに近隣の寺院瓦との同范、同文関係より、1、3類は弘治から永禄年間（1558～



第4図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（4）

1570)に生産されたものであり、別所氏時代の三木城に瓦葺きの建物の存在したことを想定されている(註18)。

・置塙城跡(兵庫県姫路市夢前町宮置・糸田)
応仁の乱によって、播磨、備前、美作の旧領を回復した赤松政則によって、文明元年(1469)に築城されたと伝えられる。以後、赤松氏の居城となる。天正初年に赤松則房は羽柴秀吉の与力となり、棟ヶ岳合戦、小牧長久手合戦、四国攻めなどにも参戦するものの、阿波国住吉へ一万石で移封される。信長、秀吉政権に与するが、則房は強制的に播磨の支配権を奪われてしまう。天正8、または9年(1580、81)の「羽柴秀吉播磨国中城割り覚」(一柳文書)に、國中(播磨)の割るべき城の覚えとして置塙城が記されており、この段階で秀吉の命令によって破城された。

城は標高370mの置塙山(城山)の山頂に選地している。山頂の北東端部に詰城となる本丸を配し、堀切となる鞍部を隔てて二の丸、三の丸も広大な山頂部に構えられている。この二の丸、三の丸とそれに付属する帯曲輪からは発掘調査によつて、それぞれの曲輪ごとに礎石建物、庭園を伴つていることが判明している。曲輪は軍事的な施設ではなく、屋敷地として機能していたようである。つまり、置塙城では山上居住だけではなく、被官たちの屋敷も山上に構えられる、山上都市であった。

石垣も多用され、瓦も大量に出土している。出土鳥食瓦にヘラ描きで「甚六作」とあった。この甚六とは英賀を中心に活躍した姫路系瓦工人の橋国次の息子で、甚六の名で瓦に銘が刻まれるのは天文18年～弘治3年(1549～57)の間とされている。また、I-1郭出土瓦は天正期前後に想定されており、これらは織田、豊臣系の瓦ではなく、姫路系瓦工人の橋氏による播磨独自の瓦と考えられる(註19)。

・御着城跡(兵庫県姫路市御国野町御着)

永正16年(1519)に赤松氏の一族である小寺政隆によって築かれたと伝えられる、小寺氏の居城である。

羽柴秀吉の播磨侵攻後、小寺政職は一時織田方に与したが、後に別所氏や荒木村重とともに織田方を離反する。天正7年(1579)に秀吉は播磨の諸城を攻め、御着城は落城する。天正8、または9年(1580、81)の「羽柴秀吉播磨国中城割り覚」(一柳文書)に、國中(播磨)の割るべき城の覚えとして御着城が記されており、この段階で秀吉の命令によって破城された。

発掘調査によって二重の堀の廻る平城の構造が明らかとなっている。出土遺物も豊富で、貿易陶磁や備前などの陶磁器、木製品、漆器などが出土している。

また、瓦も大量に出土している。本丸北トレーンチ瓦溜めの資料は共伴した備前焼から15世紀半ば以前のものとされている。また、井戸1上層の瓦は御着城最盛期の瓦と推定されている(註20)。

・豊地城跡(兵庫県小野市中谷町)

豊地城は東条川に面した標高68m付近の河岸段丘上に立地する。東播磨の有力な武将である依藤氏によって戦国時代に築かれたと伝えられ、永禄年間(1558～1570)頃に三木の別所氏に滅ぼされると、別所重棟が城主となる。天正8年(1580)頃には廢城となったようである。

2009年度に実施された発掘調査により、幅12m、深さ2.5mの巨大な堀が検出され、堀内より大量の瓦が出土している。

三巴文軒丸瓦の巴は頭が接し、尾は長く次の尾に接し、圓線状をなす(註21)。これらは天正8年以前の瓦であり、別所重棟が豊地城に入城して葺いたものと考えられる。

- 恒屋城跡（兵庫県姫路市香寺町恒屋）
恒屋城は赤松氏の被官恒屋氏の居城であるが、築城年代については詳らかではない。城は標高236mの常居山に築かれている。その構造は北端

の最高峰に構えられた後城と、南端に構えられた前城という別城一郭タイプとなる。いずれも階段状に曲輪を配するが、両城ともに西側斜面に畝状堅堀群を構える。山麓には、お屋敷、姫屋敷と呼



51~54: 三木城跡、55~63: 姫屋城跡

第5図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（5）

ばれる居館が残る。

この恒屋城跡からは軒丸瓦、鳥衾、軒平瓦、鬼瓦が採集されている。通路部分より採集されていくことより、堀や城門に葺かれていたものと考えられる。以前は戦国時代に瓦は存在しないという前提で、これらの瓦は姫路藩時代のものではないかと想定されていた。現在瓦は北恒屋自治会に所蔵されている。

軒丸瓦は銀杏葉文とされているが、家紋の銀杏には当てはまらない。最も似る紋としては抱苦荷紋に近い。軒平瓦は中心飾りが三巴で、左右に四反転飛び唐草文が配されている。鬼瓦には舌を出した亀の背に小槌を乗せるという特異な姿が中心に配されている（註22）。

置塙城跡と同じくこの瓦は織田、豊臣に関わるものではなく、戦国時代に播磨独自で発達する瓦と考えられる。

考察

このように安土城に先行、併行する城郭の瓦を分析すると、大きく二つの系譜が見えてくる。

ひとつは織田信長と関係する城郭である。勝龍寺城跡、坂本城跡出土瓦は元亀2年（1571）に築城された段階のもので、瓦工人は信長の貸与と考えられる。小谷城跡の瓦も勝龍寺城跡、坂本城跡出土瓦にやや後出するもので、天正元年（1573）の秀吉による再建に伴う瓦と見られる。これらは信長が永禄10年（1567）の岐阜築城により瓦を用いた後、安土築城までの間に収まるものであり、大きな意味で信長の築城として捉えることのできる城であり、その築城には信長の意思が大きく働いていた。

今、ひとつの系譜は在地の瓦であるが、ここには先進地として瓦が導入された城郭と、先進地であるとともに特定の大名に関わって瓦が導入された城郭がある。これらは信長との関係が認められないもので、先進地としての瓦は河内私部城跡、津田城跡、本丸山城跡、攝津有岡城跡、池田城跡、

高槻城跡、山城田辺城跡、鹿背山城跡、大和椿井城跡、播磨三木城跡、置塙城跡、御着城跡、豊地城跡、恒屋城跡である。これらは人和や播磨の瓦工が関わったものである。

特定の大名に関わる城としては、河内若江城跡、烏帽子形城跡、飯盛城跡、攝津芥川山城跡である。これらの諸城は三好長慶、義維が城主となっており、長慶が城郭に瓦を導入したと考えられる。また、大和多聞城跡、龍王山城跡、立野城跡は松永久秀の居城や支城であり、特に多聞城跡出土瓦には寺院の瓦とは違い、城郭専用の瓦が用いられている。

なお、若江城は後に信長の本陣に、烏帽子形城は後に中村一氏が、飯盛城は後に信長の城となり、有岡城の荒木村重は信長方となり、池田城は信長の本陣となっている。あるいは信長方になってから葺かれた可能性も残る。

しかし、いずれにせよ信長との関わりを一切見いだせない城跡は確実に存在しており、それらは古代以来の瓦の生産地に近く、そうした寺院の瓦を城郭に導入したことはまちがいない。

確かに近畿地方では巨大な山城は築かれるものの、発達した城郭構造は認められない。しかし、石垣や瓦はいち早く導入される。つまり軍事的には武田氏や後北条氏といった戦国大名の築城技術には劣るもの、石垣や瓦といった技術は古代以来の寺社造営技術が城郭に導入されたのである。そうした意味では近畿の先進地としての城郭の特徴として瓦葺き建物が存在したのである。

私部城跡出土の瓦もこうした近畿の先進地の城郭として評価できる。

IV おわりに

さて、拙稿では私部城跡を構造と攻城戦からと、出土した瓦から分析を試みた。とりわけ安土城に先行する瓦に焦点をあてて、広く近畿地方の瓦が出土した城館跡を集成して分析した。その結果、私部城は安土城に先行して瓦を城に導入した、先進地の城郭であることが明らかにできた。

構造面では、大阪府においては平地に残る極めて貴重な城跡であることが改めて確認できた。しかし、一方では城跡付近にまで開発がおよんでおり、危機的な状況となっている。今後、国史跡に指定され、末永く保存されることが望まれる。大阪府では河内長野市で鳥帽子形城跡が実に 79 年ぶりに中世城館跡として国史跡に指定されている。私部城跡がそれに続くことを望みたい。

註

1. (財) 大阪府文化財センター 2011『私部南遺跡Ⅲ 有池遺跡・上私部遺跡・上の山遺跡』
なお、交野南遺跡からこの規跡が検出されていることは、交野市教育委員会の吉田知史氏からご教示を得た。
2. 小川暢子 1995『私部城跡 - 発掘調査概要報告書 1-』交野市教育委員会
3. 吉田知史 2014「大阪府枚方市津田城（本丸山城）」『城郭談話会 30 周年特別例会「一人一城」レジメ集』
城郭談話会
4. 馬部隆弘 2004「津田城 - 付、本丸山城」『図説近畿中世城郭事典』城郭談話会
5. 東大阪市立郷土博物館 2005『なごの城 - 発掘調査からみた若江城 -』
6. 太田宏明他 2011『河内長野市指定史跡鳥帽子形城跡総合調査報告書』河内長野市教育委員会
7. 鈴木充徳 1977『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ』伊丹市文化財保存協会
8. 田上雅則 1991『池田城跡 - 主郭部発掘調査概要報告書 2-』池田市教育委員会
9. 橋本久和 1994「V 芥川山城跡」『山上遺跡群 18』高槻市教育委員会
10. 森田克行 1984『揖津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
11. 石尾敏信 1996「田辺城跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第 62 号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
12. 中島正 2010「鹿背山城跡第 1・2 次発掘調査概報」『木津川市内遺跡発掘調査概報Ⅱ』木津川市教育委員会
13. 岩崎誠也 1991『勝龍寺城発掘調査報告』(財) 長岡京市埋蔵文化財センター
14. 山川均 1996「城郭瓦の創製とその展開に関する論文」『織豊城郭』第 3 号 織豊期城郭 研究会
15. 中村博司 2014「安土築城以前の瓦」『中世城館の考古学』高志書院
16. 吉水眞彦 2008『坂本城跡発掘調査報告書』大津市教育委員会
17. 中井均 1994「小谷城跡出土の瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
18. 田中幸夫 1994「三木城出土瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
19. 山上雅弘他 2006『播磨置塙城跡発掘調査報告書』夢前町教育委員会
20. 秋枝芳他 1981『御着城跡発掘調査概報』姫路市教育委員会
21. 兵庫県立考古博物館 2010『ひょうごの遺跡』75 号
22. 伊丹市立博物館 1979『第 10 回特別展 荒木村重と伊丹城』

第5章 文献史料からみた私部城

小谷 利明

I 室町・戦国期の私部郷

1、私部城の築城時期

私部城が文献に現れるのは、元亀元年（1570）のことである。永禄11年（1568）織田信長が足利義昭を伴って上洛し、室町幕府を再興してから2年後のことである。私部城主は安見右近允（丞）（以後、安見右近と略す）と言い、この翌年、松永久秀の命で奈良市中の西新屋で切腹し、それに続いて久秀は右近の居城であった私部城を攻めた。右近の城は、「片野」（史料102、105）「カタノ」（史料106・109）と呼ばれ、或いは「キサイヘノ城」（史料112）とも呼ばれた。交野は広域地名であり、私部は一村落を指す言葉である（馬部09）。ここでは、限定された地域名称である私部城で統一して叙述する。

私部城の築城時期については、私部城主安見右近周辺の史料から三説が提示されている。片山長三氏の南北朝期説（片山63）、中西裕樹氏の織田信長上洛以前説（中西04）、馬部隆弘氏の織田信長上洛後説（馬部09）の三説である。片山説は、私部城主安見氏について近世に成立した「安見氏系譜」から復元したものである。それによれば、安見氏は南北朝期に南朝方の安見清賢、清儀が出て、交野郷軍39士の1人として数えられる活躍をし、私部城もこの時期に築城されたという。また、戦国期には安見美作守直政が河内一国を支配する権力となり、三好長慶と対立し、交野以外の地を失った。その後、信長上洛後の石山合戦では、信長方として活動するが、私部城で病没したとする。片山説は長く通説を守った。しかし、弓倉弘年氏が戦国期の安見氏を給文書を検討し、安見美作守の実名は宗房であり、直政ではないことや、安見氏の存在は戦国期以前の史料にはみられ

ず、その出自は明確ではないことを指摘した（弓倉06）。これに加え拙稿は、鷹山弘頼とともに遊佐長教から山城上三郡守護代職を得て登場することから大和の鷹山氏との関係が重要であることを指摘した（小谷03）。片山説は、私部城主安見右近と安見美作守を混同し、近世に作成された系図を利用するなど今日の研究レベルから見ると、大いに問題のある議論であった。

弓倉氏及び拙稿が公表された後に、私部城築城期を説明したのが中西氏と馬部氏の研究であった。中西説は、信長上洛前に飯盛城将として活躍した安見宗房との関係を考慮して信長上洛前から私部城の存在を推測したものである。馬部説は、安見右近の本拠は星田であることを根拠に、私部を掌握したのは信長上洛以後とした。

以上、築城時期については、確実な築城史料がないため、いずれも推測の域を出でていなかった。しかし、発掘調査成果から永禄期以降（1558～1570）ごろの築城と考えられている。永禄期は、守護畠山高政から三好長慶の支配へと大きく変化した時であり、長慶死後、三好三人衆と松永久秀が争い、更には織田信長の上洛により畿内の秩序が大幅に変わった激動期でもある。直ちに、築城主体を考えることは難しいため、ここでは、私部地域の歴史的特質を紹介し、永禄期の北河内の状況を展望し、私部城が文献に登場する歴史を叙述したい。

2、室町期の石清水八幡宮と私部郷の在地領主大塚兵衛

私部城の具体的な検討に入る前に、中世における交野地域の特質について説明しておきたい。交野地域で成立した庄園のなかで最も古いものは、石清水八幡宮領の交野郡三宅山である。その初見は延久4年（1072）9月5日付太政官牒（史料1）である。この文書は、延久の莊園整理令に際して出された文書で、石清水八幡宮領庄園全34箇所に対して21箇所が安堵され、13箇所が収公された。この内、三宅山は安堵された庄園のひとつであった。三宅山は、山1400町、御倉町井館院等内地6町、免田23町という広大なもので、山の領有は、同文書が引用する延喜17年（917）12月21日付の交野郡司解状によれば、交野郡前擬大領であった守部平麻呂、同慶道らが太政官符を得て領有したものであった。また免田については、同上文書が引用する天暦4年（950）3月20日付の河内国司解状が石清水八幡宮三宅御山司佃20町正税を官雜事に充用いることを認めたとされ、この時点で三宅山が石清水八幡宮領であったこともわかる。三宅山は、交野郡三宅郷に由来する地名で、交野市の南東部の丘陵すべてが入るという。また、山地中に残る傍示の地名は、三宅山の傍示と考えられている（『大阪府の地名』平凡社）。この理解によれば、少なくとも私部村の丘陵部もこれに入ることになる。この庄園は、保元3年（1158）12月3日付の官宣言（史料3）にも存在が確認できる。

次に私部の南に位置する星田には、興福寺円成院領星田庄があった。その初見は、保元元年（1156）10月13日付の播磨守平清盛書状である（史料2）。これによると、星田庄は「故院御時」の御沙汰では「御牧」内ではなかったとする内容で、鳥羽院政期（1129～1156）に立庄されたと見られる。その後、鳥羽院の寵妃美福門院領御祈祷所となり、円成院の仏聖料所となった（史料4）。ところが、

文中元年（1372）9月16日付長慶天皇諭旨によって大交野庄内星田郷国衙分が石清水八幡宮毎日御供料所として寄進され（史料6）、以後、星田国衙分は石清水八幡宮領となる。この大交野庄は、当初、興福寺円成院領で、天福元年（1233）5月日付石清水八幡宮所司等言上状では、石清水八幡宮領として登場してくる（史料5）。大交野庄と星田庄との関係はよくわからないが、興福寺円成院領から石清水八幡宮領へと石清水八幡宮支配が伸長したことをたどることができる。

以上、三宅山を中心として石清水八幡宮領が拡大したことを見てきた。再び、私部に戻ると、永享5年（1433）8月15日付石清水八幡宮駕輿丁前床神人交名に「下私部」の地名があり、ここから4人の人物が神人となっていたことが記されている（史料7）。三宅山と「下私部」との関連が想定されよう。

また、私部郷には朝廷・幕府と結び付いた臨済宗東福寺派光通寺の存在がある。光通寺の開山は別峰大休（1321～1402）で、赤松円心（1277～1350）と深いかかわりがあり、後村上天皇（在位1339～1368）から円光國師の号を賜った人物である。別峰は、大和興聖寺、伊勢清水寺、播磨臨済寺、備中定林寺、河内光通寺、紀伊西光寺を創建し、応永9年（1402）に河内光通寺で没した（『大日本史料』応永9年8月2日条）。光通寺はその後も勅願所として機能しており（史料9）、また、応永18年（1411）には、足利義持により將軍家祈禱寺になった（史料8）。石清水八幡宮とは別の宗教権力が私部で成長したのである。

この二つの宗教勢力の下で在地勢力による石清水八幡宮への反領主闘争が行われたことを示唆する事件が起こる。永正15（1518）年4月22日付室町幕府奉行人連署奉書では、石清水八幡宮造営要脚として交野郡内に1000貫文を懸け、また用木を伐採するため人を遣わしたところ、私部郷地下人が承引せず、社家使と争った（史料10）。また、大永8（1528）年8月11日付室町幕府奉行人奉

書によれば、石清水八幡宮と光通寺が対立していることがわかる（史料 12）。そこには「去々年以來衆僧悪行に依り、寺家並びに神領亡所となすと云々」とあり、光通寺の僧により石清水八幡宮領が押領されたとする。

ここで注意を要するのは、光通寺という勅願所を維持するためには、有力な権越を想定しなければならない。そして有力な権越らが、石清水八幡宮支配から自立しようとしたことが上記した事件につながった可能性がある。それでは、私部郷の在地領主は誰に想定できるだろうか。その答えを考えるに当たって、重要なと思われるのが大永 5（1525）年 7 月 4 日付室町幕府奉行人連署奉書である。これによれば、石清水八幡宮は、遷宮のために「河州交野大塚兵衛」に対して要脚 3000 貫文が宛てられている（史料 11）。この賦課に対して大塚は、200 貫文を支出すると主張したが石清水八幡宮は納得せず、幕府奉行人連署奉書を以て細川高国及び河内守護代遊佐順盛に催促をさせている。個人に対して 3000 貫文もの錢が賦課されたことは、大塚が交野の在地領主として大きな力を持っていたと推測できる。前記した永正 15 年の造営要脚では交野郡全体で 1000 貫文が賦課されたのに対して、個人宛で 3 倍もの賦課が懸つたことになる。1 貫文 = 1 石とすれば、大塚は 3000 石も支出を命じられたことになる。軍役で見ると、150 人程度の軍事動員ができる領主と言える。しかも、豊臣蔵入り段階の私部村の村高が 1017 石余ほどの石高である。年貫は、その 3 割から 4 割ぐらいだろうから、とんでもない賦課が懸つたといえよう。いずれにしても、3000 貫文の賦課から見て、大塚兵衛は交野庄全体を統括できるほど在地領主と判断できよう。大永 8 年の光通寺と石清水八幡宮との対立は、大塚兵衛への賦課から 3 年後のことであり、この事件と連続していると見られる。

後記するが、永禄 11（1568）年 2 月 5 日付篠原長房賦は、鷹山藤寿に対して私部郷内の鷹山知

行關所分を書き上げている（史料 96）。それには「大塚分、南分、源左衛門尉分、道宗分、坂長分、地下分」とあり、前述した大塚氏を筆頭に何人がの侍衆と地下分を鷹山氏が支配していたことがわかる。彼らはある段階で鷹山氏の被官となったため、このような記述となったと思われる。鷹山氏が私部に入ったのは比較的新しい。それ以前は、石清水八幡宮の神領支配を受けながら、石清水八幡宮被官であった大塚氏を中心に私部郷の秩序が成り立っていたと考えられる。やがて、大塚らは、石清水八幡宮支配から脱するために武家権力の下で自立したと見られる。後記する交野一揆の構成員の中心は彼等だろう。

3、牧・交野一揆と鷹山弘頼

私部城築城の意義のひとつは、北河内に築城された城であることである。元々、河内で守護所が置かれた場所は、鎌倉末に丹南、南北朝期に古市、応仁の乱前後に古市・若江、応仁の乱後の鷲田・正覚寺、16 世紀初頭に高屋など、ほとんどが南河内にあり、例外は中河内の若江だけである（小谷 03）。当然ながら、それ以外にも城郭はあるが、一時的に活用される城であり、恒常に武家権力が地域支配をするための城ではなかった。しかし、享禄 4 年（1531）に木沢長政が飯盛城を築城すると天文 5 年（1536）には畠山在氏の守護所となり、守護による地域支配の拠点のひとつとして北河内が重要な位置を占めるようになった。これは、鎌倉時代以来、河内の国衙系武士が南河内を中心に編成されており、南北朝から室町期の守護がこれら武士との主従関係を結ぶことで統治しようとしたからである。特に北河内は河内十七ヶ所など広大な幕府御料所があり、守護支配が貫徹できない地域であった。飯盛城が織田信長上洛後にいつしかその機能を失ったのに対して、私部城は北河内の中心城郭に成長する。北河内で、例外的に守護内衆として活躍したのが、牧郷の野尻氏であった。

野尻氏は牧郷の犬田城で活躍するなど、戦国末までこの地域で重要な役割を果たした。牧郷と私部を含む交野地域は、運動しながら展開していった。牧・交野一揆への関心は重要である（馬部 09）。ここでは、まず、私部地域が河内のなかで重要な地位を占めるようになった時期から説明していきたい。

前述したように北河内が政治的中心地のひとつになったのは、木沢長政の飯盛城の築城からである。木沢長政は、義就系守護畠山在氏の守護代として、また、京都で霸権を得た細川晴元の内衆として幕府内でも大いに力を発揮した人物であった。また、長政は大和守護とも言われた。しかし、木沢長政は、幕府内部の対立に敗れ、天文 11（1542）年 3 月 17 日に河内太平寺の戦いで戦死してしまう（史料 16）。これを討ったのは、紀伊に本拠を置いていた政長系守護畠山植長や高屋城にいた遊佐長教及び山城・浜津勢などの武士を組織した細川晴元勢などであった（史料 13・14）。この時、牧・交野一揆が活動した兆候がある。南山城の猪孫一は、「牧・交野」に対して軍事動員を行った（史料 15）。木沢長政が築いた北河内の地域支配は、南山城の国衆と牧・交野一揆を結び付けた可能性がある。

天文 11 年の太平寺の戦いで木沢長政は戦死したが、まだ飯盛城には畠山在氏が健在で、飯盛城は落ちていなかった。このため、河内に復帰した畠山植長は、同じく木沢方だった和泉の松浦氏攻めと飯盛城攻めを同時に立案する。和泉には、植長自身が出馬し、飯盛城には大和勢を宛てた。大和勢の中心は筒井順昭と中坊駿河守であり、また、別に鷹山弘頼が交野に出陣して飯盛を攻める段取りになっていた（史料 17）。鷹山弘頼が陣を敷いた交野とは、地理的関係や前述した篠原長房試から見て私部を指すと考える。鷹山は、傍示越で私部となががっており、隣接しているのである。弘頼の私部在陣とその後の飯盛城攻めは、私部が河内の政治史に登場する最初の出来事と言えよう。

ここで、筒井氏と鷹山氏について簡単に説明しておこう。筒井氏は応仁の乱の畠山政長の時代から大和の大将として同盟関係にある間柄である。鷹山も筒井氏同様、官符衆徒と呼ばれる大和武士団を率いる武士のひとりだったが、この時、河内守護代遊佐長教の誘いに乗って畠山家中に入り、その立場を大きく変えた人物である（史料 13）。天文 13 年には、鷹山弘頼は河内勢 300 人余を率して大和で活動するなど、河内で軍事動員権を持つ権力に成長している（史料 21）。弘頼が動員できた河内の武士はどの地域の武士だったのであろうか。前述したように、鷹山氏は私部郷に所領を持っていていたことがわかつており、このため、交野郡内から 300 人の兵を動員できたと考えるべきだろう。牧郷には 500 人の武士を動員できる野尻治部がいた（史料 22）。野尻氏は、応永 16 年（1409）から畠山内衆として活躍していることが確認できる者で、畠山氏の分裂後は、一貫して政長流畠山氏に属した。本拠は、牧郷と考えられる（小谷 03）。野尻治部が盛んに活動していることがわかるのは、木沢長政の死後であるため、飯盛城を築いた義就流の畠山在氏守護代木沢長政の活動によって野尻治部の活動は制限されていたと思われる。長政の死後、牧・交野一揆への軍事指揮権は野尻と鷹山が担った。このため、牧・交野一揆に対する軍事指揮権は、猪孫一から野尻治部と鷹山弘頼へと移ったとみるべきであろう。

天文 14（1545）5 月 16 日に畠山植長が病没すると、河内守護代遊佐長教の全盛となり、天文 15 年 8 月以降、長教は細川氏綱を旗頭に幕府と戦いはじめめる。弘頼は、天文 15 年の芥川城の三好長慶との戦いで、畠山氏の主力として戦っており、極めて重要な地位にあった（史料 23～26）。このころ、弘頼は安見宗房とともに山城上三郡守護代職を遊佐長教から宛行われ、南山城、北大和、北河内を支配する権力に成長した（史料 19・20）。天文 17（1548）年 5 月 10 日、遊佐長教と三好長慶が同盟し、以後、両者は幕府に叛き、畿

内を支配する権力へと成長していく。そのなかで、鷹山以下の役割も大きく変わっていくことになる。

4、鷹山弘頼と安見宗房の対立

天文 20（1551）年 5 月 5 日、河内守護代遊佐長教が暗殺された（史料 27）。これによって、河内は、下郡代で飯盛城にいる安見宗房と、上郡代で高屋城にいる萱振賢維が霸権を争うようになる。いつの間に安見宗房は、下郡代で飯盛城将としての地位を得たのであろうか。天文 10 年代までは宗房よりも弘頼の活動の方が記録に多く登場しており、北河内の軍事指揮権は弘頼に任せていたと見られる。しかし、山城上三郡守護代職は共同で得ており、弘頼を中心で宗房が補佐する体制が出来ていたと考えられる。このため、弘頼も飯盛城将として飯盛城にいたが、いつしかふたりの関係は逆転したものと考えるのが妥当だろう。畠山在氏が籠った飯盛城攻めは、天文 12 年 1 月まで継続し、この時に落城しているから（史料 18）、これ以後、ふたりは飯盛城将であった可能性が考えられよう。一方、高屋城内には、萱振賢維をはじめ、牧郷の領主野尻治部、中小路、丹下など主だった畠山内衆が居住していた。飯盛城は、木沢の乱後に新たに取り立てられた勢力に入る城と位置づけられたのであろう。

天文 21 年 2 月 10 日、安見宗房は大事件を起こす。宗房は萱振賢維を飯盛城に招待し、そこで賢維を殺害してから高屋城に乗り込み、萱振と同心した者を打ち殺す惨劇を起こしたのである（史料 28・29）。宗房と賢維は、遊佐長教後の河内支配をどちらが把握するかで対立していた。特に目立つのは、長教後の遊佐家督を誰にするかであった。宗房は、遊佐太藤を河内守護代に推し、上郡代の萱振賢維は、根来寺の松坊（杉坊か、長教弟）を推した。両者の対立は抜き差しならないものになっていた。しかし、安見の息子を萱振に婿入り

させ、両者は表面上、和睦したかに見えたが、宗房の陰謀でこのように決着したのである（史料 29）。また、北河内最大の戦国領主野尻治部は、半死半生の状態で逃げている。その後、野尻は牢人として招提寺内に入った（小谷 03）。これに対して宗房は、自身の嫡男に野尻氏の名跡を継がせ、野尻満五郎と名乗らせ牧郷を掌握した（史料 41～44）。併せて安見自身、高屋城衆まで動員できるまでの権力となり（史料 30）、京都においても一定の力を保持する権力となった（史料 32）。天文 22 年 7 月から 8 月に起きた細川晴元による蜂起で、三好長慶の居城芥川城を預かる芥川孫十郎が晴元と同調した事件が起こる。京都に迫った晴元は、將軍足利義藤（義輝）と和し、長慶を追い詰めた。この時、長慶を応援し、京都攻めや芥川攻めを行ったのが安見宗房であった。彼は三好長慶との同盟関係を重視し、河内勢を使って縦横無尽の活躍をしたのである（史料 37～39）。

さて、萱振一派蕭条後の河内の体制維持のため、天文 21 年 9 月には畠山高政が守護に擁立される（史料 31）。この擁立は、畠山氏の守護家の家臣丹下盛知によって実現した。鷹山弘頼は、この時、畠山高政方として行動していたようで、畠山家中は、畠山高政派と遊佐太藤・安見宗房派に分裂した。天文 21 年のものと思われる 10 月 17 日付の鷹山弘頼宛ての畠山高政書状は、安見宗房と鷹山弘頼が対立したことを示す内容で、しばらくは弘頼に在庄することを促している（史料 33）。弘頼の在庄とは、本拠である鷹山だったのか、河内の本拠といえる私部だったのか知りたいところだが、よくわからない。但し、後の息子藤政の活動を見ると、この在庄は私部の可能性が高い。その後、鷹山弘頼は、天文 22 年間 1 月頃、高屋城に入城した兆候がある。十河一存は、弘頼の音信を受けて「幾重も高屋御入城之儀肝要存候」とあり、弘頼の入城が予定されていたことを示す内容の書状を書いている（史料 34）。しかし、翌天文 22（1553）年 5 月 4 日、弘頼は高屋城で自刃した（史

料35・36)。天文23年と思われる正月25日付丹下盛知宛畠山高政書状には、「鷹山の事、太藤今に憤るの由、誠に笑止の儀に俟」とあり、鷹山氏に対して太藤の憤りが收まらないことを伝えている。太藤は、鷹山氏家督継承についても尋ねているが、高政は軍役を果たせば知行は安堵することを明言している(史料40)。

弘頼の息子鷹山藤政の活動が見え始めるのが弘治2年(1556)6月からである。大和国の万歳と布施が対立し、安見宗房は万歳を支援するために大和に出陣した(史料45~47)。この時、藤政は、「河内ヨリハウシヲ焼払」とあり、河内から挙兵して傍示を攻めている。傍示は、私部と鷹山の中間に位置する村である。藤政の挙兵は、畠山尚誠とともに行動を起こしたもので、反安見・反畠山の行動であった。これには筒井氏も同調した。藤政の挙兵は、私部から傍示に向かったと推測できる。このことから父弘頼の死後、藤政は、私部を本拠に活動していたと判断される。

なお、その後、鷹山藤政の動向はよくわからぬ。恐らくは、私部・鷹山とともに安見宗房によって没収されたと考えるべきだろう。永禄2(1559)年6月、三好長慶は、安見宗房を討つため、河内攻めを行った。大和では松永久秀が筒井藤勝(順慶)の筒井平城と鷹山を攻めている(史料55~59)。藤勝は、前年に安見宗房を仲介として遊佐太藤の甥となり、畠山氏に帰参していた(史料48~53)。鷹山は宗房領であったのであろう。この時、鷹山は焼き討ちされた。高山八幡宮本殿は元亀3年(1572)の棟札があり、この時の焼失により再建されたのかもしれない。

小括

ここで簡単にまとめておこう。私部郷は、石清水八幡宮の支配を受ける地域であったが、相当な課役賦課を受け、在地領主大塚兵衛らは経済的圧迫を受けていた。光通寺と石清水八幡宮との対立もこのような背景があったと考えられる。

北河内の武士を軍事編成した最初の人物は木沢長政であろう。木沢の乱の時、牧・交野一揆を指揮したのは南山城の臼杵氏で、その後、鷹山氏と臼杵氏がそれを継承した。木沢段階で私部を含む交野は、武家領化したと考える。「牧・交野一揆」と史料に出てくるのは、このためである。

更に、鷹山弘頼は畠山家中に入り、飯盛城攻めや芥川城攻めの主力となり、私部郷を知行した。弘頼は大塚氏をはじめ、主だった交野庄の侍層を押さえ、畿内の戦乱の中心的勢力として活動はじめたのである。私部城の前身となる鷹山氏の居館がこの時期造られたものと考えられる。

鷹山弘頼は、安見宗房とともに飯盛城将として活動するが、萱振賢継肅清後は、高屋城将として畠山高政を護る立場となった。しかし、安見宗房や遊佐太藤との対立に敗れ、高屋城で自刃した。その後、息子の鷹山藤政は私部を本拠として活動した。

II 安見右近と私部城

1、安見右近の登場

三好長慶は、永禄2（1559）年6月と永禄3年6月に河内に出兵し（史料62～65）、永禄3年10月24日には飯盛城が、27日には高屋城が長慶に明け渡された。そして、長慶が飯盛城に、長慶弟実休が高屋城に入った。これに対して畠山高政や安見宗房は、永禄5年2月から軍事行動を開始し（史料70・71）、3月5日には和泉久米田寺の合戦で三好実休を戦死させ（史料72・73）、高屋城を押さえた。すると安見宗房らは飯盛城攻めを開始する。また、摂津衆などを引き連れた三好義興らが、5月20日の河内教興寺の戦いで畠山方の湯川直光を戦死させ、飯盛城攻めていた畠山勢は総退却となった（史料74～76）。この時、安見宗房は、大坂に逃げ、息子の野尻孫（満）五郎は、鷹山谷へ退いたとする史料がある。

このように、畠山氏の河内支配が三好氏によって奪われる頃、安見右近の姿が見えるようになる。それは、本願寺蓮如末子実従が残した日記『私心記』に登場する（史料60・61・66・68・69）。実従は永禄2年11月30日に大坂本願寺から河内枚方順興寺に移住した。右近の動静がわかるのは、その後からである。永禄2年12月20日条では、安見が枚方寺内の家を差し押さえようとしている（史料60）。これを從来、安見右近と解釈している（草野04、鎌代08、馬部09）。この時期は、まだ河内は畠山氏の支配下にある。また、翌年1月3日条では、安見与助が枚方に宿を持っていることが判明する（史料61）。与助は右近の同族と考えられる。

永禄3年10月、河内は三好氏の手に落ちた。三好長慶が飯盛城主となり、河内北半国を支配した。ところが翌年の永禄4年1月17日条には安見右近が星田に居ることがわかる。右近は、星田を支配していたのである（史料66・史料98）。ま

た、畠山高政及び安見宗房没落後も右近は健在であった。恐らく、三好氏の被官になった可能性がある。飯盛城の周辺の領主は、三箇島の三箇氏や飯盛城の東に位置する田原氏など三好長慶の被官となつた河内の在地領主がいる。右近もそのひとりと考えたい。

2、天下再興の戦い

永禄8（1565）年5月19日、將軍足利義輝が、三好三人衆や松永久秀らによって殺害された（史料79）。その前年三好長慶は病没し、後継の三好義継を擁しての強行であった。これにより、反三好方は活気づき、畠山方は各地の大名に出陣を要請はじめるのが、6月段階からで、「天下御再興」を促している（史料80・81）。8月には丹波で、松永久秀の弟内藤宗勝が自刃し、10月には大和方面では安見右近や筒井藤勝も活動を開始する（史料82）。11月15日には、三好三人衆が飯盛城を攻め、三好義継を奪う（史料83）。義継は、この時数え15歳であるから、どれだけ主体的な行動であったかわからない。これ以後、松永久秀と三好三人衆との関係は完全に断たれた。

この年のものと思われる12月18日付松永久秀宛遊佐教（信教）書状に、「安見右近允の儀、先書申し候如く、長々召し置かれ候」とあり、遊佐信教と松永久秀の同盟が成立していたことがわかる。そしてこの同盟の要として安見右近を長々召し置いてくださいと書いているのである（史料84）。右近は、一旦、三好被官となつたが、將軍暗殺を機に筒井藤勝らと連携して大和で蜂起し、これを見た遊佐教は、安見右近を松永久秀に与えて、天下再興の戦いを始めようとしたのであろう。以後、右近は久秀方として活動する（史料85）。

三好三人衆と松永久秀の戦いは、当初、三人衆方が圧倒的に有利であったが、永禄10年2月16

目に入ると、三好義継が松永久秀と同心する（史料 86・87）。そして、久秀は義継を伴い、信貴山城に入り（史料 88）、続いて多聞山城に入った。これにより三人衆方が奈良に結集し、遂に東大寺大仏殿炎上となるのである（史料 89）。

この頃になると、8月 23 日には飯盛城の松山安芸守が久秀方に寝返った（史料 90）。しかし、翌 9 月 6 日には三人衆方が飯盛城を取り戻している（史料 91）。更に、10 月 22 日には、飯盛城のすぐ東に当たる田原の坂上氏が久秀方に裏返ったため、久秀は多聞山から飯盛城に 500 人を入れている（史料 93）。また、永禄 11 年 1 月には河内の津田、南山城の田辺も久秀方となり、「河内通路これなし」といった状態であった（史料 94）。これに乗じて三好義継は、多聞山城から河内津田城に入城している（史料 95）。久秀方は、信貴山城や多聞山城などを本拠に南山城や北河内地域を一部掌握できる状態が生じたのである。さて、右近の活動だが、永禄 10 年 9 月 10 日に、大和で筒井方の井戸戦と戦い負傷している（史料 92）。右近は久秀の近く、大和方面で戦っているようである。

一方、前述したように、永禄 11 年 2 月 5 日付篠原長房がこの時期発給されている（史料 96）。これは、鷹山藤政の後継と思われる鷹山藤寿の訴訟によって出された古文書である。父野郡私部郷の内、鷹山氏が支配していた大塚分らの土地が没収されていたため、あらためて篠原長房が藤寿に与えたもので、忠功を勵むことを命じている。松永久秀が飯盛城・津田城・田原城を掌握しかけていた時期であり、私部城はそのなかで孤立していたと考えられる。このため、藤寿に私部郷を与えて北河内の状況を変えることが目的であったと見られる。この後、信長が上洛した時、飯盛城は三人衆方の城であるため、藤寿らは再び飯盛城を奪還したと見られる。

3、織田信長の上洛と私部城の登場

永禄 11 年 9 月 26 日、織田信長が足利義昭を伴って上洛した（『大日本史料』永禄 11 年 9 月 26 日条）。これにより、三好三人衆方は悉く没落し、畠山高政・秋高親子、三好義継、松永久秀や、三人衆方であった浜津池田氏などが義昭に帰参した。この時期の畿内の武士は、將軍足利義昭の幕府に結集したのであり、織田信長と被官関係を結んだのではない。

この時、畠山高政は高屋城に入り、三好義継は、飯盛城に入っている（史料 97）。義継が若江にいることは、松永久秀が永禄 13 年正月に若江に礼に向かったことから判明する（史料 100）ので、それ以前に義継は、飯盛城から若江城に移った模様である。これ以後、飯盛城は史料から姿を消す。北河内で軍事的に重要な城郭は津田城と私部城になり、政庁的な城は中河内の若江城に移動したことになる。

元亀元（1570）年 4 月、織田信長は上洛命令に従わない朝倉義景を討伐するため、越前に侵入した。この時、浅井長政が裏切ったため、信長は早くも京都に引き上げた。6 月 28 日、信長は、近江姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破るが、三好三人衆が浜津野田・福島で挙兵すると、信長は 8 月 30 日、將軍足利義昭を引き連れて三人衆攻めを始める。しかし、9 月 12 日、野田・福島にごく近い大坂本願寺の顕如も挙兵した。しかも、浅井・朝倉軍は北近江から山科・醍醐まで進出したため、9 月 23 日信長は京都に帰り、近江への軍を差し向けた。信長はこれ以後信長包囲網の中で苦しむことになる。

さて、この時期の京都からみて南方勢力には、「南方三好三人衆の事、野田・福島の普請を改め、諸牢人、河内・浜津国端々へ打ち廻し致すと雖も、高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫、片野に安見右近、伊丹、塩河・茨木・高瀬、何れも城々堅固に相拘へ」（史料 101）とあり、三好三人衆と大

坂本願寺勢力に対して、畠山秋高をはじめとする勢力を書き上げている。このなかにはじめて片野を本拠とする安見右近が登場するのである。河内では、守護クラスである畠山秋高や三好義継と安見右近の名前が併記されるのは、河内の中では私部城の安見右近が一定の統治権を持つ武将となっていたためであろう。更に、右近は、信長上洛以前の畿内での天下再興の戦いの中心人物のひとりであり、このためこのような待遇を受け、畠山・三好とならぶ武家として安見右近の名が挙がったものと思われる。

しかし、元亀2(1571)年5月11日、安見右近は松永久秀によって「西新屋小屋」で切腹した(史料102)。西新屋とは、元興寺極楽坊西側に当たるため、奈良市中で自刃したことになる。この時、松永久秀は、国衆に出陣命令を出したが、どこへの出陣が知らせず、この日、右近が自刃したのである。

この事件をどのように評価すべきだろうか。ひとつは、右近についてである。安見右近は、わざわざ私部から久秀に命じられて奈良市中に来て自刃した。これは、右近がこの段階でも松永久秀の被官であったと見られる。遊佐敷が久秀に右近を召し置かせてから、右近は久秀の被官として活動しなければならない立場だったと見られる。

自刃理由は、右近が和田惟政や畠山秋高らと申し合わせて敵になる企てがあったため、腹を切らせたとある。これを見ると、和田惟政と畠山秋高に対して松永久秀は対立関係に入ったことがわかる。久秀は、自刃後の右近の城私部城を攻めた後、三好三人衆とともに高麗城攻めを行っている。松永久秀はこれ以後も度々信長を裏切ることになるが、その最初の行為が安見右近の自刃事件だったのである。

右近は、単身で奈良に来たわけではなく、右近の家臣は奈良不退寺に陣取っていた。これに対して久秀方の菊川衆が対陣していた(史料104)。その後、松永方は、私部城を攻めている(史料

105～110)。しかし、私部城は堅固で落城しなかった。

翌元亀3年4月16日以前、久秀は、再び私部城攻めを始める。この時、城将として名前が挙がるのが安見新七郎である(史料115)。この時、久秀は、私部城攻めのため、私部に相城を造ったが織田勢に囲まれ、4月16日には相城から撤退している(史料112・113)。また、久秀は「ツタノ付城」も4月29日には落城しているので、私部城と津田城は連動して戦いが行われていたことがわかる(史料114)。この時期、若江城の三好義継も松永久秀と同心して本願寺方として戦っており、織田勢をはじめとする軍勢が私部城を護った。松永久秀・織田信長ともに私部城は軍事戦略上重要な城であったことがわかる。

4、私部城の最後

私部城の廃城時期については、具体的に文献に現れるわけではない。馬部氏によれば、私部城が最後に見えるのは『信長公記』天正6(1578)年10月1日条で堺の港で九鬼水軍の大船を見た信長が、住吉から「安見新七郎所」に暫く休息してから京都に上った史料を紹介している(史料116)。若江城のように天正8年8月2日の石山合戦終結で破城しており、私部城もこの時に破城したと考えられる。

なお、安見新七郎自身は、天正9年2月28日の京都での正親町天王の觀覽の下の馬捕では、河内の取次者として新七郎の名前があるため(史料117)、河内で健在であったと見られるが、その後については、具体的にはわからない。近世では、安見氏は上杉家を頼ったらしく、直江兼続の配下に安見氏がおり、兼続の娘に本多正信の次男政重が婿入りした時に、政重の家臣に安見氏が加わっている。その後、政重は会津を出て加賀前田家に帰参して家老となつた時も、安見氏は同道している(藩老本多藏品館の展示史料による)。

小括

Ⅱをまとめたい。永禄3年の三好長慶による河内支配以後、安見右近は三好に臣従したのか星田に拠点を据えていた。しかし、永禄8年の松永久秀・三好三人衆による將軍足利義輝の暗殺により、安見右近は畿内で最も早く軍事行動を起こした武将のひとりとなる。その後、三好三人衆と松永久秀による対立が先駆化して両者による戦争が始まった。遊佐教は松永久秀と組んで、安見右近を久秀に預けた。一方、私部郷の旧領主だった鷹山氏は藤寿の代で、私部郷を得ている。

永禄11年、織田信長が上洛を果たすと、私部城は安見右近の城として位置づけられる。しかし、右近は久秀被官であり、久秀の威光に反した右近は、奈良で自刃する。その後、私部城は安見新七郎が守るが、石山合戦後に被城したと考える。

まとめ

私部城が築城された時期は、文献史学から明確にはできなかったが、いくつかの点は明らかにできたと思われる。

ひとつは、交野が武家領となったのは、木沢長政の時代であるということである。

二つ目は、鷹山弘頼が私部に居館を構えたと考えられ、私部城の前身の居館を想定する必要がある。その後の鷹山藤政、鷹山藤寿も私部を拠点に活動した兆候がある一方、安見宗房や息子野尻満五郎も私部を押さえていた時期もあり、この時期に私部城が造られた可能性は残しておきたい。

三つ目は、安見右近の評価である。私部城主となった安見右近は、元々、星田の領主から私部城に移ったと見られるが、これは松永久秀の力に拠るところが大きいだろう。右近が河内のなかで飛びぬけた存在になったのは、信長上洛以前に畿内の戦争に深く関わり、大いに活躍したためである。

四つ目は、私部城は、当初、松永方の城として

位置づけられる側面があったことである。また、北河内の玄関口としても重要な城であり、南山城、北大和、北河内を繋ぐ重要な役割を果たす城として畿内の政治史に位置づける必要がある。

参考文献

- 交野市教育委員会 「私部城跡発掘調査概要報告書」Ⅰ 1995年
交野市文化財事業団編 『光通寺』 交野市教育委員会・交野市文化財事業団 1995年
片山長三 『交野町史』 交野町役場 1963年
鎌代敏雄 「枚方寺内町の構成と機能」『戦国期の石清水と本願寺』 法藏館 2008年
草野頼之 「一家衆の地域的役割—順興寺と枚方寺内町を中心に—」
　　『戦国期木願寺教团史の研究』 法藏館 2004年
小谷利明 『畿内戦国期守護と地域社会』 清文堂出版 2003年
小谷利明 「畠山植長の動向—永正から天文期の畿内—」
　　(矢田俊文編)『戦国期の権力と文書』 高志書院 2004年
小谷利明 「畿内戦国期守護と室町幕府」『日本史研究』510号 2005年
小谷利明 「中世の城郭と文芸」『大阪春秋』149号 (株)新風書房 2013年
中井 均 「交野城」『日本城郭体系』第12巻 大阪・兵庫 新人物往来社 1981年
中井 均 「交野城跡と北河内の城跡」
　　『まんだ地域文化誌』第16号 まんだ編集部 1982年
中西裕樹 「私部城」(『図説近畿中世城郭事典』) 城郭談話会 2004年
野田泰三 「鷹山氏と奥福院文書」
　　『古代中世史の探求 シリーズ歩く大和』 大和を歩く会 2005年
馬部隆弘 「城郭由緒の形成と山論—「津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実態—」
　　(『城館史料学』第2号) 城館史料学会 2004年
馬部隆弘 「牧・交野一揆の解体と織田政權」『史敏』6号 史敏刊行会 2009年
福島克彦 『戦争の日本史11 畿内・近国の大戦合戦』 吉川弘文館 2009年
八尾市立歴史民俗資料館 『動乱の河内』八尾市立歴史民俗資料館特別展図録 1993年
弓倉弘年 「中世後期畿内近国守護の研究」 清文堂出版 2006年
吉田知史 「わたしたちの文化財 私部城跡(交野城跡)」(『ヒストリア』233号)
　　大阪歴史学会 2012年
吉田知史 「私部城(交野城) 一信長の河内平定のクサビ、北河内の雄・安見氏の城—」
　　(『大阪春秋』149号) (株)新風書房 2013年